十世紀後半における仮名文学の諸相
――『蜻蛉日記』とその周辺――

庄司敏子

目次

凡例　3
序章　5
第Ⅰ部　『蜻蛉日記』の表現と同時代の享受
——下巻を中心に——　8
第一章　上巻・中巻の世界と享受
——師輔女および兄弟の記事を中心に——　9
第二章　伊尹・兼通・遠度関連記事と兼家　22
第三章　下巻「養女求婚記事」の「ほととぎす」
——上巻との照応——　34
第四章　下巻「養女求婚記事」における手紙
——破り取られた「いまさらに」詠を中心に——　46
第五章　下巻「養女求婚記事」における「女絵」　58
第Ⅱ部　藤原師輔子女周辺の文学活動
——伊尹・兼通・本院侍従を中心に——　70
第一章　『一条摂政御集』における伊尹と本院侍従　71
第二章　『本院侍従集』の贈答歌
——人物造型を中心に——　87
第三章　『本院侍従集』における兼通と安子周辺
——十世紀後半の家集・日記文学などとの関わり——　99

第四章　師輔子女周辺の文学作品における兼通の造型
――『蜻蛉日記』『本院侍従集』『多武峯少将物語』の比較から――　111
終章　119
初出一覧　125

凡例

・『蜻蛉日記』の本文は宮内庁書陵部蔵桂宮本（『桂宮本蜻蛉日記』笠間書院　一九八二）に拠り、私に校訂したものである。便宜上、引用末尾の括弧内に新全集の頁数を付した。

・『蜻蛉日記』の注釈書等とその略号は以下の通りである。

講義　喜多義勇『蜻蛉日記講義』改訂増補版　武蔵野書院　一九四四
新釈　次田潤・大西義明『かげろふの日記新釈』明治書院　一九六〇
全講　喜多義勇『全講蜻蛉日記』至文堂　一九六一
全注釈　柿本奨『蜻蛉日記全注釈　下巻』角川書店　一九六六
全集　『土佐日記　蜻蛉日記』（「蜻蛉日記」は木村正中・伊牟田経久校注）　日本古典文学全集　小学館　一九七三
集成　犬養廉『蜻蛉日記』新潮日本古典集成　新潮社　一九八二
新大系　『土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記』（「蜻蛉日記」は今西祐一郎校注）　新日本古典文学大系24　岩波書店　一九八九
解釈大成　上村悦子『蜻蛉日記解釈大成』第一巻～第九巻　明治書院　一九八三～一九九五
新全集　『土佐日記　蜻蛉日記』（「蜻蛉日記」は木村正中・伊牟田経久校注）　新編日本古典文学全集13　小学館　一九九五
角川ソフィア　川村裕子『新版　蜻蛉日記Ⅱ（下巻）』角川書店　二〇〇三

・『一条摂政御集』の本文は益田家旧蔵本（『一条摂政集　伝西行筆』二玄社　二〇〇三）に拠り、私に校訂した。

・『一条摂政御集』の注釈書等とその略号は以下の通りである。

注釈　平安文学輪読会『一条摂政御集注釈』塙書房　一九六七
新大系　犬養廉ほか『平安私家集』新日本古典文学大系28　岩波書店　一九九四

・『本院侍従集』の本文は冷泉家時雨亭文庫蔵本（『平安私家集　十』冷泉家時雨亭叢書第二十三巻　朝日新聞社　二〇〇四）に拠り、私に校訂した。ただし、必要に応じて穂久邇文庫蔵本の影印（『平安私家集』日本古典文学影印叢刊8　貴重本刊行会　一九七九）も使用し、異同を示している。

・『多武峯少将物語』の本文は酒井家旧蔵本（『たむの岑の少将物語』貴重古典籍刊行会　一九八一）に拠り、私に校訂した。

・右の諸作品に収載されたもの以外の和歌の引用については、断りのない限り『新編国歌大観』（角川書店）に拠る。

・その他の引用本文については、注あるいは章末に出典を示している。

序章

一、本論文の目的

本論文は、十世紀後半における仮名文学の諸相、とりわけ藤原師輔子女周辺の文学的営為を探ることを目的とする。

藤原忠平一門において、私家集が盛んに編纂されたことは知られている。十世紀後半においても概ねそれは継続していると言える。『蜻蛉日記』は私家集ではないが、ある種兼家の私家集的性格を有する作品としても定位されうる。こうした作品群について、成立に関わる事情の研究はなされてきたが、それと比較して享受の問題について十分に議論がなされてきたとは言い難い。『蜻蛉日記』においてもそれは同様である。私家集のように享受圏がある程度限定されている作品では、登場人物が読者となりうる。作品の成立および流布が段階的である場合は逆に、読者が次の登場人物となりうる。十世紀後半における当該作品群については、師輔の子女たちおよびその周辺の人々がそれに該当しよう。こうした者たちの記事に注目することで、『蜻蛉日記』を捉え直してゆくことは、作品の成立と同時に享受の問題を探るために有効であると思われる。また、同様の視座から、おおよそ同じ時期に同じ圏内で成立したと考えられる『一条摂政御集』および『本院侍従集』を検討することで、成立基盤であり第一次的な享受層でもある彼らの文学活動を明らかにすることが本論文の狙いである。

二、本論文の構成

まず**「第Ⅰ部　『蜻蛉日記』の表現と同時代の享受――下巻を中心に――」**では、師輔子女が登場する記事について、その当人たちが登場人物でありながら、あわせて『蜻蛉日記』の第一次享受者であったという見通しのもと、その記事の特徴および人物の描かれ方を考察してゆく。

「第一章　上巻・中巻の世界と享受――師輔女および兄弟の記事を中心に――」は、主に兼家妹である登子・怤子の記事群を考察するものである。当該記事群には、村上天皇の薨去記事、および後の円融天皇の記事がある。『蜻蛉日記』ではほとんど記されることのない天皇に関わる記事をここに入れた意図を、享受圏の問題とも関連付けながら考察してゆく。あわせて、中巻に名のみ記される師輔の兄弟たちについても検討を加えることとなる。

続けて、第Ⅰ部の中心となる下巻の考察に入る。従来の『蜻蛉日記』研究は、日記文学としての達成を重視する立場から、とりわけ中巻に関する論が集中してきた。それは、中巻の内容こそが、現代の読者から見て主題が明確に見えるということとも関わっているだろう。それに対して、下巻においては、上巻の序に示されたようないわゆる「蜻蛉的主題」、つまり道綱母と兼家との夫婦関係が描かれているという視点からのみでは説明しきれない記事が増えてゆく。そこで、『蜻蛉日記』が師輔子女周辺において生成された作品であると

いう視座から、下巻の新たな読みを試みる。**「第二章　伊尹・兼通・遠度関連記事と兼家」**では、兼家をとりまく状況に変化の訪れる天禄三年および天延二年に置かれた伊尹・兼通・遠度に関わる記事を、同時代の政治的状況と関連付けながら検討する。

「第三章　下巻「養女求婚記事」の「ほととぎす」　――上巻との照応――」では、遠度の和歌を検討することで、下巻の養女求婚記事が上巻の世界の部分的再現を図りつつも、それをいわば諧謔的なものに変換してゆくような形で記事として配置していることを論じる。こうした虚構は、和歌を詠んだ人物が実際に上巻を読んでいたか、あるいは作者が和歌に手を加えたとしても、読者の側が上巻を読んでいなければ意味を持たないものである。『蜻蛉日記』の成立と流布については諸説あるが、遠度が上巻を見ていたとすると、巻ごとの段階成立と、少なくとも上巻は成立直後に周辺に出回っていた可能性を考えざるを得ない。上巻の成立・流布の問題についても言及してゆくこととなる。

流布の問題と関連して、上巻のように纏まったものとは言い難いが、「書かれたもの」が近い関係者へと出回ってゆく過程がほのめかされている例として、養女求婚記事中の手紙に注目することができる。そこで、**「第四章　下巻「養女求婚記事」における手紙　――破り取られた「いまさらに」詠を中心に――」**では、手紙が養女求婚記事においてどのような機能を付されているのかを考察してゆく。求婚記事中の手紙が風変わりなものであること、求婚記事を展開させる重要な鍵であることは従来も言われてきた。しかし、手紙それ自体を詳細に検討する議論はなされていない。本章では、手紙を「破る」という行為、それを持ち出すという行為について、「自己言及テキスト」の視点を取り入れながら論じる。

「第五章　下巻「養女求婚記事」における「女絵」」では、「女絵」とそこに書きつけられた道綱母の和歌について論じる。「女絵」が恋愛の雰囲気を持つ絵であることから、従来はそこに道綱母と兼家、あるいは道綱母と遠度の姿を読みとる研究がなされてきた。本章では、絵の情景と和歌の内容を詳細に検討し、求婚記事全体を包含するような性質をとらえるとともに、絵が描かれた「紙」に道綱母の和歌が書きつけられ遠度に返されたことの意味を考察する。

次に**「第Ⅱ部　藤原師輔子女周辺の文学活動　――伊尹・兼通・本院侍従を中心に――」**では、『蜻蛉日記』とほぼ同時代に、近い場において成立したと思しき作品、『一条摂政御集』および『本院侍従集』を取りあげ、その特質をとらえてゆく。兼家の同母兄である伊尹および兼通と、彼らの家集を検討することで、『蜻蛉日記』を含む師輔子女周辺の文学的営為の一端を解明しようという狙いがある。

「第一章　『一条摂政御集』における伊尹と本院侍従」では、伊尹と本院侍従との関係性を、贈答歌の検討から考察する。『一条摂政御集』が成立するにあたって、本院侍従の協力があった可能性を指摘してゆくこととなる。また、他撰部に独詠歌群が収載される本院侍従を媒介として、『一条摂政御集』と『本院侍従集』との関連性について論じてゆく。

「第二章　『本院侍従集』の贈答歌　――人物造型を中心に――」では、冷泉家時雨亭文庫蔵本系本文による解釈が、流布本系本文では見えにくかった兼通および本院侍従の造型を明確にするのではないかという見通しのもと、贈答歌の検討をおこなう。『本院侍従集』

における兼通の造型については従来諸氏によって論じられているが、冷泉家時雨亭文庫蔵本系本文にも目配りし、より多面的に検討を進めることが求められる。本章では兼通と本院侍従との関係性にも注意しつつ、両者の造型を考察する。

続く「**第三章　『本院侍従集』における兼通と安子周辺 ――十世紀後半の家集・日記文学などとの関わり――**」も『本院侍従集』について論じる章である。本章では、本院侍従が安子に仕えていたという冒頭の記述、および末尾に収載された本院侍従の同僚と思しき女房との贈答歌群から、『本院侍従集』と安子周辺との関わりについて考察する。安子は師輔女で、兼通と同腹である。本院侍従も集冒頭の記述によると兼通の従妹とされている。こうした女性たちが、兼通のような権門の貴公子に恋の和歌を手ほどきするような役割を担っていた可能性についても考察を及ぼすこととなる。

最後に「**第四章　師輔子女周辺の文学作品における兼通の造型 ――『蜻蛉日記』『本院侍従集』『多武峯少将物語』の比較から――**」では、兼通が登場する三作品を横断的に検討することで、兼通が各作品においてどのように造型されているのかを考察する。兼通は滑稽な人物として描写されているとの評価がなされてきた。本章では個々の作品の成立事情および成立の目的、あるいは享受圏を詳細に検討することで、それぞれが独自の論理で兼通を描いていることを論じてゆく。

以上の構成により、『蜻蛉日記』および師輔子女周辺の作品群を多角的な視点から論じることで、この圏内における文学活動の総体に迫ることを目指す。

第Ⅰ部

『蜻蛉日記』の表現と同時代の享受

――下巻を中心に――

第一章

上巻・中巻の世界と享受
――師輔女および兄弟の記事を中心に――

一、はじめに

『蜻蛉日記』上巻、康保四年三月から安和元年七月の記事群には、兼家の妹である登子および怠子についての記述がある。それぞれ村上天皇、冷泉天皇に入内しているため、これらの記事は従来、章明親王ら貴顕との交流を記したものと同種の記事の一つとして位置づけられることが多かった（1）。また、登子が守平親王（後の円融天皇）の親代わりであったことから、当時の兼家の政治的動向を探る上で、資料として用いられてきた側面もある。

当該記事群は怠子とのやりとりを記した記事に始まり、村上天皇の崩御、冷泉天皇の践祚、そして「五の宮」すなわち守平親王への言及を含む登子関連の記事へと展開する。怠子とのやりとりを記した部分にも守平親王についての言及が見られる。『蜻蛉日記』に記された天暦八年から天延二年の間は村上・冷泉・円融三代の治世であるが、天皇および東宮について語られることは少なく、最も多く記されているのが当該記事群であるといってよい。加えて、ここに日記中唯一天皇の代替わりが記されていることには注目すべきであろう。しかし、その意味については斎藤［二〇一二］で論じられるまでほとんど検討されてこなかった。斎藤はこの記事の出来事を「御代替わりを視野に入れての動き」であったとし、「東宮問題がデリケートであった頃のエピソードとしてはやはり読み過ごすことは出来ないと思われる」という示唆に富んだ見解を示している。道綱母の関心の所在を読み取ろうとする議論に収束している点で本章とは方法が異なるものであるが、こうした見解は稿者も首肯するところである。後に詳しく検討するが、「五の宮」への言及も含め、当該記事はすでに円融天皇の治世が訪れることを踏まえつつ書かれたことが想定されるのである。上巻についてはこの点に注目し、兼家と円融天皇との関係を再確認しながら検討してゆく。

また、上巻における登子関連記事には、宮中より下がってきた登子と道綱母が同じ邸で過ごすという記述がある。道綱母は登子が移ってくる少し前にそこに転居するのだが、これは登子関連記事のほとんどが趣向を凝らした和歌のやりとりであることと関係があるものと考えられる。こうした見通しのもと、登子関連記事も再検討することとなる。

『蜻蛉日記』は、もちろん作者道綱母が夫である兼家との関わりを書き綴った作品として知られている。上巻については今西［二〇〇七］のように「「兼家の和歌的実績」を記す文章」ととらえる説がある一方で、やはり主軸は作者自身と夫たる兼家との関わり、あるいは、はかなき自身の身の上を描いている点にある、といったとらえ方が通説であろう。それゆえ、兼家との関わりをめぐる作者の内面を読み取ろうとする研究が積み重ねられてきた。本章はそうした従来の『蜻蛉日記』上巻のとらえ方、論じ方を否定するものではない。たしかに兼家との関わりと身の上についての感慨を記すという方向性は、上巻におい

てもおおよそは一貫している。しかしながら、本章でとりあげる記事群には、作者と兼家との直接的な関係にはおさまらない事柄が書かれている。しかも天皇、皇太子とその母代わりとなった女性などに言及している点で看過しがたいのである。そこで、従来の『蜻蛉日記』研究ではとらえきれなかった側面に光をあててみることとする。

あわせて、中巻にその名が記される師輔の兄弟たちについても確認する。『蜻蛉日記』中巻は安和二年から天禄二年までの三年間を記したものだが、彼らはその間にみな世を去っている。このことと、上巻にも下巻にも記されない彼らの名が中巻にのみ登場することには、何らかの関係があるのではないだろうか。安和二年の政変とも関連付けながらその意味を考えてゆく。

二、登子・怠子関連記事と円融天皇

まず、兼家の妹である登子と怠子について確認しておく（2）。登子は師輔二女である。天暦二年に重明親王の継室となり、親王薨去後は村上天皇の後宮に入った。安和二年には尚侍に任ぜられ、守平親王の養育にあたった。怠子は師輔六女である。当時東宮であった憲平親王妃となり、安和元年には兼家女超子とともに女御となる。冷泉天皇譲位後の天元五年に尚侍に任ぜられた。ともに伊尹、兼通、兼家らと同腹であったようである。

本章で検討する記事群は、村上天皇が崩御し、皇太子であった冷泉天皇が践祚するまさにそのときの出来事を記している。彼女らは兼家の妹というだけでなく、天皇との関係も深い人物であった。しかしここで気になるのが、斎藤論文でも指摘されているように、「五の宮」すなわち守平親王（後の円融天皇）について言及されている点である。次に当該の本文を掲げる。康保四年三月の記事である。

【本文1】

三月つごもりがたに、かりのこの見ゆるを、これ十づつ重ぬるわざをいかでせむとて、手まさぐりに生絹の糸を長う結びて、ひとつ結びてはゆひ、結びてはゆひして、引き立てたれば、いとよう重なりたり。なほあるよりはとて、九条殿の女御殿の御方に奉る。卯の花にぞつけたる。なにごともなく、ただ例の御文にて、端に、「この十重なりたるは、かうてもはべりぬべかりけり」とのみ聞こえたる御返り、

数知らず思ふ心にくらぶれば十重ぬるもものとやは見る

とあれば、御返り、

思ふほど知らではかひやあらざらむかへすがへすも数をこそ見め

それより、五の宮になむ、奉れたまふと聞く。（一五一～一五二頁）

『伊勢物語』五十段に「鳥の子を十づつ十はかさぬとも思はぬひとを思ふものかは」とあるように、卵を重ねることは難しく為しがたいことを示すのであろう。あるいは直接『伊勢物語』を意識していたのかもしれない。とにかくここで、道綱母は「かりのこ」を十個糸でつなげるという珍しいことができたという。そこで卯の花につけて「九条殿の女御殿

の御方」、すなわち怠子に奉ることにした。その「かりのこ」を怠子が「五の宮」すなわち立太子前の守平親王に奉ったという記事である。しかし、『蜻蛉日記』中で守平親王の養育を任されたとされるのは村上天皇から寵愛を受けていた登子であり、東宮憲平親王に入内していた怠子ではないのである。日記中、右の本文以外では怠子と守平親王との関係について特に言及がなく、また、そのような史料も管見の限りでは見つかっていない。推測の域を出ないが、両者には特に親密な交渉はなかったのではないだろうか。

では、なぜここで「かりのこ」が「五の宮」のもとへ渡ったのだろうか。そして、なぜこのエピソードが『蜻蛉日記』上巻のこの位置で言及されなければならなかったのか。前者の疑問については詳しい史料がないため検討のしようがないが、日記内部の検討から後者について推測することはできるのではないだろうか。その手掛かりとなるのが、次に掲げる【本文2】の記事である。同年五月の記事で、【本文1】の直後に記されている。

【本文2】

五月にもなりぬ。十余日に、内裏の御薬のことありてののしるほどもなくて、二十余日のほどに、かくれさせたまひぬ。東宮、すなはち代はりゐさせたまふ。東宮亮といひつる人は、蔵人頭などいひてののしれば、悲しびはおほかたのことにて、御よろこびといふことのみ聞こゆ。あひこたへなどして、すこし人ごこちすれど、わたくしの心はなほおなじごとあれど、ひきかへたるやうに騒がしくなどあり。

御陵やなにやと聞くに、時めきたまへる人々いかにと、思ひやりきこゆるに、あはれなり。やうやう日ごろになりて、貞観殿の御方に、いかになど聞こえけるついでに、

世の中をはかなきものとみささぎのうもるる山になげくらむやぞ

御返りごと、いと悲しげにて、

おくれじとうきみささぎに思ひ入る心は死出の山にやあるらむ

（一五二～一五三頁）

「貞観殿の御方」が登子である。村上天皇崩御とそれに伴う冷泉天皇の践祚に関する記述があり、東宮亮であった兼家が蔵人頭となったことにも言及がなされている。時間は【本文1】の記事から二ヶ月空いているが、両記事が連続して記されている点を考えても、天皇とその周辺を記した記事として【本文1】と【本文2】の連続性を認めてよいだろう(3)。直前の記事【本文1】における「かりのこ」のエピソードは、先行諸論のように貴顕との交流を書き記す流れの中に位置づけることもできるだろうが、【本文2】の記事につながるものとしてあえて「五の宮」守平親王に言及し、その存在を印象づけていると見ることもできる。守平親王の立太子は同年九月のことなので、【本文2】の時点においてそのことは記されない。そして、立太子についてはその後も日記中において明確に言及されることはない。しかし、怠子とのやりとりから冷泉天皇践祚までの一連の流れの中に、守平親王の名はさりげなく記されているのである。ところで、怠子と守平親王との関係性を描くことにどのような意図があったのか。あるいはなかったのか。この点については史料が乏しく、

本章で詳細な検討をする準備はない。怠子が憲平親王に入内していたことも関連している可能性もあるため、慎重に考えるべきであろう。

ここで、当該記事が執筆された時期についても確認しておく必要がある。上巻執筆時期については定説を見ないが（4）、安和二年の政変より後に書かれたとする見方も多いようだ（5）。冷泉天皇の治世は康保四年から安和二年である。つまり、おそらく当該記事執筆時点ではすでに円融天皇が即位していたか、あるいは周辺の動向からそうした兆候が見てとれたものと思われる。そうすると、上巻に記された守平親王の名は、執筆時点において天皇であった円融天皇と自分たちとの関係をほのめかすような役割も担っていたと想定できる。

三、兼家の動向と円融天皇　および安和の変に関して

次に、兼家と円融天皇との関係を改めて確認しておく。【本文2】にも「東宮亮といひつる人は、蔵人頭などいひてののしれば、悲しびはおほかたのことにて、御よろこびといふことのみ聞こゆ」と記されるように、村上天皇崩御による冷泉天皇践祚に伴い、兼家は東宮亮から蔵人頭になる。さらに、十月には左中将となったことが『公卿補任』などから認められる。『蜻蛉日記』において、このことは次に掲げる【本文3】の傍線部に描写されている。

【本文3】

かかる世に、中将にや三位にやなど、よろこびをしきりたる人は、「ところどころなる、いと障りしげければ、悪しきを、近うさりぬべきところいできたり」とて、渡して、乗物なきほどに、はひ渡るほどなれば、人は思ふやうなりと思ふべかめり。十一月なかのほどなり。（一五四頁）

兼家が従三位になるのは安和元年十一月なので約一年のずれが生じているが、冷泉天皇の治世の記述であると広く考えるとさほど大きな問題ではないのかもしれない。その後、安和二年二月には東宮大夫を兼任することとなる。当時の東宮は守平親王である。この前後で兼家周辺の状況は大きく変化したと考えてよいだろう。安和の変と呼ばれる一連の騒動である。『日本紀略』安和二年二月七日条によれば、安和の変は兼家が東宮大夫を兼ねることとなった除目の日に端を発しているとされる。

除目。左大臣高明行之。是日。右大臣師尹家人與中納言兼家卿家人闘乱。大臣家舎人一人被煞。大臣家人数百人出来。打破中納言家。此間。中納言家為兵三人。乱髪取鉾者四五人出来。大臣家射留一人。（6）

安和の変については先行諸論により検討がなされてきたが（7）、定説には至っていない。しかし、例えば山本、深沢、大津らは兼家を安和の変首謀者の一人と見ている。また山中、

土田、黒板らは兼家が中心となっていたとの見解は示さないものの、何らかの関与を指摘している。本章で首謀者や人物関係などの詳細を深く検討する用意はないが、兼家が何らかの形で関与していたことは先行諸論の示す通りであろう（8）。加えて、同年に即位する守平親王、すなわち円融天皇の践祚にかかわる問題もこの一連の騒動に多少なりとも関係していた可能性があるのではないだろうか。左に『日本紀略』より村上天皇崩御後から安和二年までの主な出来事を掲げる。

康保四　五月二十五日　天皇崩于清涼殿。（中略）皇太子受天祚於凝華舎。
　　二十七日　先帝御入棺。
　　六月四日　奉葬大行皇帝於村上山陵。
　　九月一日　立先皇第五皇子守平親王為皇太弟。年九。
　　四日　以藤原懐子為女御。
　　十月十一日　天皇於紫宸殿即位。
　　十二月十三日　以左大臣為太政大臣。以右大臣為左大臣。以大納言師尹朝臣為右大臣。

安和元　六月十四日　小除目。日来天皇時々御悩也。太政大臣又如此。仍内官除目于今延引。
　　十月十四日　中将兼家女超子入内。
　　二十六日　女御藤原懐子産第一皇子。花山院是也。
　　十二月七日　以従四位下藤原怤子。御簾殿。同超子為女御。

安和二　三月二十六日　以左大臣兼左近衛大将源高明。為大宰員外帥。以右大臣藤原師尹為左大臣。（中略）禁中騒動。殆如天慶之大乱。
　　八月十三日　天皇譲位於皇太子。新主於襲芳舎受禅。旧主年廿一。在位二年。新主年十一。令太政大臣摂行政事。如貞信公故事。又立弟師貞親王為皇太子。

村上天皇崩御から円融天皇即位までの間、兼家周辺では後宮政策を含む様々な駆け引きがあったと見られる。安和元年六月十四日条にあるように、冷泉天皇が病気がちであったことも無関係ではあるまい。東宮守平親王をめぐる皇位継承にかかわる問題が、一連の騒動の一端にはあったのであろう。

安和二年八月に円融天皇が即位すると、それに伴って兼家も東宮大夫の任を解かれる。そして、同年九月には正三位となる。円融天皇の即位をめぐる動向と兼家のこの時期の官職は、ある程度の関連性が認められるのである。両者の関係から考えると、先に検討した怤子の記事（【本文1】）に記された「五の宮」の名には、やはり執筆時期の状況が反映されていると考えるのが妥当であろう。

もちろん、『蜻蛉日記』が兼家の政治的栄達の道具として利用するために書かれたと積極的に考えることは難しいだろう。『蜻蛉日記』が夫兼家との関わりを主軸にした作品世界を形成していることは確かであり、政治的な思惑をその執筆動機として想定するつもりはない。ただし、作品の中で兼家という政治家の一面が捉えられていることも、また否定しがたいのである。それゆえ、天皇の即位という重大事への言及のしかたに注目することは意味があると考える。この年の記事（中巻）には、安和の変によって大宰府へ配流された源高明室である愛宮とのやりとりが七月頃まで記され、その後は円融天皇即位の八月に小一条左大臣藤原師尹五十賀の屏風歌詠進が記されるのみである。天皇の即位にかかわる上巻と中巻との記事の相違は、各巻の性質の違いによるものかもしれない。しかし、いずれにせよ兼家にとって冷泉天皇の即位以上に重要であったと思われる円融天皇の即位が記されないことには、上巻においてその立太子について直接言及することがない点とも併せて、注意しておく必要がある。

四、上巻における登子と道綱母

ここまで円融天皇を中心に検討を進めてきたが、ここで先の【本文３】の直後に続く登子関連記事にも目を向けてみたい。

【本文４】

十二月つごもりがたに、貞観殿の御方、この西なる方にまかでたまへり。つごもりの日になりて、儺などいふもの、こころみるを、まだ昼より、ごほごほはたはたとするに、ひとり笑みせられてあるほどに、明けぬれば、昼つかた、客人の御方、男なんどたちまじらねば、のどけし。われも、ののしるをば隣に聞きて、「待たるるものかは」なんどうち笑ひてあるほどに、あるもの、手まさぐりに、かいくりをあみたてて、贄にして、木を作りたるをのこの、片足に埴つきたるに担はせて、もて出でたるを、取り寄せて、ある色紙の端を脛におしつけて、それに書きつけて、あの御方に奉る。

かたこひや苦しかるらむ山賤のあふごなしとは見えぬものから

と聞こえたれば、海松の引干の短くおしきりたるを結ひ集めて、木の先に担ひかへさせて、細かりつるかたの足にも、ことの埴をも削りつけて、もとのよりも大きにて返したまへり。見れば、

山賤のあふご待ちいでてくらぶればこひまさりけるかたもありけり

日たくれば、節供まゐりなどすめる、こなたにもさやうになどして、十五日にも例のごとして過ぐしつ。

（一五四～一五五頁）

【本文５】

三月にもなりぬ。客人の御方にとおぼしかりける文を、もてたがへたり。見れば、なほしもあらで、「近きほどにまゐらむと思へど、『われならで』と思ふ人やはべらむと

て」など書いたり。年ごろ見たまひなれにたれば、かうもあるなめりと思ふに、なほもあらで、いと小さく書いつく。

松山のさし越えてしもあらじ世をわれによそへて騒ぐ波かな

とて、「あの御方にもてまゐれ」とて返しつ。見たまひてければ、すなはち御返りあり。

松島の風にしたがふ波なれば寄るかたにこそたちまさりけれ　（一五六頁）

【本文6】

この御方、東宮の御親のごとしてさぶらひたまへば、まゐりたまひぬべし。「かうてや」など、たびたび「しばししばし」とのたまへば、宵のほどにまゐりたり。時しもこそあれ、あなたに人の声すれば、「そそ」などのたまふに、聞きも入れねば、「宵惑ひしたまふやうに聞こゆるを、ろなうむつかしられたまふは。はや」とのたまへば、「乳母なくとも」とて、しぶしぶなるに、もの歩みきて、聞こえたてば、のどかならで帰りぬ。またの日の暮に、まゐりたまひぬ。　（一五六～一五七頁）

【本文7】

五月に、帝の御服ぬぎにまかでたまふに、さきのごと、こなたになどあるを、「夢にものしく見えし」など言ひて、あなたにまかでたまへり。さて、しばしば夢のさとしありければ、「ちがふるわざもがな」とて、七月、月のいと明きに、かくのたまへり。

見し夢をちがへわびぬる秋の夜ぞ寝がたきものと思ひ知りぬる

御返り、

さもこそはちがふる夢はかたからめあはでほど経る身さへ憂きかな

たちかへり、

あふと見し夢になかなかくらされてなごり恋しく覚めぬなりけり

とのたまへれば、また、

こと絶ゆるうつつやなにぞなかなかに夢は通ひ路ありといふものを

また、『こと絶ゆる』はなにごとぞ。あな、まがまがし」とて、

かはと見てゆかぬ心をながむればいとどゆゆしくいひやはつべき

とある御返り、

渡らねばをちかた人になれる身を心ばかりは淵瀬やはわく

となむ、夜一夜いひける。　（一五七～一五八頁）

前節にて引用した【本文3】にあるように、康保四年十一月、道綱母は兼家邸からほど近い場所に転居する。そして、【本文4】の冒頭に、十二月末には道綱母の移り住んだ邸の西の方に貞観殿登子が下がってきたと書かれている。これ以降、二人の趣向を凝らしたやりとりが記されていくこととなるのである。【本文6】の記事には東宮守平親王の名も見え、先に見た怠子の記事との連続性も認められる。しかもここでは、破線部のように「この御

方、東宮の御親のごとしてさぶらひたまへば」とわざわざ記されていることから、登子と守平親王との密接な関係が印象づけられていると言える。

一連の記事について水野［一九八一］では、兼家と登子との接近、および守平親王とのつながりを指摘しつつも、この記事がなぜ日記に収められたのかという点には触れていない。しかし、当該記事群が上巻執筆時点での作者および兼家周辺の状況に即して書かれた可能性があることは先に述べた通りであり、こうした記事が上巻に含まれる意味を重視すべきである。

本章でさらに検討したいのは、登子退出の直前に道綱母が兼家邸のそばに転居している点である。転居の理由は【本文3】の破線部に、「ところどころなる、いと障りしげければ、悪しきを、近うさりぬべきところいできたり」と記されている。しかし道綱母転居の翌月に、いくら兼家の妹とはいえ、亡き村上天皇および現東宮と近しい関係にある女性が同じ邸に突然下がってくるということがありえたのだろうか。むしろ登子がここに移ることが先に決まっていたと仮定すると納得しやすいのではないか。すなわち、道綱母の転居には、登子の相手をする目的があったと考えられるのである。

日記中、特に上巻には応和年間にすでに章明親王との歌のやりとりが記され、近い時期では怨子とも歌を交わしていたことが確認される。そうすると、道綱母はこのとき、一時的に、和歌などの文才を活かして高貴な女性の相手をする役割を担う者として、兼家邸のそばに迎えられたと考えてよいのではないか。

文才のある女性を女房として迎えることは、紫式部や清少納言、大斎院付きの女房たちなどの例によって知られるところである。一方、道綱母はいわゆる「家の女性」であり、女房経験はないとされる。こうした女性が『蜻蛉日記』のようなものを書く例が極めて稀であったからこそ、この作品が評価されてきた面もあるだろう。しかし、上巻における一連の登子関連記事には、「家の女性」にとどまらない道綱母の立場が垣間見える。すなわち、一時的に登子の文芸面における世話役のような立場で関わったととらえることもできるのではないか。以上のことは、従来とは異なる視点からの作品読解を可能にする。

例えば今西［二〇〇七］は、道綱母の歌の管理者としての性質を次のように指摘する。

> ……道綱母は、本人が世に認められた歌人であると同時に、兼家の歌の管理者という一面も担っていたということではないか。というより、歌人なればこそ、歌の管理者の任をも担えたということであったかもしれない。

また同論文では、

> ……『蜻蛉日記』上巻が兼家の詠草筆録という役割を帯びていたとすれば、道綱母は、「家の女性」でありながら、しかし摂関家有力者兼家の私家集的なるものの編纂という役目を担うことによって摂関家文壇に関与していたことになり、後宮社会とも無縁の存在ではなかった、といえるからである。

とも述べられ、後の「女房日記」に連なるものとしての文学史的位置づけが考察されている。「後宮社会」とのかかわり、および「女房日記」なるものへの連続性（9）についてはなお慎重に検討する必要があろうが、少なくとも「家の女性」であるにもかかわらず、それ以上の役割を持っていた（10）ことは、登子との関わりなどから積極的に考えるべきであろう。本節では登子関連記事から道綱母が和歌などの文才を活かすための場が与えられていた女性であったことを読み取り、単なる「家の女性」にとどまらない点に注目した。実は当該の記事群だけではなく、安和二年八月の師尹五十賀屏風歌の依頼、および中巻における登子との交流記事なども、こうした道綱母の立場と関連するものであったという見通しを稿者は持っており、今後検討したい。

五、中巻における師輔の兄弟たちの名

ここまで上巻について、師輔の女である登子・怤子の記事に注目してきた。ここで、中巻における師輔の兄弟たちについても確認しておく。中巻で名が記される師輔の兄弟は、実頼・師氏・師尹の三人である。上巻にも下巻にも記されない彼らの名が中巻にのみ登場することには何か意味があるのだろうか。先にも言及した安和二年の政変とも関連付けながら、その意味を考えてゆく。

本文に記されている順に、該当する記事を掲げる。

【本文8】師尹　安和二年八月

そのころ、小一条の左大臣の御とて、世にののしる。左衛門督の、御屏風のことせらるるとて、えさるまじきたよりをはからひて、責めらるることあり。……（一八四頁）

【本文9】実頼　天禄元年五月

かくて経るほどに、その月のつごもりに、「小野の宮の大臣かくれさせたまひぬ」とて世は騒ぐ……　（一九二頁）

【本文10】実頼　天禄元年七月

失せたまひぬる小野の宮の大臣の御召人どもあり。……　（二〇三頁）

【本文11】師氏　天禄二年七月

未の時ばかりに、この按察使大納言の領じたまひし宇治の院にいたりたり。…（中略）…ここに按察使殿のおはして、ものなどおこせたまふめりしは、あはれにもありけるかな……　（二五八～二五九頁）

これらすべての記事において、名を記された本人が大きく取り上げられることはない。しかし、安和二年の大きな政変に多少なりとも関与していたと思しき実頼・師氏・師尹らの

名を中巻にのみ記している点には注意してもよいのではないか。【本文９】に実頼薨去記事があるように、彼らはみな、中巻に書かれている安和二年から天禄二年の間に世を去る（11）。この間に、兼家周辺では世代交代ともいうべき状況が起こっていたと言ってよいだろう（12）。それは、後に振り返ったとき、兼家が権力を手にしてゆく過程のいくつかの転換点のうちの一つであると位置づけることができよう。師輔の兄弟たちに関わる記事は、事情を知る読者たちにこうした状況をほのめかしている可能性がある。

もちろん、これらの記事から作者が彼らの存在を強調しているのだと考えることは難しい。石山詣で（【本文10】）あるいは初瀬詣で（【本文11】）のように、兼家との関係を記してゆくような比較的長い記事中に記されているものもあり、彼らの名が目立つとは言えないのである。しかし作者周辺、ひいては兼家周辺にいたと思われる読者たちは、その名を見て気づくところがあったのではないだろうか。推測の域を出ない問題ではあるが、一つの可能性として指摘しておく。なお、世代交代により権力を手に入れた伊尹および兼通は、下巻でのみ言及がなされる。彼らへの言及は名を記すだけでなくエピソードを描くものであるが、中巻における師輔の兄弟たちに関わる記述はこうした現象とも連動しているのかもしれない。

六、おわりに

以上検討してきたように、上巻における登子・怠子関連記事には、従来の研究において見落とされてきた部分が少なからず見られた。怠子にかかわる記事に「五の宮」守平親王の名が記されたことには、自分たちが執筆時の帝とつながっていたことをほのめかすような効果があったと考えられる。

また、登子関連記事からは、道綱母のいわゆる「家の女性」にとどまらない在り方を検討した。実際の女房の活動とはまったく異なるだろうが、宮中から退出してきた登子を楽しませるために転居したと思しき点、およびその後、登子と和歌を中心としたやりとりを繰り返している点から、たまたま「家の女性」が高貴な人物との交流をもったということではなく、道綱母の文才を活かす場が与えられていたのだととらえた。登子とのやりとりは必然的に行われたという解釈も可能であろう。道綱母がどのような立場の女性であったかという点をさらに検討していくことで、今後『蜻蛉日記』の文学史的位置づけの議論を更新していくことも、あるいは可能かもしれない。

あわせて、中巻における師輔の兄弟たちの名が記される記事についても私見を述べた。中巻には安和二年の高明追放に関わる記事があるが、この政変により兼家を取り巻く情勢に変化が起こったであろうことが推測できる。中巻のみに記された実頼・師氏・師尹の名は、これら一連の政変と彼らの死去による世代交代を読者に想起させた可能性もあるのではないだろうか。

最後に、円融天皇を鍵として『蜻蛉日記』を捉えなおすと、本章で取り上げた点だけでなく、他にも興味深い問題がいくつか浮かび上がってくることを指摘しておきたい。例え

ば、次に引用する下巻冒頭の記事は日記中で唯一年次が記される箇所だが、ここには円融天皇の元服についても触れられている。

かくてまた明けぬれば天禄三年といふめり。ことしも、憂きもつらきもともにここち晴れておぼえなどして、大夫装束かせて出だし立つ。おり走りてやがて拝するを見れば、いとどゆゆしうおぼえて涙ぐまし。行ひもせばやと思ふ今宵より、不浄なることあるべし。これ、人忌むといふことなるを、またいかならむとてにかと、心ひとつに思ふ。今年は天下に憎き人ありとも、思ひ嘆かじなど、しめりて思へば、いと心やすし。三日は帝の御冠とて、世は騒ぐ。白馬やなどといへども、ここちすさましうて七日も過ぎぬ。（二六九頁）

中巻では円融天皇に直接言及しないのに対して、下巻冒頭では「帝の御冠」と明示するのである。安和の変以後の状況にも注意しつつ、執筆時期や執筆目的などとも併せてこの記述は再検討される必要があるだろう。こうした問題を当面の課題とし、さらに考察を進めていきたい。

《注》

（1）守屋［一九七五］、水野［一九八六］、水野［一九九〇］、石原［一九九〇］、岡田［一九九四］、渡辺［二〇〇〇］などがある。

（2）『尊卑分脈』（『新訂増補国史大系』第五十八巻　吉川弘文館　一九六六）、および『平安時代史事典』（角川書店　一九九九）を参考にして私にまとめた。『平安時代史事典』の執筆担当は「藤原登子」が芝野眞理子、「藤原怤子」が関口力である。

（3）伊牟田［一九六五］では、

……かりのこを糸でつなぎたてて九条殿の女御（師輔の娘、怤子）に献上したという記事は、かなり独立性の強いものであり、しかも、故事や古歌を踏まえた機智のもつ明るさと晴れがましさが感じられるために、それ以前のはかなき身の上の記事とそぐわないような印象を与えるのではなかろうか。

と述べられている。確かにそれ以前の記事からの連続性は認めがたいが、以降の記事との連続性については人物の関係から積極的に認めてよいように思われる。

（4）有力な説としては安和二年の高明追放を契機として執筆されたと想定するもの、天禄二年の鳴滝籠りを契機として執筆されたと想定するものなどがある。また、上巻に関しては個別的成立説が有力であるが、その場合、数カ月ないしは半年程度の執筆期間があったものと推定されている。

（5）執筆時期を安和二年と想定するものは、守屋［一九六五］、古賀［一九六八］など数多くある。

（6）以下、『日本紀略』の記事は『新訂増補国史大系』第十一巻（吉川弘文館　一九二九）より抜粋した。返り点は省略している。

（7）安和の変については、山中［一九六二］、山本［一九六五］、土田［一九六五］、山口［一九七六］、黒板［一九六九］、深沢［一九八一］、大津［二〇〇一］などに詳しい。

（8）木村［一九八〇］でも、「……陰謀への加担の有無にはかかわらず、かれがこの複雑な政局の中で、自らの地歩を固めるべく、政治的手腕を発揮して身を処していたさまは、十分に察せられるのである」と考察している。

（9）今西［二〇〇七］では「女房日記」という術語が使用されているが、稿者は「文才を活かすことを期待されて女房となった女性による作品」と広く捉えることで、『蜻蛉日記』との影響関係が見てとれるのではないかという見通しを持っている。

（10）「女房」でも「妻」でもないような立場の女性が当時存在していた可能性が『栄花物語』などの歴史物語から読み取れることを桜井宏徳氏よりご教示いただいた。

（11）『日本紀略』によると、実頼は天禄元年五月、師氏は天禄元年七月、師尹は安和二年十月にそれぞれ薨去している。

（12）大津［二〇〇一］では、

安和の変の五ヵ月後に冷泉天皇は退位し、皇太弟の守平親王が即位する。円融天皇であるが、時にまだ十一歳であり、当然後見を必要とし、太政大臣実頼がこんどは摂政となった。しかし翌天禄元年（九七〇）五月に実頼は七十一歳で没し、安和の変の首謀者で左大臣となった師尹も数ヵ月前に没しており、師輔の長男で右大臣になったばかりの伊尹が摂政となった。上席の左大臣に藤原在衡がいたが、七十九歳の老齢で、年の内に没してしまうので、伊尹は天皇の外戚（外祖父）というだけでなく太政官のトップでもあった。師輔の子どもの世代に政治権力がうつり、孫の世代が天皇位につくことになったのである。……

と述べられる。

《参考文献・引用文献》

石原　昭平［一九九〇］『蜻蛉日記』の構造」『蜻蛉日記』女流日記文学講座第二巻　勉誠社

今西祐一郎［二〇〇七］『蜻蛉日記』の役目」『蜻蛉日記覚書』岩波書店

伊牟田経久［一九六五］『かげろふ日記』上巻の表現と構成」『言語と文芸』明治書院

岡田　博子［一九九四］「贈答独詠と文脈展開」『蜻蛉日記の作品構成』新典社

大津　透　［二〇〇一］「摂関制度の変遷」『道長と宮廷社会』日本の歴史06　講談社

木村　正中［一九八〇］『鑑賞日本の古典7　蜻蛉日記・和泉式部日記・紫式部日記・更級日記』尚学図書

黒板　伸夫［一九六九］「摂関制展開期における賜姓源氏――特に安和の変を中心として――」『古代学』15‐4　古代学協会（『摂関時代史論集』　吉川弘文館　一九八〇に再録）
古賀　典子［一九六八］「『蜻蛉日記』上巻の成立に関する私論」『語文研究』25　九州大学国語国文学会
斎藤菜穂子［二〇一二］『蜻蛉日記』上巻の御代替わり考」『中古文学』90　中古文学会
土田　直鎮［一九六五］「王朝の貴族」『日本の歴史』5　中央公論社
深沢三千男［一九八一］「安和の変における道綱母の役割について――蜻蛉日記より見たる――」『平安時代の歴史と文学　文学編』吉川弘文館
水野　隆　［一九八一］「兼家――蜻蛉日記から見た冷泉朝における兼家――」『一冊の講座　蜻蛉日記』一冊の講座　有精堂
水野　隆　［一九八六］「蜻蛉日記上巻における記事構成の方法――和歌を中心にして――」　今井卓爾博士喜寿記念論集編集委員会編『源氏物語とその前後』桜楓社
水野　隆　［一九九〇］「右大将道綱母の歌人としての交遊」『蜻蛉日記』女流日記文学講座第二巻　勉誠社
守屋　省吾［一九六五］「蜻蛉日記上巻の成立について」『日本文学』14　立教大学
守屋　省吾［一九七五］「道綱母における私家集篇集の自律的必然性」『蜻蛉日記形成論』笠間書院
山口　博　［一九六七］「源高明と藤原氏――西宮左大臣集成立の一問題」『王朝歌壇の研究　村上冷泉円融朝篇』桜風社
山中　裕　［一九六二］「栄花物語・大鏡に現れた安和の変」『日本歴史』168　日本歴史学会（河北騰編『大鏡・栄花物語』国書刊行会　一九八八に再録）
山本　信吉［一九六五］「冷泉朝における小野宮家・九条家をめぐって――安和の変の周辺――」古代学協会編『摂関時代史の研究』吉川弘文館
渡辺　久寿［二〇〇〇］「道綱母が兼家に最も近かった時――『蜻蛉日記』における「家移り」と妻意識――」守屋省吾編『論集日記文学の地平』新典社

第二章　伊尹・兼通・遠度関連記事と兼家

一、はじめに

『蜻蛉日記』上巻は、その私家集的な和歌の配列や「歌物語的」と評されるような性格により、「摂関家歌壇」（1）という枠組みの中で捉えられ、これは近年でも支持されている。山口［一九六七ａ］が「摂関家歌壇」という言葉を使って以来、この考え方は、細かな成立事情の想定は異なるものの、諸氏に引き継がれたと言ってよい。守屋［一九七五ａ］では、『蜻蛉日記』成立の前提としての「兼家集」の存在を想定しているが、これも山口［一九六七ａ］の流れをくむ論である。そして、今西［一九八九］は『蜻蛉日記』上巻の「兼家集」的性格をより明確に論じた。

しかし、以上のような論考は、ほとんどが『蜻蛉日記』上巻に対象を絞ったものであり、また、特に『一条摂政御集』や『本院侍従集』など、『蜻蛉日記』につながる要素をもっている他作品との比較・検討を含みもっていたように思う。『一条摂政御集』や『本院侍従集』について、それぞれの成立事情や影響関係を考察したものには、山口［一九六七ｂ］、守屋［一九七五ｂ］及び守屋［一九七五ｃ］、妹尾［二〇〇三］があり、各氏が成立の前後関係を詳細に考察している。例えば山口［一九六七ｂ］は、『一条摂政御集』『本院侍従集』の両書は天禄三年頃の成立であるが、その頃には『蜻蛉日記』上巻が世間に流布していたと推定する。一方、妹尾［二〇〇三］は『とよかげ』『本院侍従集』『多武峯少将物語』が『蜻蛉日記』以前に成立しており、それらの成立の影響を受けて兼家が道綱母に作らせたものが『蜻蛉日記』であると論じる。このように、『蜻蛉日記』と他の作品との成立の前後については定説を見ていない。

ところで、上巻以外の記述から、忠平一門の流れをくむ文学としての『蜻蛉日記』の位置付けを考えることはできないだろうか。本章では、特に下巻の記事に注目し、『蜻蛉日記』の位置を考えていく手がかりとしたい。先行研究における「摂関家文学」とは、十世紀から十一世紀初頭にかけて摂関家及びその周辺で成立した文学作品を指すが、それらのすべてが政治の世界と深くかかわっているわけではない。しかし、本来的に政治性を有する磁場と無縁ではないがゆえに、政治に絡む事象が垣間見えることは少なくない。また、示唆的に政治関係のことをあらわすということもあり得る。『蜻蛉日記』下巻については、これまでそのような文脈で論じられることがなく、むしろ記事の多様性について問題とするものが多かった。秋山［一九五六］は下巻に「妻の運命の諦観」を見、自分の周辺の人生を客観的に書き進めたものだと論じ、木村［一九六一］は、下巻で主題が分裂し、それが拡大・拡散しているのだと述べた（2）。また、宮崎［一九七二］は秋山［一九五六］の「諦観」という読みを天禄三年の自然観照の記事から部分的には認めつつも、下巻は作者の関心の転移と心境の推移の叙述であり、兼家への執着に諦観をもたらそうと努める過程であると論じる。一方、記事の多様性を道綱母にとっての兼家との関わりということから切り

離さずに読むのが守屋［一九八一］、水野［一九九五］である。守屋［一九八一］は、下巻は兼家との直接的な関わりを中心とした求心的方法が遠心的方法に変化したと論じ、水野［一九九五］は、基本的には主題性の分裂や蜻蛉的世界の終焉を認めつつも、下巻の記事は蜻蛉的主題に対する積極的側面をも持っていると述べている。これらからわかるように、従来『蜻蛉日記』下巻については消極的な評価が少なくなく、積極的に捉える場合でも、その叙述から作者の兼家に対する思いを読み取ろうとするような方向に限定されていたようである。しかし、兼家周辺という政治性の強い磁場において生成された文学作品を対象とするとき、果たして一貫する作品の主題というものを前提とするような読解がどこまで妥当なのであろうか。本章では、道綱母と兼家との夫婦関係について記されているはずの書物というような先入観を排し、先に述べた忠平一門における文学の中での『蜻蛉日記』下巻を捉えるという視座から、新たな読みを試みたい。ただし、これまでの下巻の読み方を全面的に否定するものではなく、従来の論でも従うべき点は積極的に認めた上での読みの試みであることを言い添えておく。

下巻において本章で特に注目したいのは、伊尹についての記事が天禄三年に見られること、また兼通に関する記事と伊尹の子息の記事、さらには遠度による養女求婚の記事がいずれも天延二年に入れられていることである。なぜなら、この天禄三年、及び天延二年という年は、兼家をとりまく政治的状況に変化の訪れる年だと言えるからである。これらを手がかりに、『蜻蛉日記』下巻の持つ政治的性格を捉えていくこととなろう。なお、「政治的性格」とは、政治に直接言及している作品、あるいは権力者の資格を認められるような作品という意味ではなく、政治の世界におかれている兼家の姿を捉えて叙述している作品というような意味で使用している。従って、権力者の資格としての「いろごのみ」を表現している（3）と論じられてきたような上巻とはその性質を異にするものである。

二、伊尹に関する記事と兼家――天禄三年の記事を中心に――

まず、伊尹に関する記事を見ていきたい。伊尹の記事は、天禄三（九七二）年四月と同年十一月に見える。

【本文1】

ここにも、物忌しげくて、四月は十余日になりにたれば、世には祭とてののしるなり。人、「忍びて」とさそへば、禊よりはじめて見る。わたくしの御幣奉らむとて詣でたれば、一条の太政大臣詣であひたまへり。いといかめしうののしるなどいへばさらなり。さし歩みなどしたまへるさま、いたう似たまへるかなと思ふに、大方の儀式も、これに劣ることあらじかし。これを、「あなめでた、いかなる人」など、思ふ人も聞く人も言ふを聞くぞ、いとどものはおぼえけむかし。　（天禄三年四月、二九七～二九八頁）

【本文2】

ついたちの日、「一条の太政大臣、失せたまひぬ」とののしる。例の、「あないみじ」など言ひて聞きあへる夜、初雪七八寸のほどたまれり。あはれ、いかできんだち歩みたまふらむなど、わがすることもなきままに、思ひをれば、例の世の中いよいよさかえののしる。十二月の二十日あまりに見えたり。　（天禄三年十一月、三〇八頁）

【本文１】の記事では、点線部で伊尹の素晴らしい姿が兼家に似ているとし、兼家も太政大臣である伊尹に劣ることはないのだと書かれている。点線部の叙述を見る限り、兼家のことが大いに意識された記事であることは間違いなく、これは諸氏も指摘される通りであろう（4）。しかし、さらにここには、兼家の栄華の布石となるような事態をあえて言語化しようとする意識があるのではないだろうか。

それは【本文２】の記事からもうかがえる。伊尹の死に言及した【本文２】において注目すべきは、二重傍線部「例の世の中、いよいよさかえののしる」という一文である。「例の世の中」とは兼家のことと考えてよいだろう。しかし、天禄三年に伊尹が亡くなった後、兼家はしばらくその官職が上がっていない（5）。むしろ、このときに大いに出世したのは兼通で、兼家にとっては兼通の死後しばらく経つまで不遇の時代が続くことになる。では、この一文はどのように解釈すべきなのか。諸注釈では、①作者の勘違いとするもの、②「例の世の中」を時姫との仲とするもの、③出世はしていないが、権力は増したと解釈するもの、④事実とは異なるが、あえて華やかな姿を記したとするもの、という四通りに解釈されている（6）。しかし、このような大きな問題に対して、「作者の勘違い」の可能性は低いと思われるし、「時姫との仲」というのも、ここの文脈では考えにくい。「権力が増した」というのは、伊尹の死後、兼家の娘で冷泉院女御である超子が後宮で勢力を増したということはあったようだが、官位は不遇、しかも兼通も娘の入内を図っていたため、この時点で「いよいよさかえののしる」というほどのものではなかったと考えて差し支えないであろう。そこで、ここでは④の解釈をとりたい（7）。繰り返すが、天禄三年十一月の時点で、兼家は明らかに政治的に不利な状況であった。そこで二重傍線部のように「例の世の中、いよいよさかえののしる」というあえて華やかな姿の記述がなされたことは、まさにこのときから兼家不遇の時代に入るにもかかわらず、その後の兼家の権力奪取を予感させるという面があると考えられる。さらにいえば、兼家不遇の時代に入るからこそ、このような記述をしたと思われるのである。

次に、伊尹の子息の記事を見る。

【本文３】

皰瘡、世界にもさかりにて、この一条の太政の大殿の少将二人ながら、その月の十六日に亡くなりぬと言ひ騒ぐ。思ひやるもいみじきことかぎりなし。これを聞くも、おこたりにたる人ぞゆゆしき。…（中略）…二十日あまりに、いとめづらしき文にて、「助はいかにぞ。ここなる人はみなおこたりにたるに、いかなれば見えざらむと、おぼつかなさになむ。いと憎くしたまふめれば、疎むとはなうて、いどみなむ過ぎにけ

る。忘れぬことはありながら」とこまやかなるを、あやしとぞ思ふ。返りごと、問ひたる人の上ばかり書きて、端に「まこと、忘るるは、さもやはべらむ」と書きてものしつ。

（天延二年九月、三五二～三五三頁）

ここで、点線部「おこたりにたる人」とは道綱である。【本文1】及び【本文2】に見られたような伊尹と兼家の対比とはその位相が異なるが、亡くなった伊尹の息子たちと、病気が癒えたわが子道綱とが対照的に記されている。【本文3】後半の傍線部に兼家からの「こまやかなる」文が記述されていることに注目すると、ここでの道綱は、道綱母の子であるという以上に兼家の子であるという点が強調されていることがうかがわれる。兼家の存在がここに記されることで、この記事の意味付けがなされているのである。つまり、伊尹の子息たちに対する兼家の子息道綱の優位性とでもいうべきものがこの叙述から読み取れるのである。天延二年は、すでに伊尹も亡くなり、兼家も不遇の時期である。そのような時期に【本文3】の記事が置かれていることにはどのような意味があるのだろうか。次節で、他の天延二年の記事と合わせてさらに検討したい。

三、養女求婚記事と兼通――天延二年の記事を中心に――

天延二（九七四）年二月二十八日に兼通が太政大臣となり、兼家の政治的立場はますます苦しいものとなってくる。天延二年という年も、先ほど見た天禄三年と同様、政治家としての兼家にとって大きな意味を持つ年であっただろう。その天延二年に大きく据えられている記事が、いわゆる「遠度求婚譚」である。この求婚譚については多くの論があるが、特にここ数十年は道綱母と遠度との男女の交渉について盛んに論じられている(8)。一方、倉田［二〇〇六ａ］及び倉田［二〇〇六ｂ］のように遠度の求婚作法からこの求婚譚を読み取ろうという新しい方法も提示されている。こうした先行論文に導かれつつ、ここでは遠度の養女求婚記事の部分、及びその少しあとの兼通から贈られる文に関する記事までの中から、表現の上で特に重要だと思われる箇所を検討していきたい。それは、求婚者遠度を批判的に描いている場面と、兼通のどこか滑稽ともいえる姿である。

次に挙げる【本文4】、【本文5】は、遠度に関する記事である。

【本文4】

……雨うち乱る暮にて、蛙の声、いと高し…（中略）…いたう更けぬれば、「助の君の御いそぎも近うなりにたらむを、そのほどの雑役をだにつかうまつらむ。殿に、かうなむ仰せられしと、御気色給はりて、またのたまはせむこと聞こえさせに、明日明後日のほどにもさぶらふべし」とあれば、立つななりとて、几帳のほころびよりかきわけて見出せば、簀子にともしたりつる火は、はやう消えにけり。うちにはもののしりへにともしたれば、光ありて、外の消えぬるも知られぬなりけり。影もや見えつらむと思ふに、あさましうて、「腹黒う、消えぬとものたまはせで」と言へば、「なにかは」と、さぶらふ人も答へて、立ちにけり。

（天延二年四月、三三一～三三三頁）

【本文5】

……七月中の十日ばかりになりぬ。頭の君、いとあざるれば、われを頼みたるかなと思ふほどに、ある人の言ふやう、「右馬頭の君は、もとの妻をぬすみとりてなむ、あるところにかくれゐたまへる。いみじうをこなることになむ、世にも言ひ騒ぐなる」と聞きつれば、われは、かぎりなくめやすいことをも聞くかな、月の過ぐるに、いかに言ひやらむと思ひつるに、と思うものから、あやしの心やはと思ひけむかし。さてまた文あり。見れば、人しも問ひたらむやうに、「いで、あなあさまし。心にもあらぬことを聞こえさせ、八月にもすまじ。かからぬ筋にてもとりきこえさすることはべりしかば、さりとも」などぞある。

（天延二年七月、三五〇～三五一頁）

【本文4】には、簀子に灯した明かりが消えているにもかかわらずそれを言わずにいた遠度が、もしかすると明かりのついた御簾の中をうかがっていたかもしれないと書かれており、その遠度の態度に、道綱母は傍線部のように「腹黒う、消えぬとものたまはせで」と批判を口にする。この遠度の振る舞いは、求婚記事において「例も清げなる人の、練りそしたる着て、なよよかなる直衣、太刀ひき佩き、例のごとなれど、赤色の扇、すこし乱れたるをもてまさぐりて、風はやきほどに、纓吹きあげられつつ立てるさま、絵にかきたるやうなり」（下巻・天延二年四月）などと、貴公子としてその容姿が描写される人物のものとはとても思えない。ここでは、どこか非常識な人物として遠度が描かれている。さらに【本文5】の求婚譚に終止符が打たれる記事では、遠度が盗んだのが「もとの妻」ではなく「人の妻」であるとする改訂案もあるが、傍線部「ぬすみとりて」という事態は、「いみじうをこなることになむ、世にも言ひ騒」がれるほどに非常識で滑稽な行動であったのだろう。また、遠度から道綱母に届いた文の文言もここでは滑稽に響いている。ここで終焉を迎える求婚譚それ自体が滑稽なものであったとも捉えられる終わり方となっているのである。

実は、【本文4】及び【本文5】のような遠度の描かれ方は、求婚の後日譚とも言える記事での兼通の描かれ方にも深く関係しているようである。次の【本文6】及び【本文7】は兼通登場記事の前提となる記事、【本文8】は兼通登場記事である。どれも天延二年の記事として収められている。

【本文6】

「……八月待つほどは、そこにびびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも聞こえてむかし」などあり。たはぶれと思ふほどに、たびたびかかれば、あやしう思ひて、「ここにはもよほしきこゆるにはあらず。いとうるさくはべれば、『すべてここにはのたまふまじきことなり』とものしはべるを、なほぞあめれば、見たまへあまりてなむ。さて、なでふことにもはべるかな。

いまさらにいかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を

あなまばゆ」とものしけり。

（天延二年四月、三四〇～三四一頁）

【本文7】

「いかなることにかはべらむ。いかでこれをだにうけたまはらむ」とて、あまたたび責められるれば、げにとも知らせむ、ことばにては言ひにくきをと思ひて、…（中略）…かたはなべきところは破り取りてさし出でたれば、簀子にすべり出でて、おぼろなる月にあてて、久しう見て入りぬ。「紙の色にさへ紛れて、さらにえ見えたまへず。昼さぶらひて見たまへむ」とてさし入れつ。…（中略）…これなること、ほのかにも見たり顔にも言はで、ただ、「ここにわずらひはべりしほどの近うなれば、つつしむべきものなりと人も言へば、心細うもののおぼえはべること」とて、をりをりにそのことも聞こえぬほどにしのびてうち誦ずることぞある。…（中略）…

昨夜見せし文、枕上にあるをみれば、わが破ると思ひしところはことにて、また破れたるところあるは、あやし、と思ふは、かの返りごとせしに、「いかなる駒か」とありしことの、とかく書きつけたりしを、破り取りたるなべし。

（天延二年五月、三四七～三四八頁）

【本文8】

……宵のほど、火ともし、台などものしたるほどに、せうととおぼしき人、近うはひ寄りて、懐より、陸奥紙にてひきむすびたる文の、枯れたる薄にさしたるを、取り出でたり。…（中略）…開けて、火影に見れば、心つきなき人の手の筋にいとよう似たり。書いたることは、「かの『いかなる駒か』とありけむはいかが、

霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつけてしがな

あな心苦し」とぞある。わが人に言ひやりて、くやしと思ひしことの七文字なれば、いとあやし。「こはなぞ」と「堀川殿の御ことにや」と問へば、「太政大臣の文なり。御随身にあるそれがしなむ、殿にもて来たりけるを、『おはせず』と言ひけれど、『なほたしかに』とてなむ置きてける」と言ふ。…（中略）…かくおろかには思はざりけめど、いとなほざりなりや、

ささわけばあれこそまさめ草枯れの駒なつくべき森のしたかは

とぞ聞こえける。ある人の言ふやう、「これが返し、いまひとたびせむとて、なからまではあそばしたなるを、『末なむまだしき』とのたまふなる」と聞きて、久しうなりぬるなむ、をかしかりける。

（天延二年十一月、三五四～三五六頁）

【本文6】は、遠度の度重なる道綱母邸への訪れに、二人の関係を疑った兼家からの文の返事として、二重傍線部「いまさらに」の歌を文につける場面であり、【本文7】は養女との結婚に関する兼家の意向を遠度に伝えるため、道綱母が兼家からの文を直接見せようとするが、誤って【本文6】の二重傍線部「いまさらに」の歌を見られてしまうという場面

である。これら【本文６】及び【本文７】の場面の後日譚として、【本文８】がある。【本文８】は、兼家の兄兼通から道綱母のもとに文が届く場面である。

【本文８】に描かれる兼通の姿は、弟でライバルである兼家の妻妾の一人（道綱母）に懸想をし、しかも結局は失敗してしまうという滑稽なものである。先に挙げた遠度の記事と合わせると、この二人の描かれ方には、懸想が失敗してしまうというだけではなく、その過程で非常識な姿や滑稽な姿を曝け出してしまうという共通点が見出されよう。また、【本文６】【本文７】【本文８】の二重傍線部「いまさらに」の歌の伝達についても注目されるところである（この点について、詳しくは本論文の第Ⅰ部第四章で論じる）。【本文７】において、この記述の直後に描かれた遠度の、道綱に対する「みだり風」のため「午時ばかりにおはしませ」という知らせや、「例よりもひきつくろひて、らうたげに書いた」文には、まるで何かを企んでいるかのような不自然さがあり、ここからも遠度がこの歌を見たということが示唆されている。その後、ここでは記されないが、遠度から兼通へという伝達が行われたのであろう。この歌は道綱母から兼家におくられただけでなく、道綱母から遠度、そして遠度から兼通へと廻っていくこととなる。この歌の伝達経路を見ると、遠度が『蜻蛉日記』下巻における兼通・兼家を位置づけるキーパーソンとなっているのではないかと思われる。そして、遠度と兼通の両者が天延二年に描かれたことで、兼家を取り巻く政治の世界が作品内にほのめかされていると捉えることが可能となるのではないか。両者が天延二年にしか描かれていないということも、この考えを補強するように思われる。兼通を「堀川殿」といいながら、すぐに「太政大臣」と官職を強調するかのような表現で言い直すところも重要である。また、先に扱った【本文３】、伊尹の子息たちの疱瘡の記事がこの場面の近くにあるということも注目に値する。『蜻蛉日記』下巻においては、天延二年という、兼家をとりまく状況が不利な時期に、伊尹の子息に言及して道綱と対比させるような叙述をなし、さらには遠度と兼通を滑稽な姿に、からかっているように描く。『蜻蛉日記』下巻には兄弟間の緊張・対立関係がとりこまれており、あわせて兼家側の将来の優勢を予見させるかのような叙述をも見出すことができるのである。

ところで、兼通のこのような滑稽な側面については、『多武峯少将物語』の記述が『蜻蛉日記』と類似している。

宮のこのかみの、殿にて人たまへるついでに、ようさりつかた、月のほのかなるに、立寄り給へり。

「昔きくやどのありしへに、いかにぞや。山人はしのびてをり給ふや。あいなく、
　あしひきのやまよりいでむやまびこはそまやま水におとせざらなむ」

と聞え給へれば、「いとうれしく立ち寄りて問はせ給へるを、はじめはうれしかりつれども、のちの御ことばにさしあやまちて、いとどしく、さまも見えて」とて、歌の返しは聞え給はず。さかしらのやうにも人もこそ聞け。をとこのきむたちは、しばしこそあはれがり給ひしか。愛宮ぞおぼしやむことなかりける。

「宮のこのかみ」は兼通のことであると思われる。高光の突然の出家に高光妻や妹愛宮が悲しみに暮れている中、師氏邸を訪れた兼通が高光妻に懸想をし、失敗するというのがこの場面である。この状況はまさに【本文8】と似通っている。異なるのは、『蜻蛉日記』では兼通が返歌できないのに対し、『多武峯少将物語』では高光妻が返事をしないことであるが、どちらも兼通の滑稽な姿を描いたものとして、その造型には大差がないと思われる。これら二つの記事について新田［一九八七］では実際の遠度や兼通の性格にその類似性を還元する（9）。しかし、より重要なのは、実際の人物がどうであったかを詮索することよりも、作者と同時代読者との共同によって、遠度・兼通らの作中における性格が作り上げられているという可能性を再検討することではないか。『多武峯少将物語』の作者や読者についてはまだ解明されていないことが多いのだが、『蜻蛉日記』については、少なくとも作者や主要な登場人物が兼家側の人間であることは確かであろう。その享受者については、上巻・冒頭部の「天下の人のしなたりきやととはんためしにもせよかしとおほゆるも……」という文言によると、（校訂しないままでは解釈しにくい本文であるが）自分のように権門の子息と結ばれた者に関心を寄せそうな女性たちを読者として想定しているようにも思わせられるが、おそらくこれは一種のポーズであろうと思う。詳細は別稿で論じることになるが、『蜻蛉日記』の享受者は師輔子女たち及びその周辺の人々、特に兼家側の人間が多かったのではないかと考えている。もしそうであるならば、遠度や兼通の性格をあえて滑稽に描く必然性があるということにもなろう。『多武峯少将物語』及びこうした作品群の享受者の問題については、稿を改めて論じたい。

四、『蜻蛉日記』下巻とその成立
――むすびにかえて――

『蜻蛉日記』は従来、忠平一門の中で編まれていた私家集に代わる「『兼家集』的作品」であるという位置づけがなされてきたが、それは上巻のみの性格として、歌物語的私家集に似た構造であるという側面、また、伊尹の『一条摂政御集』や兼通の『本院侍従集』などとの類似性があるという側面のみから論じられてきた。しかし、以上見てきたように『蜻蛉日記』下巻には師輔子息及びその周辺の状況において、兼家側の優位を示唆するような記述が含まれている。日記の内容が常に史実と一致するというわけではないが、【本文2】の天禄三年十一月の記事では明らかな史実との食い違いが見られた。この一文も、兼家の後の栄華を予感させるものと見ることができる。さらに大胆な見方をすれば、これらの記述からは、伊尹の後継者たる兼家の正統性を示唆していると読み取ることも可能ではないだろうか。また、天延二年の記事についても、兼通の行動をどこか滑稽に、揶揄したように描くことでその政権を批判的に描いていることが考えられる。兼通方に通じていたと目される遠度までも、はじめは養女への求婚者として立派な姿が描写されていたにもかかわらず、徐々に批判の対象として滑稽に描かれていくことからもそれはうかがえよう。中でも、特に兼通の記事については『多武峯少将物語』における記述との関連性が注目されるところである。人物造型にここまで共通点が見られるということは、単に兼通に対する同

時代の共通認識があったというだけでは済まされないものがあるはずである。おそらく『多武峯少将物語』についても、政治的状況と関わり合って、作者が何者かにプラスになるような叙述をしたのであろうと思われるが、この点は今後の課題としたい。

ここで、『蜻蛉日記』下巻の成立時期に触れておく必要がある。『蜻蛉日記』の成立については定説を見ないが、現在では各巻がそれぞれ別の時期に書かれたとする考え方が優勢である。特に下巻に限って見てみると、天元五（九八二）年頃という説や、天延二（九七四）年の末、あるいはそれから程遠からぬ時期とする説、天禄二（九七一）年の鳴滝籠り以降は日記的に筆を進めたとする説など、さまざまある。もし天禄三（九七二）年や天延二（九七四）年の記事が兼家の栄華の布石だとすれば、兼家が右大臣となった天元元（九七八）年以降の執筆と考えられるだろう。あるいは、不遇の時期である天禄三（九七二）年から貞元二（九七七）年の間に、兼家の栄華を願って書かれたとも考えられる。木村［一九七三］は「例の世の中、いよいよさかえののしる」という記述から、貞元二（九七七）年十月以前と推定している。しかし、「例の世の中、いよいよさかえののしる」という強い表現や、下巻に描かれた遠度や兼通の滑稽な姿には、既に権力を握った者の余裕のようなものが感じられはしないだろうか。あえて想定するのならば、『蜻蛉日記』下巻は天元元（九七八）年以降、兼家が昇進してからまとめられたものと考えるのが妥当であろう。

最後に、兼通の場面に繋がる養女求婚記事の和歌の問題だが、ここでは文によって道綱母の歌が兼家・遠度に、さらにその後は兼通にまで伝わってしまうというところに、兄弟たちの繋がりが見えそうである。道綱母・兼家・遠度の間の情報伝達と、兼通・遠度の間にあったであろう、作品中では描かれない情報伝達には、兼通・兼家間にあった表向きの権力争いとは別の、遠度を媒介とする、水面下における兄弟間のネットワークが垣間見える。大変興味深く、今後検討すべき問題となろう。

兼家の依頼があってのことかどうかは一旦置いておくとしても、『蜻蛉日記』下巻には、文学に託しつつ、したたかに、兼家側にとってプラスとなるような世界が構築されているのではないか。本章ではそのような部分を特にとりあげてみたわけである。ここに、上巻とは異なる次元での政治的性格を見ることができると思われる。もちろん、今回扱った記事において従来のような解釈、例えば「道綱母と遠度との男女の交渉」などという読みを否定するわけではない。表面上は「男女の交渉」をほのめかす要素を取り入れて叙述されているとしても、そこに同時に政治的とも言えるような性格を包みこんでいるのではないか。そこに、この文学作品のしたたかさがあると考える。

『蜻蛉日記』下巻には、従来論じられてきた主題性の問題だけでなく、新しい視点から考察すべき問題がまだ点在しているように思われる。今後も特に師輔子女周辺の文学作品としての下巻について考察を重ねてゆきたい。

《注》

（1）山口［一九六七ａ］において使用されているが、この時期に「歌壇」というものが存在したかどうかは疑問である。

（2）木村［一九八一］にも論じられている。

（3）たとえば、山口［一九六七ｂ］や守屋［二〇〇二］などで指摘される。

（4）たとえば白井［一九九六］は、「下巻では、これら兼家の兄弟のことを記事にした場合には、必ずその前後に、兼家との交渉を描いた記事か、兼家のことを思っている記事かを配置している。（中略）下巻前半部は、兼家との関係において、身の上の不安を覚えているという記事が主になっているわけであり、したがって、伊尹に兼家を重ね合わせて見たという記事は、単に偶発的な体験を記しただけという底のものではないはずである」と指摘する。

（5）『尊卑分脈』によると、「……天禄元八五右大将　同三年正廿四権大納言　閏二廿九大納言　天延三正廿六按察使　貞元二十十一遷治部卿　同日止大将坐事　天元々十二任右大臣即従二位　同二年三廿八正二位　寛和二六廿三摂政賜内舎人近衛才為随身兵仗　同年七廿辞右大臣　同月廿二従一位新帝即位日……」とあり、兼家の出世の道が開かれるのは天元元（九七八）年になってからである（『新訂増補国史大系』第五十八巻、吉川弘文館、一九六六より引用）。

（6）主な注釈書の立場は以下の通りである。

①……講義、全講

②……大系、新釈

③……全注釈、全集、集成、新大系、新全集

④……解釈大成

（7）（6）④の上村［一九九二］では、「事実と違っても、『蜻蛉日記』の中には兼家の栄えている花やかな姿は書いても逼塞した姿は書こうとしていない作者の執筆姿勢によるものにも注目すべきであろうと思う」と指摘されている。この解説は、少なくとも下巻に関しては首肯すべきものであろう。

（8）主なもののみ挙げる。石坂［一九八一］、川村［一九八四］、川村［一九八六］、守屋［一九九一］、金子［一九九三］、川名［二〇〇〇］。

（9）新田［一九八七］では、『蜻蛉日記』の素材となった道綱母の現実生活と、『多武峰少将物語』の作中人物のそれとがまさに同一の時点にあって、その上同じ交際圏に属していたのであってみれば、日常生活における出来事や、贈答歌の技法において、二つの作品の間に共通するところ甚だ多かったとしても何ら不思議ではない。この二つの作品は、まさに同一期の同一の生活基盤から生じたものに他ならず、しかもそれぞれが、ありのままに写し取るという方法を原則として採用している以上、写し取られた現実生活が、甚だしく類似し、共通する趣を持つに到るのは至極当然でなければならない」と指摘する。

《参考文献・引用文献》

秋山　虔　［一九五六］『蜻蛉日記』アテネ文庫　古典解説シリーズ21、弘文堂

石坂　妙子［一九八一］「「世の中」の変容②――遠度求婚譚」『文芸研究』97

今西祐一郎［一九八九］「歌・家集・蜻蛉日記」『新日本古典文学大系　土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記』岩波書店

上村　悦子［一九九二］『蜻蛉日記解釈大成　第七巻』明治書院

金子富佐子［一九九三］『蜻蛉日記』下巻試論――〝遠度求婚〟の記事の方法――」『日記文学研究　第一集』新典社

川名　淳子［二〇〇〇］「男と女の媒体としての「女絵」――『蜻蛉日記』下巻「女絵」の記事から――」『論集日記文学の地平』新典社

川村　裕子［一九八四］「蜻蛉日記下巻の一考察――遠度求婚譚をめぐって――」『立教大学日本文学』52

川村　裕子［一九八六］「蜻蛉日記をめぐる人々――藤原遠度とその周辺――」『活水日文』15

木村　正中［一九六一］「蜻蛉日記下巻の構造」日本文学協会『日本文学』10‐4

木村　正中［一九七三］「解説」『日本古典文学全集　蜻蛉日記』小学館

木村　正中［一九八一］「蜻蛉日記の主題」『一冊の講座』編集部編『蜻蛉日記』有精堂

倉田　実　［二〇〇六ａ］『蜻蛉日記』の養女求婚譚」『大妻女子大学紀要―文系―』38

倉田　実　［二〇〇六ｂ］『蜻蛉日記』道綱母と藤原遠度」『大妻国文』37

白井たつ子［一九九六］「兼家に関する記事の維持」『蜻蛉日記の風姿』「第二章　『蜻蛉日記』の構成」風間書房

妹尾　好信［二〇〇三］『蜻蛉日記』と『更級日記』の執筆契機考」『王朝和歌・日記文学試論』第五章「日記文学成立論」新典社

新田　孝子［一九八七］『多武峰少将物語』と『蜻蛉日記』との関係」『多武峰少将物語の様式』風間書房

水野　隆　［一九九五］「蜻蛉日記下巻の記事構成の方法に関する試論――巻末歌集重複歌「今さらに」を中心にして――」上村悦子先生頌寿記念論集編集委員会編『王朝日記の新研究』笠間書院

宮崎　荘平［一九七二］「蜻蛉日記の形成」『平安女流日記文学の研究』笠間書院

守屋　省吾［一九七五ａ］「道綱母における私家集纂集の他律的要因」『蜻蛉日記形成論』笠間書院

守屋　省吾［一九七五ｂ］『一条摂政御集』「とよかげ」の部の形成要因」（守屋前掲書）

守屋　省吾［一九七五ｃ］「藤原兼通における歌人的実像と虚像」（守屋前掲書）

守屋　省吾［一九八一］「蜻蛉日記下巻の研究と解釈」『一冊の講座』編集部編『一冊の講座　蜻蛉日記』有精堂

守屋　省吾［一九九一］「蜻蛉日記下巻考――遠度求婚の経緯をめぐって――」木村正中編『論集日記文学　日記文学の方法と展開』笠間書院

守屋　省吾［二〇〇二］『日記文学事典』「蜻蛉日記」の項　勉誠出版
山口　博［一九六七ａ］「摂関家歌壇と私家集」『王朝歌壇の研究　村上冷泉円融朝篇』桜風社
山口　博［一九六七ｂ］「歌人兼家と蜻蛉日記」『王朝歌壇の研究　村上冷泉円融朝篇』桜風社

第三章

下巻「養女求婚記事」の「ほととぎす」
―― 上巻との照応 ――

一、はじめに

『蜻蛉日記』下巻でもっとも「物語的」あるいは「説話的」であるとされてきた記事に、天延二年の養女求婚記事（1）がある。この記事については多くの論が提示されてきたが、特にここ数十年は道綱母と遠度との「男女の交渉」について盛んに論じられている（2）ほか、養女求婚記事が下巻執筆の重要な要素であったと評価する論も散見される（3）。近年では遠度の求婚作法から一連の記事を読みとろうとしたり（4）、贈答歌に注目することで「結婚忌避」の心情を考察したり（5）するような新たな方法も提示されてはいるものの、大半の議論が、上巻の序に集約されている『蜻蛉日記』の主題とみなされてきたものとの整合性を考えるものであった。

しかし、『蜻蛉日記』下巻について、一貫する作品の主題というものを前提とした読解がどこまで妥当なのかは疑問である。なぜなら、『蜻蛉日記』下巻の記事は上巻及び中巻と比較して内容が多様化し、また人間関係も複雑化するため、道綱母と兼家との関係のみに回収しきれないような問題がどうしても残されてしまうからである。この養女求婚記事についても、上巻冒頭の序に縛られない解釈の可能性を残していると思われる。

本章ではこのような観点から、養女求婚記事における遠度の和歌を中心に検討することで、主に表現面、構成面における上巻との関わりを改めて指摘していきたい。遠度の和歌は日記中に全五首が収められているが、中でも道綱母とのやりとりに注目すると、そのすべてに、上巻の早い時期に収められた和歌およびその周辺の表現との対応が見られる。構成面では、両者ともに「ほととぎす」を用いた贈答を経て求婚がなされ、「なげきつつ」という初句をもつ歌で男女の関係に危機が訪れるという点に注目する。このように見てゆくと、養女求婚記事は従来論じられてきた以上に上巻の世界を強く踏まえたものであり、遠度の和歌はその部分的再現を図っているとさえ言えそうである。とはいえ、求婚をめぐる滑稽とも言うべき騒動の中で、遠度の和歌は上巻の世界をなぞりつつも、それをいわば諧謔的なものに変換していくような形で日記中に配列されていると考えられるのである。

なお、この議論をするにあたり、上巻成立の時期と流布の範囲について言及しておく必要があろう。上巻の執筆および成立については、先学により幾度も議論がなされているにもかかわらず決定的な説を見ないが、有力な説としては安和二年の高明追放を契機として執筆されたと想定するもの、天禄二年の鳴滝籠りを契機として執筆されたと想定するものなどがある。いずれにせよ、上巻の執筆開始を天禄三年以降と想定するものは少ない。また、上巻に関しては個別的成立説が有力であるが、その場合、数カ月ないしは半年程度の執筆期間があったものと推定されている。つまり上巻は、下巻に収められた最初の年である天禄三年までには成立していたとの想定が優勢であり、論者もこの想定は妥当であると

考えている。流布の範囲については、これもはっきり結論づけることはできないのだが、遠度あるいは兼通のように、権力に近い場にいた人々およびその周辺で享受されていた可能性を積極的に考えてよいのではないか。つまり、養女求婚が行われた時期、和歌を贈った遠度が上巻の内容を知っていたと想定しうるのである。そう考えると、遠度が自ら上巻をもどくような和歌を詠み、またそれを受け取った作者はより対応のわかりやすい歌の配列を意識してこの記事を構成しているのではないかという推測も可能であろう。

二、養女求婚記事における和歌の配列

まず、以下に遠度の和歌全五首を引用しておく。本章で特に検討するのは【本文2】【本文3】【本文5】の記事である。

【本文1】

……そのほどに雨降れど、いとほしとて出づるほどに、文取りて帰りたるを見れば、紅の薄様一襲にて、紅梅につけたり。ことばは、『石上』といふことは知ろしめしたらむかし。

春雨にぬれたる花の枝よりも人知れぬ身の袖ぞわりなき

あが君、あが君。なほおはしませ」と書きて、などにかあらむ、「あが君」とある上はかい消ちたり。

（天延二年二月、三二六頁）

【本文2】

……「よしよし、かう夜昼まゐり来ては、いとどはるかになりなむ」とて、入らで、とばかり助と物語して、立ちて、硯、紙と乞ひたり。出だしたれば、書きて、おしひねりて入れていぬ。見れば、

「ちぎりおきし四月はいかにほととぎすわがみのうきにかけはなれつつ

いかにしはべらまし。屈しいたくこそ。暮にを」と書いたり。手もいと恥づかしげなりや。返りごと、やがて追ひて書く。

なほしのべ花たちばなの枝やなきあふひすぎぬる四月なれども

（天延二年四月、三三三～三三五頁）

【本文3】

……まだつとめて、「いとあやにくに、松明とものたまはせで帰らせたまふめりしは、たひらかにやと聞こえさせになむ。

ほととぎすまたとふべくも語らはでかへる山路のこぐらかりけむ

こそいとほしう」と書きてものしたり。さしおきてくれば、かれより、

「とふ声はいつとなけれどほととぎすあけてくやしきものをこそ思へ

と、いたうかいこまりたまはりぬ」とのみあり。

（天延二年四月、三三七頁）

【本文４】

……夜さへかけてやまねば、えものせで、「情なし。消息をだに」とて、「いとわりなき雨に障りてわびはべり。かばかり、

たえずゆくわがなか川の水まさりをちなる人ぞ恋しかりける」

返りごと、

あはぬせを恋しと思はば思ふどちへむなか川にわれをすませよ

などあるほどに、暮れはてて、雨やみたるに、みづからなり。

（天延二年五月、三四五～三四六頁）

【本文５】

……まだしきにかれより、「さまかはりたる人々ものしはべりしに、日も暮れてなむ、使ひもまゐりにける。

なげきつつ明かし暮らせば　ほととぎす　みのうのはなの　かげになりつつ

いかにしはべらむ。今宵はかしこまり」とさへあり。返りごとは、「昨日かへりにこそはべりけめ。なにか、さまではとあやしく、

かげにしもなどかなるなむうの花の枝にしのばぬ心とぞ聞く」

とて、上かい消ちて、端に、「かたはなるここちしはべりや」と書いたり。

（天延二年五月～六月、三四九～三五〇頁）

次に、当該記事において遠度の和歌がどのような位置に置かれているのかを見ておきたい。左に挙げるのは、天延二年二月から同年十月までの中心的な記事を整理したものである。先に引用した遠度の和歌が詠まれた時期をあわせて記している。

二月　求婚開始、結婚の承諾をめぐる手紙　【本文１】
三月　結婚の日取りをめぐる手紙
四月　遠度来訪　【本文２】
　結婚の日取りをめぐる手紙　【本文３】
　〈道綱母と兼家との手紙のやりとり　後掲【本文９】〉
　〈道綱母と遠度との手紙　後掲【本文７】〉
五月　〈端午の節句の様子　後掲【本文８】〉
　遠度と道綱とのやりとり　【本文４】
　〈兼家と道綱母との手紙をめぐる事件　後掲【本文10】〉
五月から六月　遠度からの手紙　【本文５】
七月　破談、遠度からの手紙
十月　兼通からの手紙

こうして遠度の和歌全五首の配列を確認すると、二月の求婚開始から七月の破談直前までに置かれていることがわかる。つまり、養女求婚の展開に沿って、遠度の和歌も配置されているのである。

【本文１】の和歌が詠まれたのは求婚のはじめである。ここには上巻と類似するような表現は見られず、この時点で道綱母側から遠度への求婚に対する返答もまだない。次の【本文２】は道綱母に対する詠みかけだが、ここで「ほととぎす」という語を使うことで、上巻の求婚を想起させる形になっている。つまり、ここからが上巻の求婚記事のはじまりと対応しているとも考えられるのである。また、【本文５】の記事は、結婚が破談になってしまう少し前におかれている。正確には、【本文５】の記事のあと遠基の死が遠度から伝えられ、直後に七月の記事にうつるという形だが、この【本文５】が結果的には求婚の最終段階であると見て間違いない。こうした求婚記事の終末部に「なげきつつ」という上巻を思わせるような表現を含む和歌が置かれていることから、上巻の兼家による求婚を想起させるような構成意識をくみ取ってよいのではないか。

では、それを確認するため具体的な表現の検討に入りたい。

三、「ほととぎす」の場面

『蜻蛉日記』における「ほととぎす」については、すでに諸氏により論じられている。西木［一九六八］は日記中の全用例について検討し、「贈答歌のすべてに季節感覚としての「ほととぎす」が詠み込まれて」いることを指摘した。一方、神尾［二〇〇四］は「ほととぎす」について、「とくに、その鳴き声は男性からの五月の求愛、あるいは、その求愛に応じる女君を映像とする」と考察する。この神尾論文は下巻の「ほととぎす」が上巻の兼家からの求婚を想起させるものであるとする点で首肯できるが、下巻については、女君が求愛に応じることがないため、上巻の型とは異なるものであると論じるにとどまっている。この点については、さらなる検討を要するのではないか。三田村［一九九一］においても下巻の「ほととぎす」について言及がなされるが、下巻では「作者道綱母によって統御されざる感覚の反乱を描く」というように、作者の意識に回収した議論となっている点に再考の余地がありそうだ。近年では赤間［二〇〇九］において、下巻での「ホトトギス詠者」は「兼家に代わる」ものであり、それは道綱母が兼家との贈答歌による交渉を諦めたときにあらわれたのだとする、兼家との関係性を強く意識した読みも提示されている。

これらの先行研究では、下巻における「ほととぎす」に関する言及はあるものの、養女求婚記事中での「ほととぎす」の役割、あるいは上巻冒頭の場面との対応という点は深く追究されてはこなかった。そこで、本節では求婚記事中の「ほととぎす」と上巻冒頭場面との対応を考察してみたい。なお、比較の際には和歌の表現の類似、散文中の語彙の類似など、複数の観点から幅広く検討していくこととする。

まず、『蜻蛉日記』中の「ほととぎす」全用例について整理しておく。上巻では本節で比較対象とする、後掲の贈答における二例のみ、中巻ではあい宮への長歌中に一例と天禄二年の山籠りに一例の計二例しかない。対して、下巻になると「ほととぎす」の用例は増加

し、全一一例を数える。その内訳は、天禄三年五月に一例、天延元年五月の道綱と大和だつ人との贈答に二例、天延二年の養女求婚記事中に八例となっている。ここから、養女求婚記事中の八例は突出していることが明らかである。下巻の求婚記事において「ほととぎす」が大いに意識されていることは間違いないだろう。

では、養女求婚記事で「ほととぎす」が用いられている場面と、上巻の序に続く冒頭場面とは具体的にどのように対応しているのだろうか。詳細に見ていきたい。

【本文6】〈上巻〉

さて、あへなかりしすきごとどものそれはそれとして、柏木の木高きわたりより、かく言はせむと思ふことありけり。例の人は、案内するたより、もしはなま女などして、言はすることこそあれ、これは、親とおぼしき人に、たはぶれにもまめやかにもほのめかししに、便なきことと言ひつるをも知らず顔に、馬にはひ乗りたる人して、うちたたかす。誰など言はするは、おぼつかなからず騒いだれば、もてわづらひ、取り入れてもて騒ぐ。見れば、紙なども例のやうにあらず、いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまで悪しければ、いとぞあやしき。ありける言は、

音にのみ聞けばかなしなほととぎす　こと語らはむと思ふ心あり

とばかりぞある。「いかに。返りごとはすべくやある」など、さだむるほどに、古代なる人ありて、「なほ」とかしこまりて書かすれば、

語らはむ人なき里にほととぎすかひなかるべき声なふるしそ

（天暦八年夏、九〇～九一頁）

右の記事が、上巻で唯一見られる「ほととぎす」の場面である。求婚記事【本文2】【本文3】【本文5】と比べたとき、注目される類似箇所に囲みを付した。和歌から検討すると、「ほととぎす」のモチーフの共通性だけでなく、上巻【本文6】で兼家からの贈歌にある「こと語らはむ」および道綱母の答歌「語らはむ人なき里」と、養女求婚記事【本文3】における道綱母の贈歌「語らはで帰る山路」の対応が指摘できる。ほととぎすを「語らふ」ものとして擬人化する詠みぶりは『後撰集』頃から出てきたようであり（6）、『古今和歌六帖』にも三例が見られる。また、兼家の異母弟である高光の出家を素材とした『多武峯少将物語』にも三例がある。しかし、必ずしも求愛の場面でのみ擬人化の方法がとられるというわけではなかったようで、「あはれなることかたらひてほととぎすもろごゑにこそなかまほしけれ」（『多武峯少将物語』・一四・式部卿の北の方）などは女性から女性への歌である。こうしたなか、『蜻蛉日記』中の二場面三例がいずれも求婚の文脈に置かれていることは、両場面の対応関係を認める要素となりうるだろう。

さらに【本文6】の散文の部分にも目を向けると、「いたらぬところなしと聞きふるしたる手も、あらじとおぼゆるまで悪しければ」と兼家の筆跡について否定的な評価を下しているのに対して、養女求婚記事【本文2】では「手もいと恥づかしげなりや」という評価を遠度の筆跡に与えている。ここも、二つの求婚記事の類似箇所として指摘しておきたい。

たしかに、男からの手紙が届けられる場面でその筆跡について記すのは常套かもしれないが、遠度の筆跡に対する評価は【本文1】における最初の手紙に対するものではないという点に注意したい。つまり、【本文2】の「ほととぎす」の歌を含む手紙の中で「手」についての言及をしているところに、上巻を意識した可能性を考えることができるのである。また、兼家と遠度との「手」に対する評価を反転させることで、兼家と遠度との差異をほのめかしている可能性も考えられようか。

さて、先述したように、養女求婚記事中には和歌以外にも「ほととぎす」の用例が見られる。以下にすべてを挙げる。

【本文7】

頭の君、なほこの月のうちには頼みをかけて、責む。このごろ、例の年にも似ず、「ほととぎす館をとほして」といふばかりに鳴くと世に騒ぐ。文の端つかたに、「例ならぬほととぎすのおとなひにも、やすき空なく思ふべかめり」と、かしこまりをはなはだしうおきたれば、つややかなることはものせざりけり。（天延二年四月、三四一頁）

【本文8】

昨日の雲かへす風うち吹きたれば、あやめの香、はやうかがえて、いとをかし。簀子に助と二人ゐて、天下の木草を取り集めて「めずらかなる薬玉せむ」など言ひて、そそくりゐたるほどに、このごろはめづらしげなう、ほととぎすの、群鳥厠におりゐたるなど、言ひののしる声なれど、空をうちかけりて二声三声聞こえたるは、身にしみてをかしうおぼえたれば、「山ほととぎす今日とてや」など言はぬ人なうぞ、うち遊ぶめる。すこし日たけて、頭の君、「手番にものしたまはば、もろともに」とあり。「さぶらはむ」と言ひつるを、しきりに「おそし」など言ひて人来れば、ものしぬ。

（天延二年五月、三四四頁）

この二つの記事はいずれも先の【本文3】と【本文4】との間にあり、遠度を「ほととぎす」になぞらえている。【本文7】では養女との結婚を迫る遠度の姿を響かせ、「例ならぬほととぎすのおとなひ」などと言っているのである。【本文8】は五月五日の記事であるが、ここでも「このごろはめづらしげ」ではなくなった「ほととぎす」の様子を描写しており、これも遠度のたびたびの求婚を示していると解釈できる。新全集（木村・伊牟田［一九九五］）では「「ほととぎす」はまた、待っても来ない兼家の訪れ（略）を想起させる」と解釈するが、それでは「めづらしげなう」の意味が通らない。遠度も「かくて、月はてぬれば、はるかになりはてぬるに、思ひ憂じぬるにやあらむ、おとなうて月たちぬ」（天延二年五月、三四二頁）とあるので訪れは少なくなっていたのであろうが、その後五月四日には道綱のもとに手紙をよこすので、やはり【本文8】の「ほととぎす」は求婚者である遠度を連想させると考えるべきである。

ところで、先に挙げた【本文7】の直前には、道綱母と兼家とのやりとりが見られる。これは求婚記事の後、天延二年十月に収められた兼通の記事へと連なる重要な記事である。以下に本文を挙げる。

【本文9】

かくてなほおなじごと絶えず、殿にもよほしきこえよなど、つねにあれば、返りごとも見せむとて、「かくのみあるを、ここには答へなむわづらひぬる」とものしたれば、「程はさものしてしを、などかかくはあらむ。八月待つほどは、そこにびびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも聞こえてむかし」などあり。たはぶれと思ふほどに、たびたびかかれば、あやしう思ひて、「ここにはもよほしきこゆるにはあらず。いとうるさくはべれば、『すべてここにはのたまふまじきことなり』とものしはべるを、なほぞあめれば、見たまへあまりてなむ。さて、なでふことにもはべるかな。

いまさらにいかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を

あなまばゆ」とものしけり。　（天延二年四月、三四〇～三四一頁）

末尾の「いまさらに」の歌は、遠度との関係を疑う兼家に対して道綱母が詠んだものである。この記事が【本文7】の直前に収められていることは、道綱母、兼家、遠度の関係性を考える上で無視しがたい。【本文9】【本文7】の記事の配置は、養女に求婚するという形をとりながらも、表現上はあたかも道綱母との男女の関係をにおわすような遠度の姿と、その様子に対してひやかすような文をよこす兼家の姿とを浮かび上がらせている。このような人物関係の描き方は、上巻よりも複雑化した人物の関係性を、諧謔味を帯びた形で表現しているようである。

なお、【本文9】の「いまさらに」の歌は、兼通と道綱母、兼家、遠度らとの具体的な関係および下巻の中での関わり方、あるいは『蜻蛉日記』の表現世界の特質を考える上で非常に重要である。「いまさらに」詠が伝達していく過程とその結末についてここで確認しておきたい。

【本文10】

「いかなることにかはべらむ。いかでこれをだにうけたまはらむ」とて、あまたたび責めらるれば、げにとも知らせむ、ことばにては言ひにくきをと思ひて、…（中略）…かたはなべきところは破り取りてさし出でたれば、簀子にすべり出でて、おぼろなる月にあてて、久しう見て入りぬ。「紙の色にさへ紛れて、さらにえ見えたまへず。昼さぶらひて見たまへむ」とてさし入れつ。…（中略）…これなること、ほのかにも見たり顔にも言はで、ただ、「ここにわずらひはべりしほどの近うなれば、つつしむべきものなりと人も言へば、心細うもののおぼえはべること」とて、をりをりにそのことも聞こえぬほどにしのびてうち誦ずることぞある。…（中略）…

昨夜見せし文、枕上にあるをみれば、わが破ると思ひしところはことにて、また破れたるところあるは、あやし、と思ふは、かの返りごとせしに、「いかなる駒か」とありしことの、とかく書きつけたりしを、破り取りたるなべし。

（天延二年五月、三四七～三四八頁）

この【本文10】は、養女との結婚を急かす遠度に兼家からの手紙の文言を見せようとした道綱母が、誤って【本文9】「いまさらに」詠の部分を破り取って見せてしまうという記事である。手紙を「破る」という行為自体にも注意される箇所であろう。続けて挙げる【本文11】は、【本文9】【本文10】の後日譚とも言うべき記事の一節である。

【本文11】

……書いたることは、「かの『いかなる駒か』とありけむはいかが、

霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつけてしがな

あな心苦し」とぞある。わが人に言ひやりて、くやしと思ひしことの七文字なれば、いとあやし。

（天延二年十月、三五四～三五五頁）

【本文11】の年時、天延二年十月は遠度による求婚が破談になった約三カ月後である。【本文11】の記事は、兼家の兄で当時太政大臣であった兼通から、【本文9】「いまさらに」詠を踏まえた和歌が書かれた手紙が送られてくるというもので、結局は兼通が和歌の下の句を上手く作ることができないという滑稽なエピソードで終わる。

これら【本文9】【本文10】【本文11】の一連の記事については、すでに川村裕子氏による一連の論がある（7）。川村論文では養女求婚記事中に収められた手紙を「恋の糸口や発端を見せながら消え去ってしまう」「奇妙な手紙」であると位置づけ、そこに「いまだに絶えることのない兼家の存在」を読みとっている。養女求婚記事中に置かれた手紙を「奇妙」であると捉える観点は首肯できるが、この「奇妙」さを上巻の序に記されたような主題、すなわち兼家との関係性をめぐる問題に回収してゆくような読みの姿勢は果たして妥当なのだろうか。

この一連の「奇妙な手紙」にかかわる騒動もまた、養女求婚記事の諧謔性を形作る大きな要素となっているのではないかと思われるのである。さらにこの「奇妙」な事態は、『蜻蛉日記』そのものの流布、あるいは読者との関わりといった、より大きな問題とからめて検討されるべき重要性を有しているのではないか。「いまさらに」詠および求婚記事中の手紙の問題については、本論文の第Ⅰ部第四章で論じることとする。

四、「なげきつつ」の贈答

続けて、上巻との関連性が特に強いと思われる表現として、「なげきつつ」を初句とする和歌について検討していく。『蜻蛉日記』中には「なげきつつ」を初句に持つものが三例あ

り、一例は【本文5】の遠度による和歌である。残りの二例はともに上巻に見られ、しかもいずれも早い時期に置かれている。

【本文12】〈上巻〉

かくて、十月になりぬ。ここに物忌なるほどを、心もとなげに言ひつつ、

なげきつつかへす衣の露けきにいとど空さへしぐれ添ふらむ

返し、いと古めきたり、

思ひあらば干なましものをいかでかはかへす衣の誰も濡るらむ

とあるほどに、わが頼もしき人、陸奥国へ出で立ちぬ。　（天暦八年十月、九六頁）

【本文13】〈上巻〉

これより、夕さりつかた、「内裏にのがるまじかりけり」とて出づるに、心得で、人をつけて見すれば、「町の小路なるそこそこになむ、とまりたまひぬる」とて来たり。されればよと、いみじう心憂しと、思へども、いはむやうも知らであるほどに、二三日ばかりありて、あかつきがたに門をたたく時あり。さなめりと思ふに、憂くて、開けさせねば、例の家とおぼしきところにものしたり。つとめて、なほもあらじと思ひて、

なげきつつひとり寝る夜のあくるまはいかに久しきものとかは知る

と、例よりはひきつくろひて書きて、移ろひたる菊にさしたり。返りごと、「あくるまでもこころみむとしつれど、とみなる召使の来あひたりつればなむ。いとことわりなりつるは。

げにやげに冬の夜ならぬ真木の戸もおそくあくるはわびしかりけり」

さても、いとあやしかりつるほどに、ことなしびたる、しばしは、忍びたるさまに、内裏になど言ひつつぞあるべきを、いとどしう心づきなく思ふことぞ、かぎりなきや。

（天暦九年十月頃、一〇〇～一〇一頁）

【本文12】では兼家からの贈歌が初句「なげきつつ」と据えられている。結婚成立後早い時期の贈答場面である。兼家歌ということで、遠度がもどくにふさわしい和歌とも言えるかもしれない。【本文13】は言うまでもなく、『拾遺集』以下の勅撰集にたびたび入集し、百人一首にも採られることになる歌である。養女求婚記事【本文5】と比較したとき、詠みぶりがより近いのは「なげきつつ夜を過ごす」という意が一致する【本文13】であろう。また、語句のレベルで確認すると、【本文13】の散文中に見られる「いみじう心憂し」あるいは「憂くて」といった語が、養女求婚記事【本文5】の和歌における「みのうのはな」と対応している可能性も指摘しておく。

初句を「なげきつつ」と置く用例は、先行歌および同時代歌ともにあまり残されていない。あわせて、【本文5】および【本文13】に見られた「なげきつつ夜を過ごす」という詠みぶりも、現在確認できる限りでは『能宣集』、『うつほ物語』の各一例のみであり（8）、この表現は当時数多く用いられていたものと想定することは難しい。こうした同時代にあ

まり見られない表現が『蜻蛉日記』中で上巻、下巻・養女求婚記事の二箇所に見られることには注意してよいだろう。以上より、養女求婚記事【本文5】における遠度の和歌は、上巻、特に兼家による求婚から結婚成立までの和歌を意識して作られたと想定することが可能である。

なお、ここで養女求婚記事【本文2】および【本文5】における遠度の和歌について見ておきたい。それぞれの下の句を比較してみると、かなり類似するものであることがわかる。

【本文2】　わがみのうきにかけはなれつつ
【本文5】　みのうのはなのかげになりつつ

「みのう」「かげ」「……つつ」という表現の一致は、なにか下敷きになるような和歌あるいは型があり、それに則ったものとも思われる。「かけはなれつつ」の先行する用例は管見の限りでは見当たらないが、「かげになりつつ」については、『古今和歌六帖』一〇五〇「もり」に、「きみこふとわれこそむねをこがらしのもりとはなしにかげになりつつ」の用例がある。推測の域を出ないが、もし遠度がこのような類の歌を下敷きにしたと想定できるのであれば、【本文5】ではそれに上巻の「なげきつつ」をも踏まえようとしたため、「なげきつつ……つつ」という不自然な詠みぶりになったものとも考えることが可能なのではあるまいか。

五、おわりに

養女求婚記事が上巻の兼家からの求婚を想起させることは従来も触れられてはきた。しかし、そこから兼家を強く意識した、上巻の序に集約される『蜻蛉日記』の主題へと還元させようとする試みが主流であった。たしかに、遠度に関する描写が上巻の兼家を想起させることは否定できないのではあるが、それが直ちに道綱母と兼家との関係のみへと収斂するかというと、そうではないだろう。下巻では、上巻以上に複雑化した人物関係があらわれている。それも、道綱、養女、遠度、兼通など、道綱母および兼家にかなり近い人物ばかりでありながら、その込み入った人物関係が主に手紙のやりとりに関してあらわれているのである。たとえば、遠度の求婚の対象は養女でありながらも、記事中に養女は不在であり、遠度の求婚の手紙は道綱母に宛てられているようにも見えるというような事態である。こうした状況を念頭に置いたとき、養女求婚記事は上巻の世界を踏まえつつも、上巻の序に記された『蜻蛉日記』の主題とみなされてきたものから離れていく下巻独自の世界へと変換されていると思われるのである。

その際、遠度の和歌に作者がどの程度手を入れたのか、あるいは入れなかったのか、そもそもすべてが作者の手によるものなのか、検証が不可能な点ではあるが、ひとまず遠度の詠作があったと仮定すると、やはり遠度自身が『蜻蛉日記』上巻を読んでいたのであろう。上巻の兼家をもどくように「ほととぎす」の和歌を詠み、それが作者の手によって養

女求婚記事中で大きく機能することとなったと推察される。しかし、作品の成立および享受という大きな問題を含み持つため、この点についてはさらに慎重な検討が必要である。

以上、『蜻蛉日記』養女求婚記事における「ほととぎす」およびその周辺の表現は、上巻の早い時期の和歌を強く踏まえて作られたものであることを明らかにしてきた。養女求婚記事には、兼通の登場に繋がる一連の「いまさらに」詠関連記事、手紙およびそれに付随する兼家の言葉の伝達の問題など、まだ論じるべき点が多く残されている。引き続き、養女求婚記事をはじめ『蜻蛉日記』下巻の方法について検討していきたい。

《注》

（1）倉田［二〇〇六ｃ］の「従来、この部分は「遠度求婚譚」として把握されているが、物語での用法、すなわち『うつほ物語』の「あて宮求婚譚」、『源氏物語』の「玉鬘求婚譚」などとする把握の仕方に倣い、以下、「養女求婚譚」として理解していきたい」との指摘を参考にし、さらに物語・説話の話型を示す際に用いられる「……譚」という語を避けて、「養女求婚記事」と呼ぶこととする。

（2）主なものに、石坂［一九八一］、川村［一九八四］、守屋［一九九一］、大内［一九九三］、金子［一九九三］、川名［二〇〇〇］などがある。

（3）主なものに、古賀［一九七二］、篠塚［一九九〇］、林［一九九二］などがある。

（4）倉田［二〇〇六ａ］および倉田［二〇〇六ｂ］。

（5）内野［二〇〇八］。

（6）『後撰集』には、「いかにして事かたらはん郭公歎のしたになけばかひなし」（恋六・一〇二〇・よみ人しらず）の用例がある。なお、安倍［一九九六］でも詳しく検討がなされている。

（7）川村［二〇〇三］および川村［二〇一〇］。

（8）『能宣集』三五三

又、おなじやうなる人に

なげきつつあかしわびぬるふゆのよをみじかきものとしらせてしかな

『うつほ物語』「国譲下」うへ（今上）九二四

なげきつつふるよもあれどあさぼらけおきつるしものわびしかりつる

《参考文献・引用文献》

赤間恵都子［二〇〇九］「ホトトギスを待つ女――道綱母の和歌へのこだわり――」日記文学研究会編『日記文学研究　第三集』新典社

安倍　泰子［一九九六］「「ほととぎすかたらひしつつ」考」『尚絅大学研究紀要』18尚絅大学

石坂　妙子［一九八一］「「世の中」の変容②――遠度求婚譚」『文芸研究』97　日本文芸研究会
内野　信子［二〇〇八］『蜻蛉日記』下巻の構成――和歌表現を視点として――」『国学院大学大学院紀要　文学研究科』40
大内　英範［一九九三］「蜻蛉日記下巻の一考察――遠度の養女求婚記事をめぐって――」『日本文学論究』52　国学院大学国文学会
金子富佐子［一九九三］『蜻蛉日記』下巻試論――〝遠度求婚〟の記事の方法――」『日記文学研究　第一集』新典社
神尾　暢子［二〇〇四］「蜻蛉時鳥の鳴声映像」『学大国文』47　大阪教育大学　国語教育講座・日本アジア言語文化講座
川名　淳子［二〇〇〇］「男と女の媒体としての「女絵」――『蜻蛉日記』下巻「女絵」の記事から――」『論集日記文学の地平』新典社
川村　裕子［一九八四］「蜻蛉日記下巻の一考察――遠度求婚譚をめぐって――」『立教大学日本文学』52
川村　裕子［二〇〇三］『蜻蛉日記』下巻「遠度求婚譚」の文を読む」伊藤博・宮崎荘平編『王朝女流文学の新展望』竹林舎
川村　裕子［二〇一〇］「王朝文化と手紙――『蜻蛉日記』下巻の奇妙な手紙――」秋澤亙・川村裕子編『王朝文化を学ぶ人のために』世界思想社
木村正中・伊牟田経久［一九九五］『新編日本古典文学全集　土佐日記　蜻蛉日記』小学館
倉田　実［二〇〇六a］『蜻蛉日記』の養女求婚譚」『大妻女子大学紀要―文系―』38（→倉田［二〇〇六c］）
倉田　実［二〇〇六b］『蜻蛉日記』道綱母と藤原遠度」『大妻国文』37（→倉田［二〇〇六c］）
倉田　実［二〇〇六c］『蜻蛉日記の養女迎え』新典社
古賀　典子［一九七二］「蜻蛉日記下巻の問題点に就いて――天延元年冬の記事を中心に――」『国語と国文学』580
篠塚　純子［一九九〇］『蜻蛉日記』の主題をめぐって」今井卓爾監修『女流日記文学講座　第二巻　蜻蛉日記』勉誠社
西木　忠一［一九八六］「「ほととぎす」考――『蜻蛉日記』における――」『愛知学院大学論叢（一般教育研究）』33-3　愛知学院大学
林　美喜江［一九九二］『蜻蛉日記』下巻の終結」『文学・史学』14　聖心女子大学
三田村雅子［一九九一］「驚かす声――蜻蛉日記・麻痺と覚醒の構図――」『玉藻』27　フェリス女学院大学国語国文学会
守屋　省吾［一九九一］「蜻蛉日記下巻考――遠度求婚の経緯をめぐって――」木村正中編『論集日記文学　日記文学の方法と展開』笠間書院

第四章

下巻「養女求婚記事」における手紙
――破り取られた「いまさらに」詠を中心に――

一、はじめに

『蜻蛉日記』下巻を論じる場合、従来は記事の多様性について問題とするものが多かった。秋山［一九五六］は下巻に「妻の運命の諦観」を見、自分の周辺の人生を客観的に書き進めたものだと論じ、木村［一九六一］および木村［一九八一］は下巻で主題が分裂し、それが拡大・拡散しているのだと論じた。また、宮崎［一九七二］は秋山［一九五六］の「諦観」という読みを天禄三年の自然観照の記事から部分的には認めつつも、下巻は作者の関心の転移と心境の推移の叙述であり、兼家への執着に諦観をもたらそうと努める過程であると論じる。一方、記事の多様性を道綱母にとっての兼家との関わりということから切り離さずに読むのが守屋［一九八一］および水野［一九九五］である。守屋［一九八一］は、下巻は兼家との直接的な関わりを中心とした求心的方法が遠心的方法に変化したと論じ、水野［一九九五］は基本的には主題性の分裂や蜻蛉的世界の終焉を認めつつも、下巻の記事は蜻蛉的主題に対する積極的側面をも持っていると述べている。

これらからわかるように、従来下巻については消極的な評価が少なくなく、積極的に捉える場合でも、その叙述から作者の兼家に対する思いを読み取ろうとする方向に限られていたようである。しかし、これまでの日記文学研究の方向について、福家［二〇一一］が「虚構の世界を創出するに至った、書き手の書かれざる内面を推測することで、作品の文学性を担保してきた部分があるのではないだろうか。つまり、書き手の内面を中心化することで、作品上の問題をすべて書き手の問題、作者の問題に解消している部分があるのではないだろうか」と批判的に述べる通り、こうした下巻の捉え方には限界があろう。近年では新たな視点からの下巻読解が試みられている（1）ものの、下巻においてなされた、言葉による現実世界の再構築の方法はいまだに過小評価されているように思われる。中巻に散文表現の到達点があるとの見方は容易に揺るがないかもしれないが、下巻においてその方法が低迷したと考えるのは早計である。書き手の内面の問題から下巻を読み解くような論じ方とは距離を置き、下巻が新たに拓こうとした言葉の世界を検討する必要があるのではないだろうか。

下巻において再構成の方法がとりわけ顕著に表れている記事は、天延二年の養女求婚記事であろう。当該記事は従来「物語的」あるいは「説話的」とも評されてきた。本章では上述の問題意識を踏まえつつ、当該記事における手紙について検討していきたい。兼家の異母兄弟にあたる遠度は、天延二年正月頃から道綱母の養女に求婚しはじめる。養女とは天禄三年二月に道綱母が引き取った、兼家と源兼忠女との間に生まれた子供である。求婚にかかわる記事であるため手紙のやりとりが記されるのは自然なことだが、当該記事では特に、結婚の許可を求め道綱母に宛てて送られてくる手紙、あるいは兼家の意志を伝える

ための手紙など、さまざまな手紙が散見されることが主に川村裕子によって論じられてきた（2）。川村［二〇〇三b］では、「確かに、求婚譚は、道綱母と遠度の麗しい場面ばかりが目に付く。しかし、その底には常に兼家の許可や伝言にすがりつくような様相が、複雑な型で描かれていると言えるのではないか」というように、当該記事全般を兼家に対する書き手の内面の問題へと回収していこうとするものであろう。しかし先に確認した通り、下巻の記事は上巻および中巻と比較して内容が多様化し、また人間関係も複雑化する。そのため、最終的に『蜻蛉日記』に書かれたことのすべてを作者と兼家との関係性に結びつけようという読み方からはこぼれ落ちてしまうことが少なくないようである。当該記事の中に見える手紙についても、従来とは異なる視座から捉えていくべきではないだろうか。例えば、陣野［二〇〇六］は「手紙の存在のしかた、もしくは存在の終わり方を、物語・日記などの仮名文と重ねてみてゆく必要があろう」と指摘する。これは、手紙にかかわる記述の多い養女求婚記事の読みを更新するためのひとつの方法を示唆するものと思われる。

当該記事の手紙にかかわる叙述において特に注目したいのは、天延二年四月の兼家と道綱母とのやりとり、およびそれに関連する同年五月、十月の一連の記事である。それらでは、手紙を第三者に見せるために不要な部分を「破（や）る」という行為があり、その結果、見せる意図がなかった「いまさらにいかなるこまかなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を」という道綱母の詠歌が流出していく。さらには、求婚が破談になった三カ月後、兼家の兄兼通にまでこの歌が伝わっていたことも明らかになる。こうして「紙に書かれたもの」が兼家の兄弟たちの間に流出する様子は、『蜻蛉日記』自体の流布の様相ともゆるやかに関わる可能性がないだろうか。もちろん、手紙や歌の内容がよそへ拡がっていくことと、『蜻蛉日記』のようにまとまった作品の流布とを簡単に結びつけることには慎重であるべきだろう。しかし道綱母自身と兼家とのことよりも、むしろこの二人の関係者たちの話題へと拡散するような傾向をもつ下巻に関しては、それがどのように流通し、享受されたのかという問題がとりわけ重要になると思われる。これは、兼家の兄弟たちと深く関連し、また成立基盤も近いと考えられる『一条摂政御集』「とよかげ」、『本院侍従集』、『多武峯少将物語』などの流通・享受の範囲ともゆるやかにつながってくる問題であろう。その手掛かりが、関係者たちとの積極的関与が認められる養女求婚記事中の手紙にあるのではないかという見通しのもと、『蜻蛉日記』下巻の新たな読みを提示したい。

二、破り取られた手紙

まず、養女求婚記事中で他人に「見せる」ことを前提にして書かれた手紙について検討する。天延二年四月の記事を次に示す。

【本文1】

かくてなほおなじごと絶えず、「殿にもよほしきこえよ」など、つねにあれば、（a）返りごとも見せむとて、「かくのみあるを、ここには答へなむわづらひぬる」とものしたれば、「程はさものしてしを、などかかくはあらむ。（b）八月待つほどは、そこに

びびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも聞こえてむかし」などあり。たはぶれと思ふほどに、たびたびかかれば、あやしう思ひて、「ここにはもよほしきこゆるにはあらず。いとうるさくはべれば、『すべてここにはのたまふまじきことなり』とものしはべるを、なほぞあめれば、見たまへあまりてなむ。さて、なでふことにもはべるかな。

いまさらにいかなるこまかなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を
あなまばゆ」とものしけり。

（天延二年四月、三四〇～三四一頁）

兼家は一度、四月に養女と結婚することを許可する旨を遠度に伝えていた。それが実現しないので、遠度はたびたび道綱母邸を訪れては結婚を迫っている。【本文１】では、遠度に「結婚の日取りは八月」という兼家の言葉を信用させるために手紙を直接見せようと、道綱母が兼家に手紙を催促している。兼家からは（b）「八月待つほどは、そこにびびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる」と、遠度との仲を疑う内容を添えた手紙が返って来て、その返歌として道綱母の「いまさらに」歌が詠まれるというように記事は展開していく。この歌は『古今集』の「おほあらきのもりのした草おいぬれば駒もすさめずかる人もなし」（雑上・八九二・詠み人しらず）を踏まえ、「いまさらどのような人が寄ってくるでしょうか。馬も食べない枯れ草のように、すっかり世を逃れてしまった身でありますのに」という意を示す。兼家の疑いに反論する内容である。

この記事で注目したいのは、（a）の「返りごとも見せむとて」と、兼家からの手紙を遠度に見せようとしていたことが明示される点である。道綱母は、見せることを前提とした手紙を兼家に要求していたのである。同様に兼家の手紙を遠度に示す例は、【本文１】の少し前にも見られた。同じく四月の記事を掲げる。

さて、なほここにはいといちはやきここちすれば、思ひかくることもなきを、かれより「かくなむ、『仰せありき』とて責むると聞こえよ」とのみあれば、「いかでさはのたまはするにかあらむ。（c）いとかしましければ、見せたてまつりつべくて。御返り」と言ひたれば、「さは思ひしかども、助のいそぎしつるほどにて、いとはるかになむなりにけるを、もし御心かはらずは、八月ばかりにものしたまへかし」とあれば、いとめやすきここちして、（d）「かくなむはべめる。いちはやかりける暦は不定なりとは、さればこそ聞こえさせしか」とものしたれば、返りごともなくて、とばかりありて、みづから「いと腹立たしきこと聞こえさせになむ、まゐりつる」とあれば、……

（天延二年四月、三三三～三三四頁）

道綱母はこの（c）でも、「見せたてまつりつべくて」と、遠度に直接見せるための手紙を兼家に催促する。兼家の手紙を見せられた遠度は、立腹しながらも渋々納得したようである。なお、（d）を全講は兼家の返事を直接見せたのではなく、兼家の返事の趣旨を伝えた

のだと解釈する。しかし（c）で「見せたてまつりつべくて」と、手紙を遠度に見せる旨が明示されているため、兼家からの手紙自体を直接見せたと解釈してよいだろう。

両記事で遠度を説得するために必要とされたのは、いずれも兼家直筆の手紙であっただろう。直筆の手紙は、道綱母から伝え聞く兼家の言葉以上に説得力を持っていたことが読みとれる。つまり、遠度は手紙の手跡を兼家のものだと判別でき、しかも証拠能力を持つものとして認めたことがわかる。

【本文1】の中に見える道綱母の手紙については、後に遠度の手に渡っていく過程が詳しく記されている。記事中の文言に従うと、五月十日頃らしい（3）。本文を次に示す。

【本文2】

さて、かの「びびしうもてなす」とありしことを思ひて、「いとまめやかには、心ひとつにもはべらず、そそのかしはべらむことは、かたきここちなむする」とものすれば、「いかなることにかはべらむ。いかでこれをだにうけたまはらむ」とて、あまたたび責められるれば、（e）げにとも知らせむ、ことばにては言ひにくきをと思ひて、「御覧ぜさするにも、便なきここちすれど、ただ、これもよほしきこえむことの苦しきを見たまへとてなむ」とて、かたはなべきところは破り取りてさし出でたれば、簀子にすべり出でて、おぼろなる月にあてて、久しう見て入りぬ。「紙の色にさへ紛れて、さらにえ見えたまへず。昼さぶらひて見たまへむ」とてさし入れつ。「いまは破りてむ」と言へば、「なほしばし破らせたまはで」など言ひて、これなること、ほのかにも見たり顔にも言はで、ただ、「ここにわづらひはべりしほどの近うなれば、つつしむべきものなりと人も言へば、心細うもののおぼえはべること」とて、をりをりにそのこととも聞こえぬほどにしのびてうち誦ずることぞある。「つとめて、寮にものすべきことはべるも、助の君に聞こえに、やがてさぶらはむ」とて立ちぬ。

昨夜見せし文、枕上にあるをみれば、（f）わが破ると思ひしところはことにて、また破れたるところあるは、あやし、と思ふは、（g）かの返りごとせしに、「いかなるこまか」とありしことの、とかく書きつけたりしを、破り取りたるなべし。

（天延二年五月、三四六～三四八頁）

冒頭、「かの「びびしうもてなす」とありしこと」が、【本文1】で兼家から返ってきた手紙である。（e）で、その手紙を「かたはなべきところは破り取りて」遠度に渡したことが記されている。おそらく【本文1】（b）の、結婚の日取りに関連しない文言が記された部分、すなわち「八月待つほどは、そこにびびしうもてなしたまふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも聞こえてむかし」などという「たはぶれ」が書かれた部分が「かたはなべきところ」だったのであろう。

ところが翌朝、遠度に渡した手紙に（f）「わが破ると思ひしところはことにて、また破れたるところある」ことが発見される。この部分については、「また破れたるところ」を破った主体が遠度か道綱母かという点で解釈がわかれている。遠度が破ったとするものが講

義・集成・新大系・角川ソフィアなどである。一方、道綱母が破ったのだと解釈するのが全注釈・全集・新全集などである。いま、後の展開、すなわち道綱母の「いまさらに」詠が流出していく事態を踏まえると、ここは遠度を主体と考えるのが妥当ではないか。（f）を試訳すれば、「私が破って渡したと思った部分は渡すべきところとは別の部分で、遠度から返してもらった紙にはさらに破れているところがある」という程度の解釈になろう。このように解釈するのであれば、一枚の紙に兼家の自筆と「いまさらに」詠とが両方書かれていなければならないこととなる。道綱母が兼家の手紙に歌を書きつけたとするのが通説であり、全講をはじめとする大半の注釈が、歌の草案であったと解釈する。一方、備忘のために歌を書きつけたと解釈するのが新釈である。あるいは、道綱母と兼家が同じ一枚の紙を用いて手紙のやりとりをしていたのかもしれない。いずれにせよ、同じ紙に兼家の手紙と歌が書きつけられていた事態は想定しうるだろう。このように考えると、（g）「かの返りごとせしに、「いかなるこまか」とありしことの、とかく書きつけたりし」という部分を、遠度が持ち出したという想定が可能であろう。

以上のように、【本文2】の一連の記事では、「いまさらに」詠が流出する過程の発端を確認することができる。こうした事態が事実に基づくのかどうかを問うても、確認のすべはない。しかし、このような手紙のやりとり、そして一部分の流出という事態が下巻の叙述の中にとりこまれていることは確かである。そのこと自体がもっと注目されてよかったのではないか。次節では、破り取られた「いまさらに」詠のその後の伝播をおさえていく。

三、「いまさらに」詠の伝播

【本文2】において人目に触れるに至った手紙の一部は、その五カ月後の天延二年十月、兼家の兄兼通から届いた突然の手紙によって再度記事に登場する。この手紙および「いまさらに」詠について、川村［二〇〇三b］では「飛び回り続ける文の中に置かれた、さだすぎた嘆老の歌こそが、兼家に対して存在を主張し続けている」と、兼家に繋がるものとしての機能が論じられているが、本節では、書かれたものの伝播あるいは享受という視点から、兼通からの手紙の中で道綱母の「いまさらに」詠が書かれたこと、およびそれを記事としたことの意味について検討してみたい。当該記事を挙げる。

【本文3】

かくて十月になりぬ。（…中略…）宵のほど、火ともし、台などものしたるほどに、せうととおぼしき人、近うはひ寄りて、懐より、陸奥紙にてひきむすびたる文の、枯れたる薄にさしたるを、取り出でたり。「あやし、誰がぞ」と言へば、「なほ御覧ぜよ」と言ふ。開けて、火影に見れば、心づきなき人の手の筋にいとよう似たり。書いたることは、「かの『いかなるこまか』とありけむはいかが、

霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつけてしがな

あな心苦し」とぞある。（h）わが人に言ひやりて、くやしと思ひしことの七文字なれば、いとあやし。「こはなぞ」と「堀川殿の御ことにや」と問へば、「太政大臣の文な

り。御随身にあるそれがしなむ、殿にもて来たりけるを、『おはせず』と言ひけれど、『なほたしかに』とてなむ置きてける」と言ふ。いかにして聞きたまひけることにかあらむと、（i）思へども思へどもいとあやし。また人ごとに言ひあはせなどすれば、古めかしき人聞きつけて、「いとかたじけなし。はや御返りして、かのもて来たりけむ御随身にとらすべきものなり」とかしこまる。されば、かくおろかには思はざりけめど、いとなほざりなりや、

ささわけばあれこそまさめ草枯れのこまなつくべき森のしたかは

とぞ聞こえける。

（天延二年十月、三五四～三五五頁）

【本文3】では、「心づきなき人の手の筋にいとよう似たり」とあるように、兼家によく似た筆跡で書かれた手紙が送られてくるところから始まっている。手紙は兼通からであったが、そこに（h）「わが人に言ひやりて、くやしと思ひしことの七文字」、つまり【本文1】で詠まれた「いまさらにいかなるこまかなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を」の二句目、「いかなるこまか」が引用されていた。これは【本文2】で遠度によって破られたと思しき部分であり、「いまさらに」詠が兼通にまで伝わっていたことが知られる。遠度の手に渡った後、どのような経路で兼通の手に渡ったのかは不明であるが、兼通が「いまさらに」詠を知っており、さらにそれが道綱母の詠であることまでわかっていたことは確実である。

また、この記事では、何度も波線部「あやし」という語が使用されている。（i）では「思へども思へどもいとあやし」とまで書かれている。当該記事における「あやし」の多用について、川村［一九八六］は「道綱母はなぜ兼通が「いまさらに」の歌を知っていたのかわからず、（中略）疑問を繰り返し述べている」と言及するに留まり、「あやし」の虚構性には言及していない。しかし、この歌の流出については【本文2】（g）の時点で道綱母自ら確認していることから、この「あやし」の多用は、月日が過ぎた後に、「いまさらに」詠の流出および流通の過程を知らない体を装う表現になっている可能性もあることを指摘しておく。

【本文3】は従来、主に兼通の人物造型や兼家と兼通との政治的立場との関連から把握されることが多かった（4）。しかし、破り取られた手紙および「いまさらに」詠に注目して当該記事を検討すると、人物あるいは政治的側面だけでなく、この記事の持つさらなる重要性が見出される。従来、遠度から兼通に和歌が伝わったという指摘はなされてきたが、手紙というもの自体に注目すると、この記事の新たな側面が浮かび上がってくる。すなわち、道綱母が歌の上手として名高く、当時から『蜻蛉日記』上巻作者であると認められていた可能性（5）を考えると、手紙、とりわけその和歌の部分は、それらの内容以前に、破り取られるだけの価値を有していたと考えられるのではないだろうか。そして、和歌がいろいろな人によって詠まれた時代ではあるが、歌の名手として、また『蜻蛉日記』上巻作者として、少なくとも兼家周辺においては認知されていた可能性の高い人物の自筆の和歌が、兼家兄弟たちの間で出回り、享受されていた可能性を示唆していよう。もちろん、個々の手紙と『蜻蛉日記』のように書物としてまとまった作品の流通のしかたが同様であ

ったと言い得る根拠は乏しいので、『蜻蛉日記』自体の享受についてはさらなる検討を要するが、道綱母の書き記した言葉が兼家の兄弟のもとへ届き、話題にされている点において、ここでの手紙と『蜻蛉日記』との照応関係はある程度認めうるのではないか。

次節では、他作品などにおける手紙の流出に類似する事例にも目配りしつつ、養女求婚記事中に手紙が多く見られることと、道綱母の歌、さらに彼女の残した言葉が周囲の関係者に伝播していくこととの関わりをおさえた上で、下巻において新たに拓かれた再構成の方法を探ってみたい。

四、手紙の流出・漏洩・誤配と下巻の再構成の方法

養女求婚記事に見られる手紙の流出に類似した事例は、他の作品にも見られる。例えば『紫式部日記』消息的部分には、次のような記事がある（6）。

斎院に、中将の君といふ人はべるなりと聞きはべる、たよりありて、人のもとに書きかはしたる文を、みそかに人のとりて見せはべりし。いとこそ艶に、われのみ世にはものののゆゑ知り、心深き、たぐひはあらじ、すべて世の人は、心も肝もなきやうに思ひてはべるべかめる、見はべりしに、すずろに心やましう、おほやけばらとか、よからぬ人のいふやうに、にくくこそ思うたまへられしか。……

ここには、斎院の女房である中将の君が書いた手紙について、受取人から誰かが密かに入手した結果、紫式部にまで回ってきたことが記されている。その手紙は弟惟規によってもたらされたというのが通説となっている。『紫式部日記』の記述では、密かに入手した人物が紫式部に見せたと、流通の過程が明確に記されている。養女求婚記事の場合は遠度から兼通にまでどのように伝わったのかが不明確であるが、兄弟・姉弟間という近い間柄での流通は、『紫式部日記』と養女求婚記事との共通点であろう（7）。

『蜻蛉日記』上巻でも、兼家から町の小路の女へ宛てた手紙が、道綱母邸の文箱から発見される記事がある。

さて、九月ばかりになりて、出でたるほどに、箱のあるを手まさぐりに開けて見れば、人のもとに遣らむとしける文あり。あさましさに、見てけりとだに知られむと思ひて、書きつく。

うたがはしほかに渡せるふみ見ればここやとだえにならむとすらむ

など思ふほどに、むべなう、十月つごもりがたに、三夜しきりて見えぬ時あり。つれなうて、「しばしこころみるほどに」など、気色あり。これより、夕さりつかた、「内裏にのがるまじかりけり」とて出づるに、心得で、人をつけて見すれば、「町の小路なるそこそになむ、とまりたまひぬる」とて来たり。

（天暦九年九月～十月、九九～一〇〇頁）

なぜ道綱母邸の文箱の中に他の女へ宛てた手紙があったのかは定かではないが、直後には兼家が町の小路の女と婚姻関係を結んだことが了解されるので、兼家はそのことを道綱母に知らせるため、わざと手紙を置いておいたのかもしれない。この記事は、「なげきつつひとり寝る夜のあくるまはいかに久しきものとかは知る」という有名な歌に続いていくこととなる。兼家の手紙は、決定的な場面を導く道具として機能していると見ることができよう。

また、中巻には差出人と宛先とが混乱してしまう手紙のやりとりの記事がある。

……また、奥に、

やど見れば蓬の門もさしながらあるべきものと思ひけむぞや

と書きて、うち置きたるを、前なる人見つけて、「いみじうあはれなることかな。これをかの北の方に見せたてまつらばや」など言ひなりて、「げに、そこよりと言はばこそ、かたくなはしく見苦しからめ」とて、紙屋紙に書かせて、立文にて、削り木につけたり。『いづこより』とあらば、『多武の峰より』と言へ」と教ふるは、この御はらからの入道の君の御もとよりと言はせよとてなりけり。人取りて入りぬるほどに、使ひは帰りにけり。かしこに、いかやうにか定めおぼしけむは知らず。…（略）…

さて、そのころ、帥殿の北の方、いかでにかありけむ、ささのところよりなりけり、と聞きたまひて、この六月どころとおぼしけるを、使ひ、もてたがへて、いまひとところへもていたりけり。取り入れて、はたあやしともや思はずありけむ、返りごとなど聞こえてけり、と伝へ聞きて……　（安和二年六月～七月、一八〇～一八一頁）

安和の変によって源高明が左遷された後、道綱母から愛宮へ、差出人を「多武の峰より」とすることで愛宮の兄高光を装うという趣向を凝らした見舞の手紙が送られる。愛宮側では道綱母の手紙だと気付き、道綱母に返事を送るが、転居前の住まいに送ってしまった。さらにその誤配先の人物が愛宮に返事をしてしまったという、混乱したやりとりが記されている。この場面の機能については別稿にて検討したいが、道綱母が高光を装って手紙を差し出したり、紙の選択にも意を用いたりする手紙のやりとりが行われている点など、興味深いところである。

以上のような例をみてくると、手紙に記された内容の流出・漏洩、あるいは手紙そのものの誤配といったトラブルは、情報の入手に役立てられるばかりではなく、とりわけ『蜻蛉日記』上巻の場合のように、作中世界の展開上、当の手紙が重要な役割を担わされる場合もあるようだ。日記文学では、実際にあった出来事を前提とした作品世界ではあるが、手紙をめぐるやりとりの細部までが事実に即しているとは限らないだろうから、右のような手紙をめぐるエピソードは、日記の虚構性に関わる可能性があるだろう。

そうしたことを意識した上で、『紫式部日記』の場合も含め、ここまでとりあげてきた事例に共通する点として、手紙が兄弟、親類などの間で主に流通していることに注意したい。それは、作者の周辺で、「書かれたもの」をめぐるやりとりが相応にあったことを示してい

るが、さらに注意すべきは、直接的なやりとりであるだけに、当人の手跡を把握しうるということがあろう。養女求婚記事でも、兼家手跡の手紙が必要とされていた。同様に、「いまさらに」の歌が書きつけられた部分も、道綱母手跡の歌であることが重要であったと思われる。すでに『蜻蛉日記』上巻の作者として、あるいは歌の上手として名を知られていた道綱母直筆の和歌を破り取って持ち出すことは、意味のあることであったと想像される。

ところで、「書かれたもの」が持ち出される有名な例として、『枕草子』雑纂本の跋文、および『紫式部日記』の『源氏物語』に関わる記事がある。これらは書物が持ち出される例であり、本章で取り上げた手紙とはレベルの異なる問題ではあるが、文学的営為により既によく知られつつある女性が書いたものが持ち出されるという共通点は認められるだろう。しかも、このようなものを持ち出すのが、経房、道長のように、ある程度以上高貴な男性貴族であったことにも留意してよいのではないか。これらの事例は、当時仮名で書かれたものが、高貴な男性の手を介してまずはその関係者たちに流通したことを示唆するだろう。遠度の関わった『蜻蛉日記』下巻の場合も、同様の事例と見てよいのではないか(8)。

兼家手跡の手紙を要求するところから始まる当該記事には、道綱母自筆の「いまさらに」詠が遠度によって「破る」形で持ち出され、兼通にまで伝わったことが記されている。書き記されたものがあって、それが誰かによって書いた人のもとから持ち出され、他人に伝わっていく過程が奇妙な形で表現されているのである。おそらく『蜻蛉日記』下巻は、関係者たちとの手紙のやりとりを記しているだけではなく、兼家の兄弟たちとのやりとりにおいて、道綱母の詠歌という「書かれたもの」の流通に積極的に関わったことを記述の中にあえて取り込んでいるのだろう。一方で、『蜻蛉日記』そのものの伝播・流布に目を向けるならば、兼家とその兄弟たちのところでまずは読まれた可能性が高いと考えられよう(9)。

下巻において記事が拡散する傾向が見られる中で、そこに記されるのは兼家当人よりも、その兄弟たち、あるいは道綱を含めた関係者たちが多くなっていた。そうした兄弟関係の話題を集約するようなものとして、下巻後半のかなりの部分を占める養女求婚記事がある。遠度および兼通は、ともに『蜻蛉日記』の第一次享受者であったと想定できることは先に述べたが、そうすると、彼らは登場人物であると同時に読者であったことになる。記事の再構成と、享受の問題とを切り離して考えることはできないのである。

養女求婚記事は、兼家の兄弟たちが中心人物である点、彼らの滑稽譚とでも言うべき話題をあえて記している点から、『一条摂政御集』「とよかげ」、『本院侍従集』などの作品と重なる部分が多いのではないか。また、『多武峯少将物語』なども含めてみると、これらの諸作品は、流通圏もほぼ重なっていたと想定できるだろう(10)。登場人物であり、かつ読者でもあった彼らにとって、兼家が上巻・中巻でそうであったように、自らの失敗譚が記されることはタブーではなかったと見える。推測の域は出ないが、むしろ当人たちは書き記されることを意識していたのではないだろうか。そうした中で養女求婚記事の手紙に関わる記述は、登場する本人たち、あるいはその関係者たちが目にすることをも想定して再構成が行われたのであろう。

そこにはおそらく、上巻・中巻には見られず、同時代の他作品においても開拓されていなかったような言葉の世界が志向されていたのではないだろうか。すなわち、自作が他者の手に渡ることに言及するというものである。それは、『枕草子』跋文などにはまだ及ばないものだが、遠度および兼通らとのやりとりを通して、『蜻蛉日記』そのものの享受のされ方が透かし見えてくるような、そういう方法と言えるのではないか。

五、おわりに

養女求婚記事には、今回検討した一連の記事以外にも、言葉による再構築の工夫が多くあって、まだ解明されていない面も多いのではないかと思われる。本章ではそのうちの一つとして、手紙およびそこに書きつけられた詠歌が、兼家の兄弟間に流通している現象を指摘し、そこでなされた再構成の方法について検討した。遠度・兼通らは記事中の登場人物であると同時に、『蜻蛉日記』そのものの第一次的な享受者でもあっただろう。こうした人たちとのやりとりを記す中に、「書かれたもの」の享受のされ方と『蜻蛉日記』そのものの享受のされ方とがゆるやかなつながりを持って見えてくるような、言葉による再構築の方法が認められるのではないだろうか。

《注》

（1）倉田［二〇〇六］などがある。

（2）川村［一九九六］、川村［二〇〇三ａ］、川村［二〇〇三ｂ］、川村［二〇一〇］などがある。

（3）五月五日の記事のあと、「またの日も……」「また二日ばかりありて……」「いま二日ばかりありて……」（天延二年五月・三四五頁）と、日にちの推移が細かに記されて、【本文２】へと続く。

（4）本論文の第Ⅰ部第二章でも詳しく論じた。

（5）上巻成立および流布の時期については定説を見ないが、下巻の世界が上巻を踏まえている可能性については本論文の第Ⅰ部第三章にて論じた。

（6）引用は、中野幸一編『紫式部日記　付紫式部集』（武蔵野書院　二〇〇二）による。

（7）『紫式部日記』には他にも、

夢にても散りはべらば、いといみじからむ。耳も多くぞはべる……

と、手紙が見られてしまうことについて意識した記事が見られる。また、『紫式部集』三二番歌詞書においても、以下のような記述が見られる。

文散らしけりと聞きて、「ありし文ども、取り集めておこせずは、返りごと書かじ」と、言葉にてのみ言ひやりければ、……

（8）『枕草子』雑纂本跋文、および『紫式部日記』の『源氏物語』に関わる記事は、作者による自作への「自己言及」の典型的な例と認められるだろうが、遠度が関与している養女求婚記事中の当該の例も、ある種の「自己言及」として理解しうるのではない

だろうか。深沢［二〇〇二］では『紫式部日記』の消息的部分について次のように言及している。

用紙としての「反故」や、墨継ぎの際の「文字落し」、さらには「夢にても散り侍らば」とあるように、独り歩きするテキストの流通過程への懸念の表明が、結果として書かれたテキストとしての、その性格をあからさまに指し示す。そのときテキストは、書かれた客体（オブジェクト）として後景へと退き、「図」と「地」との反転図式よろしく、書く主体（サブジェクト）としての作者が代わって前面に立ちあらわれてくる。（傍点原文）

なお、同書では『枕草子』雑纂本跋文についても言及されている。

（9）同時代における『蜻蛉日記』の享受については明らかではないが、例えば古賀［一九七九］は、上巻の流布について次のように論じる。

その実体をはっきりさせることはできないが、最小限、作中に歌が採られている人々と、その人々からの拡がりというものは考えてよいであろう。

（10）『多武峯少将物語』の読者については、門澤［二〇〇六］に詳しい。

《参考文献・引用文献》

秋山　虔　［一九五六］　『蜻蛉日記』アテネ文庫　古典解説シリーズ21　弘文堂

川村　裕子［一九八六］　「蜻蛉日記をめぐる人々――藤原遠度とその周辺――」『活水日文』15　活水学院日本文学会

川村　裕子［一九九六］　「蜻蛉日記の文――平安時代の文の交換を中心に――」『立教大学日本文学』77

川村　裕子［二〇〇三a］　「和歌における装飾――『蜻蛉日記』『源氏物語』の「陸奥紙」再見――」兼築信行・田渕句美子編『和歌から歴史を読む』笠間書院

川村　裕子［二〇〇三b］　『蜻蛉日記』下巻「遠度求婚譚」の文を読む」伊藤博・宮崎荘平編『王朝女流文学の新展望』竹林舎

川村　裕子［二〇一〇］　「王朝文化と手紙――『蜻蛉日記』下巻の奇妙な手紙――」秋澤亙・川村裕子編『王朝文化を学ぶ人のために』世界思想社

木村　正中［一九六一］　「蜻蛉日記下巻の構造」『日本文学』10-4　日本文学協会

木村　正中［一九八一］　「蜻蛉日記の主題」『一冊の講座　蜻蛉日記』　有精堂

倉田　実　［二〇〇六］　『蜻蛉日記の養女迎え』新典社

古賀　典子［一九七九］　「蜻蛉日記の受容――上巻単独流布を視点として――」『論集中古文学3　日記文学作品論の試み』笠間書院

陣野　英則［二〇〇六］　「日記文学と物語――自らの言葉を処分する仮名文書・試論」『国文学』51-8（739）　学燈社

深沢　徹　［二〇〇二］『自己言及テキストの系譜学――平安文学をめぐる7つの断章』森話社
福家　俊幸［二〇一一］「あとがき」福家俊幸・久下裕利編『王朝女流日記を考える――追憶の風景』武蔵野書院
水野　隆　［一九九五］「蜻蛉日記下巻の記事構成の方法に関する試論――巻末歌集重複歌「今さらに」を中心にして――」上村悦子先生頌寿記念論集編集委員会編『王朝日記の新研究』笠間書院
宮崎　荘平［一九七二］「蜻蛉日記の形成」『平安女流日記文学の研究』　笠間書院
守屋　省吾［一九八一］「蜻蛉日記下巻の研究と解釈」『一冊の講座　蜻蛉日記』　有精堂
門澤　功成［二〇〇六］「『多武峯少将物語』の成立基盤と読者――あい宮の担う師輔没後の閉塞感を基点として――」『中古文学』78　中古文学会

第五章　下巻「養女求婚記事」における「女絵」

一、はじめに

従来『蜻蛉日記』下巻についての研究は、その叙述から作者の兼家に対する思いを読み取ろうとするような方向にほぼ限定されていたようである。しかし、福家［二〇一一］が「虚構の世界を創出するに至った、書き手の書かれざる内面を推測することで、作品の文学性を担保してきた部分があるのではないだろうか。つまり、書き手の内面を中心化することで、作品上の問題をすべて書き手の問題、作者の問題に解消している部分があるのではないだろうか」と指摘する通り、こうした視点以外から下巻を捉えてゆく必要があるように思われる。そこで、これまでに稿者は作者の内面、心情などの推測に拠らないように留意しながら『蜻蛉日記』下巻の考察を進めてきた（1）。下巻には、従来論じられてこなかった工夫や試みが多くあるのではないかという見通しを稿者は持っている。

『蜻蛉日記』下巻に含まれる養女求婚記事（2）の中に、道綱が遠度のもとから「女絵」を持ち帰り、その絵に道綱母が和歌を書きつけて返す記事がある。まずは以下に本文を挙げる。

助を明け暮れ呼びまとはせば、常にものす。（a）女絵をかしく描きたりけるがありければ、取りて、懐に入れて持てきたり。見れば、（b）釣殿とおぼしき高欄におしかかりて、中島の松をまぼりたる女あり。そこもとに、紙の端に書きて、かくおしつく。

いかにせむ池の水波さわぎては心のうちのまつにかからば

また、（c）やもめ住みしたる男の、文書きさしてつらづゑつきて、もの思ふさましたるところに、

ささがにのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも

とものして、（d）持て帰り置きけり。　（天延二年四月、三三九～三四〇頁）

当該記事に関する従来の議論は、これが確認できる初出例である「女絵」なるものの実態を探るもの（3）、あるいは養女求婚記事から道綱母と兼家との関係性を読み取るための根拠を求めようとするものが多かったようである（4）。本章では、それらの先行研究を踏まえつつ、日記作者の内面を探るような方向よりも、本文の表現とそこに記されている事象をより丁寧に捉えることで、その工夫のありように迫ってゆきたい。

傍線部（b）（c）それぞれの絵と、そこに添えられた道綱母の詠歌について、従来は作者と兼家との姿を重ねたり、あるいは作者と遠度との姿を重ねたりするような読みがなされてきた。確かに（b）につけられた和歌については、兼家あるいは遠度を待つ道綱母の姿を想起できるかもしれない。しかし、（c）は男の姿が書かれた絵に女の視点から詠まれ

た和歌を書きつけているところから、（b）と同様に画中人物に感情移入して詠んだと見るだけでは把握し難いのではないか。

そこで本章では、特に（c）の絵の構図と、そこに添えられた和歌の表現を再検討することで、当該記事が養女求婚記事、ひいては『蜻蛉日記』下巻においてどのように位置付けられるのかを考察する。さらに、これまでの養女求婚記事における表現の検討もあわせて、下巻の持つ、上巻および中巻と異なる性質について考えてゆきたい。

二、「女絵」と和歌

傍線部（a）には、道綱が女絵を懐に入れて遠度邸から持ち帰ったことが、また傍線部（d）には、道綱が女絵を遠度のもとに戻したことが記されている。その書きぶりは、あたかも道綱が自らの意志で自発的に行ったかのようであるが、果たしてそのようなことがあり得たのだろうか。川名［二〇〇〇］では、「この絵が遠度自身からの発信であるかは不明瞭」と述べつつも、遠度からのメッセージ性に言及している。遠度から道綱母へのメッセージがあったとすると、絵の移動が道綱独自の判断で行われたものであるはずがない。道綱と遠度、および道綱と道綱母との間であった何らかのやりとりが省略されていると見るべきである。すなわち、女絵は遠度から道綱を介して道綱母のもとへもたらされ、道綱母から道綱を介して遠度のもとへ戻されたのであろう。さらに川名論文では、道綱母が和歌によって絵に描かれた男女の関係性を作り上げ、自分と兼家との関係をそこに反映させようとしたことが論じられている。

しかし、ここで注目したいのが、道綱母が歌を付けた後、絵が遠度に返却されたという点である。ここに、絵に込められた遠度からのメッセージ性だけではなく、道綱母から遠度へのメッセージを読み取ることも、おそらく可能であろう。つまり、当該記事で絵に添えられた和歌は、道綱母から遠度への返歌の形をとっているとは考えられないだろうか。

傍線部（b）「中島の松をまぼりたる女」の構図からまず連想されるのは、来ない男を待っている女のイメージである。しかし道綱母は、「松」を「待っている」意ではなく、「あだし心」を表す「末の松山」に詠みかえた和歌を添えている。これは典型的な、贈歌の意を翻して返歌とする贈答歌の切り返し方に則っていると言えよう。傍線部（c）、やもめの男が手紙を書きさしている絵についてはさらに明確である。絵は「もの思ふさましたる」男の姿であると説明されている。しかし、道綱母はそれを多数の女のもとへ手紙を書き散らしている男の姿と捉えて和歌をつけたことがわかる。絵と和歌の状況が異なることが明確に記されているのである。

絵に和歌を添える行為については、池田［一九八四］、池田［一九八五］に詳しい。池田［一九八四］では、私的な享受に用いられる「紙絵」について、「図様そのものが物語絵のそれに直接関係する訳ではないが、日常的な営みの中で、絵を描くこと、楽しむこと、特に和歌をそれに詠み込むことの浸透ぶりを充分に理解しておく必要があるのではなかろうか」と述べられている。また、「歌絵」の存在も参考となろう（5）。伊井［一九九二］は「歌絵」の「いわば絵と歌による贈答歌が成り立つ」性質に言及している。ここにも、絵

と和歌との密接な在り方がみとめられる。また同論文では、『紫式部集』および『四条宮下野集』における「歌絵」の用例から、「その歌絵から、下野はどのような発想の歌を詠むのか、そこに小民部の興味があったのだといえよう。宣孝とて自分の思いを古歌に託し、それをそのまま伝えるのではなく歌絵にして遣わしたわけで、その絵を解釈して返してくる紫式部の歌に彼はもっとも関心があったはずである」と論じている。いずれも『蜻蛉日記』より後代の例であるが、文才で名の知れた女性に、その返歌を期待して絵を渡したという点は注目できるだろう。一〇世紀後半の「女絵」がどのようなものであったのかを知ることはできないが、先に言及したように、絵に遠度からのメッセージ性を認めるのであれば、当該記事の「女絵」はある意味で「歌絵」的な性格を持つとも考えられる。すなわち、当該記事の「女絵」が、道綱母からの返歌を期待して遠度邸から届けられたものであったことが想定できるのである。

『蜻蛉日記』中で絵に和歌を付ける例といえば、中巻における屏風歌詠進記事が思い出される。安和二年八月、師尹五十賀の際に屏風を作るということで、頼忠から依頼を受ける記事である。

八月になりぬ。そのころ、小一条の左大臣の御とて、世にののしる。左衛門督の、御屏風のことせらるるとて、えさるまじきたよりをはからひて、責めらるることあり。絵のところどころかきいだしたるなり。いとしらじらしきこととて、あまたたび返すを、責めてわりなくあれば、宵のほど、月見るあひだなどに、一つ二つなど思ひてものしけり。

（安和二年八月、一八四頁）

兼家を取り巻く状況が変化する安和年間に、実頼息である頼忠の依頼によって道綱母が歌を詠んだという点についてはさまざま議論がある（6）。いずれにしても、この屏風歌詠進が道綱母の歌人としての才能を認めた上で要請されたものであるという見解は揺るがないだろう。当時宮仕えをしていない女性が屏風歌を詠進する例が具体的には確認できないことも、その証左であるといえる。こうした中巻の記事を踏まえると、下巻の女絵記事も、道綱母の和歌の才能を認めた上で、遠度がその和歌を期待したものと考えてよいのではないだろうか。また、養女求婚記事における遠度については、これまで道綱母との「男女の交渉」が盛んに論じられてきた（7）ように、養女ではなく道綱母とのやりとりが中心に記されている。遠度は、道綱を介して、あるいは直接道綱母の元を訪れて交渉を楽しんでいたと読むことができるのである。この点から見ても、遠度が道綱母の和歌を求めることは不自然ではなかったに違いない。

なお、屏風歌以外で、絵に和歌を付けるよう依頼があったと思われる例も、若干見出される。『三十六人集』収載『能宣集』三二一番詞書には、「きさいの宮のおほせごとにて、ゑにつけさせたまふ、たかき山のいと心ぼそくて、人もほふしもむげになし」と記されている。また、『長能集』八〇番詞書には、「同じ院の、御手づからかみゑかかせ給ひて、人々に歌つけさせたまひしに、秋の前栽さきみだれたるもみぢおもしろき所に」とある。「同じ

院」とは花山院のことである。花山院については、『公任集』三一二番詞書にも「花山院のかかせたまへるかみゑにうたつけて給はせたりけるに、人々さるべき所はつけはててなかりければ、人のつるかひてふみをひろげてゐたる所に」との記述が見られる。いずれも非常に高貴な人物からの依頼ゆえ、『蜻蛉日記』下巻の当該記事と同様の例とは言い難い面もあるが、絵と和歌とが密着する例として注目しておく。

ところで、当該記事では女絵につけられた道綱母の詠歌が遠度のもとに渡るわけだが、養女求婚記事中には同様に、道綱母によって書かれたと思しき和歌が近しい人々の手に渡ってゆく記事がある。「いまさらにいかなるこまかなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を」という和歌である。この和歌は遠度によって破り取られ、持ち出されることになる。その後、持ち出された和歌は兼通にまで伝わっていたことが知られるのである。

昨夜見せし文、枕上にあるをみれば、わが破ると思ひしところはことにて、また破れたるところあるは、あやし、と思ふは、かの返りごとせしに、「いかなるこまか」とありしことの、とかく書きつけたりしを、破り取りたるなべし。

（天延二年五月、三四八頁）

宵のほど、火ともし、台などものしたるほどに、せうととおぼしき人、近うはひ寄りて、懐より、陸奥紙にてひきむすびたる文の、枯れたる薄にさしたるを、取り出でたり。「あやし、誰がぞ」と言へば、「なほ御覧ぜよ」と言ふ。開けて、火影に見れば、心つきなき人の手の筋にいとよう似たり。書いたることは、「かの『いかなるこまか』とありけむはいかが、

霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつけてしがな

あな心苦し」とぞある。わが人に言ひやりて、くやしと思ひしことの七文字なれば、いとあやし。……

（天延二年十月、三五四～三五五頁）

こうした和歌の流出は、兼家の兄弟という近しい関係の人々の間での和歌享受のさまを示すものと考えられ、それが再構成されて記述されているという特徴がここには指摘できる(8)。女絵の記事も、メッセージ性を持つ絵とそこに付された和歌が他人の手に渡ってゆく事態を、遠度の積極的関与や道綱母の反応をあえて記さずに書いている。この点において、当該記事は「いまさらに」詠の和歌流出記事と類似するものと言えよう。

以上、女絵記事において、遠度が絵をよこす行為それ自体が、道綱母の和歌を求める行為であった可能性を考察した。次節では、当該記事が一連の求婚記事中でどのように位置づけられるのかを、女絵の構図を検討することによって考えてゆく。

三、「やもめ」の構図と養女求婚記事

一般的な女絵の構図として、池田［一九八四］に次の五つのパターンが挙げられている。

㈠垣間見、㈡女の家を訪れ面会を求める男、㈢対面し語り合う男女、㈣独り住みの男、或いは女、㈤手紙を書く男、或いは女

また、「やはり人家は重要で、画中人物はその外から見える場所に配されていたのではなかろうか。例えば、簀子縁、簾を巻き上げた廂の間、釣殿、籬のかたわら、といった伝統的な場所が想像される」とも述べられている。当該記事の構図は、「釣殿とおぼしき高欄におしかかりて、中島の松をまぼりたる女」が「釣殿」という場所に、「やもめ住みしたる男の、文書きさしてつらづゑつきて、もの思ふさましたる」が㈣および㈤のパターンに該当する。いずれも特にかわった構図ではなかったようである。

このような一般的な構図の絵が日記中に叙述されたのはなぜだろうか。先行研究では主に、二枚の絵に託された男女の関係について論じられている。例えば、守屋［一九九一］では、「兼家に執する心の強い道綱母が、絵柄に触発されてゆくりもなくその心の内を歌に託して表出した体のものと見做すべきだろう」とされ、また川名［二〇〇〇］では、「この女絵二図には男の求愛の意図が濃厚に提示されていると見られる…（中略）…ここの、絵に裏打ちされた道綱母の歌が醸成する物語には、兼家の存在が響かされてこそ彼女にとって感情移入し得る画面となるはずである」と論じられる。こうした諸氏の見解には首肯できる点もあることは確かである。（b）の絵と和歌については従来説がある程度みとめられるだろう。しかし、「はじめに」でも述べたように、道綱母の感情を投影しているという視点だけでは把握しきれない（c）の絵と和歌については、特に再検討を加える必要がある。以降、（c）の「やもめ住みしたる男」の構図について検討したい。

そもそも「やもめ」という語は和歌に詠まれる場合には恋愛の雰囲気を持つことも多い語である。当該の絵においても、「やもめ住みしたる男」を、養女あるいは道綱母の恋の相手としての遠度と捉えることができる。また、一方で兼家の姿を重ねるという見解もある（守屋［一九九一］など）。こうした視点から「男」を遠度あるいは兼家であると比定することももちろん可能であり、それらの視点は有効であろう。一方で、「やもめ」の絵に和歌が付けられた用例を私家集より掲出すると、恋とは異なるイメージがあわせて看取されることにも注意しなければならない。

絵ものがたりにねびたるやもめなるながめてゐたるところ
ながむればくもらぬ月のうらやましいかで浮世を出でて住むらん（『公任集』・三一四）

「浮世を出でて住む」といった表現から、この『公任集』三一四番歌の「やもめ」の絵は寂しい情景を描いたものであり、ともすれば世を遁れているようにも捉えられるものだったと推測できる。ここで、（c）の絵についても同様の雰囲気を持つものであったと仮定するならば、この「やもめ」の絵と、次に掲げる当該記事直前の記述との連続性が見えてくるのである。

さくねりても、又の日、「助の君、今日人のがりものせむとするを、もろともに寮に、と聞こえになむ」とて、門にものしたり。例の硯乞へば、紙置きて出だしたり。入れたるを見れば、あやしうわななきたる手にて、「昔の世にいかなる罪をつくり侍りて、かう妨げさせ給ふ身となり侍りけむ。あやしきさまにのみなりまさり侍るは、なり侍らむこともいとかたし。さらにさらに聞こえさせじ。今は高き峰になむ登り侍るべき」など、ふさに書きたり。かへりごと、「あなおそろしや。などかうはのたまはすらむ。うらみ聞こえ給ふべき人は、ことにこそ侍るべかめれ。峰は知り侍らず。谷のしるべはしも」と書きて出だしたれば、助ひとつに乗りてものしぬ。助のたまはり馬、いとうつくしげなるをとりて帰りたり。

（天延二年四月、三三七～三三八頁）

これは、なかなか決まらない結婚の日取りにしびれをきらした遠度が、道綱母邸を訪れて恨み言を述べる記事である。傍線部「今は高き峰になむ登り侍るべき」という遠度の言葉は遁世の雰囲気を持つものであり、先に私家集の用例で確認した「やもめ」の構図とも似通っていよう。さらに、この記事には遠度が孤独感を訴える様子が表現されている。これも「やもめ」の孤独な様子と響き合っているのではないか。つまり、求婚者である遠度が「やもめ」としてのイメージを持って女絵の記事へと繋がっていることが指摘できるのである。女絵の記事は独立したものとして求婚記事中に置かれているのではなく、直前の叙述と連続性を持つものと考えられるのである。

また、波線部「例の硯乞へば、紙置きて出だしたり。入れたるを見れば、あやしうわななきたる手にて」という箇所では、遠度の筆跡について言及されていることにも目配りしておきたい。後述するが、女絵の記事周辺には兼家の手紙を求める記事が置かれている。波線部は、こうした叙述とも緩やかにつながってくる表現であると考えられる。

四、養女求婚記事における手紙と「女絵」

――「書かれたもの」をめぐって――

次に、（c）の絵に描かれた「ふみ書きさして」という表現を手掛かりとして、女絵記事と前後の求婚記事との関連性を考えてゆきたい。手紙が絵に描かれるという現象は、先に引用した池田［一九八四］でも女絵の一般的な構図として挙げられていた通り、当時の絵によく見られるものだったようである。中でも特に私家集に見られる用例を挙げる。

やりみづのつらにきくさけり、をとこふみかく
あかれつつかげもみるべくみぎはなるきくにこひしき人はならなむ（『中務集』・一五）

四条の后のさうしの絵によめる、をうなのけさうぶみかけるを、ともだちどものみれば
あきなればたれもいろにぞなりにける人の心につゆやおくらむ　（『重之集』・一五）

『中務集』一五番詞書は、一一番詞書に「三条のおほいまうちぎみ権中納言とつかうまつれる屏風の絵に」とあるので、絵の構図を説明したものとわかる。ここからも、手紙を書いている男の構図が存在したことが確認される。では、なぜこうした一般的な構図の絵について、下巻のこの箇所で言及する必要があったのだろうか。

ここで、養女求婚記事中に手紙に関わる記事が散見されることに注意する必要がある。手紙に関わる記事についてはすでに川村論文があるが（9）、女絵の記事に見られる手紙については詳細な検討がなされていない。しかし、女絵の記事が記される天延二年四月周辺の記事群には、特に兼家の手紙を求めるような記事が見られることには注意すべきである。それらは言うまでもなく、当該記事における画中の手紙とは表現の位相が異なる。だが、男が「ふみ書きさして」いる構図が、前後の手紙にかかわるやり取りを読者に想起させる機能を持っていると考えることは可能であろう。そもそも、養女求婚記事群は、手紙のやりとりを軸に展開しているともいえるだろう。手紙は養女求婚記事中でも重要な小道具なのである。当該記事の前後で、特に手紙を軸として話題が進んでゆく記事を次に掲げる。

さて、なほここにはいといちはやきここちすれば、思ひかくることもなきを、かれより「かくなむ、『仰せありき』とて責むると聞こえよ」とのみあれば、「いかでさはのたまはするにかあらむ。いとかしがましければ、見せたてまつりつべくて。御返り」と言ひたれば、「さは思ひしかども、助のいそぎしつるほどにて、いとはるかになむなりにけるを、もし御心かはらずは、八月ばかりにものしたまへかし」とあれば、いとめやすきここちして、「かくなむはべめる。いちはやかりける暦は不定なりとは、されば こそ聞こえさせしか」とものしたれば、返りごともなくて、とばかりありて、みづから「いと腹立たしきこと聞こえさせになむ、まゐりつる」とあれば、……

（天延二年四月、三三三～三三四頁）

かくてなほおなじごと絶えず、「殿にもよほし聞こえよ」など常にあれば、かへりごとも見せむとて、「かくのみあるを、ここには答へなむわづらひぬる」とものしたれば、「ほどはさものしてしを、などかかくはあらむ。八月待つほどは、そこにびびしうもてなし給ふとか、世に言ふめる。それはしも、うめきも聞こえてむかし」などあり。たはぶれと思ふほどに、たびたびかかれば、あやしう思ひて、「ここにはもよほし聞こゆるにはあらず。いとうるさく侍れば、『すべてここにはのたまふまじきことなり』とものし侍るを、なほぞあめれば、見たまへあまりてなむ。さて、なでふことにも侍るかな。

いまさらにいかなるこまかなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を
あなまばゆ」とものしけり。

（天延二年四月、三四〇～三四一頁）

以上の記事はいずれも女絵の記事と接近した位置にある。頻繁に養女との結婚の日取りについて迫ってくる遠度に見せるための手紙を、道綱母が兼家に催促するものである。点線

部「いかでさはのたまはするにかあらむ。いとかしかましければ、見せたてまつりつべくて。御返り」、さらには「かへりごとも見せむとて」といった箇所から、兼家の言葉を証明するものとして、実物の手紙そのものが求められていたことが窺われる。「書かれたもの」自体のやりとりという面からも、女絵の記事と前後の記事との連続性を捉えることができよう。

最後に、（c）の絵につけられた「ささがにのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも」の和歌についても見てゆく。この歌は、男が複数の女性に手紙を書き送っているさまを詠んだものである。前節で考察したように、絵に描かれた「やもめ住みしたる男」が遠度と重なるとすると、遠度の浮気な様子を揶揄するものと見てよいだろう。こうした遠度の様子は、

七月中の十日ばかりになりぬ。頭の君、いとあざるれば、われを頼みたるかなと思ふほどに、ある人の言ふやう、「右馬頭の君は、人の妻をぬすみとりてなむ、あるところにかくれゐたまへる。いみじうをこなることになむ、世にも言ひ騒ぐなる」と聞きつれば、……

（天延二年七月、三五〇～三五一頁）

というように、一連の養女求婚が、遠度が「人の妻」を盗むことで破談になるという結末を暗に示しているように見える。女絵の記事はこの結末が明らかになった後に執筆されたと見て差し支えないだろうから、「ささがにの」詠はこうした結末をほのめかすような内容として、この一連の養女求婚記事の中に置かれることになった可能性がある。あるいは当該記事の時点、すなわち天延二年四月における遠度の状態――養女に求婚しつつも、一方で「人の妻」とも関係を持とうとしていた状態――を示唆するかのような内容になっているともいえるだろう。「人の妻」とは誰なのか、また、いつ頃から遠度とその女との交渉があったのか、確認する術がないため、どちらも明言することはできない。しかし、いずれにしても、当該記事は養女求婚の結末と対応していることが指摘できる。さらに、「人の妻」を盗むという遠度の行動は、「世にも言ひ騒ぐなる」とあるように噂になったようなので、同時代の読者にはこの記事の示唆するところが理解できたものと思われる。

和歌の表現を見ると、「ささがに」が巣を「掛く」行為に「書く」意が響いていると解釈できる和歌の用例は、すでに斎藤［二〇〇三］の指摘にある通り『蜻蛉日記』以前には見られない。一方、道綱母に関連するものは全三例あり、当該箇所以外の例は以下の通りである。

ささがにのいまはとかぎるすぢにてもかくてはしばしたえじとぞ思ふ（10）

（天禄元年六月、二〇〇頁）

返事するをり、せぬをりの、ありければ

かくめりとみればたえぬるささがにのいとゆゑかぜのつらくもあるかな

（『道綱母集』・二五・道綱）

「ささがに」ではなく「くも」という表現にまで目を向けると、『蜻蛉日記』下巻にはさらに次の用例が見出される。道綱と大和だつ人との贈答である。

大夫、例のところに文やる。さきざきの返りごとども、みづからのとは見えざりければ、恨みなどして、

夕されのねやのつまづまながむれば手づからのみぞ蜘蛛もかきける

とあるを、いかが思ひけむ、白い紙にものの先して書きたり。

蜘蛛のかくいとぞあやしき風吹けば空に乱るるものと知る知る

たちかへり、

つゆにても命かけたる蜘蛛のいにあらき風をば誰か防かむ

「暗し」とて、返りごとなし。またの日、昨日の白紙思ひ出でてにやあらむ、かく言ふめり。

たぢまのやくぐひの跡を今日見れば雪の白浜白くては見し

とてやりたるを、「ものへなむ」とて、返りごとなし。

（天禄三年八月、三〇五～三〇六頁）

こうした修辞について、斎藤［二〇〇三］は「……道綱母が、「くも」・「ささがに」が巣を「掛く」という常套的な発想に添えて歌いかける「書く」はみな、「書く」ことを望み促す、あるいはあちらこちらに書く意をあらわしていた」と指摘している。あわせて、右の道綱と大和だつ人との贈答記事において、波線を付したように「書く」行為だけではなく、何に、どのように書かれていたのかという点までも明記されていることがわかる。女の筆跡をめぐる展開の中で、「白い紙にものの先して書きたり」とあるので、大和だつ人からの和歌は筆跡がわからないように書かれていたものと推測される。

前節までで触れた遠度の筆跡が記される例、あるいは兼家の手紙そのものを求める例ともあわせて、『蜻蛉日記』下巻には「書く」行為だけではなく、それに付随する事柄、すなわち「筆跡」「紙」「硯」などにまで言及してゆく記事が増える傾向が認められよう。下巻冒頭に近い箇所で女房が「かはらけ」に歌を書きつける記事から始まり、幾度かに分けて記される道綱贈答歌群、そして本章でも取り上げた養女求婚記事など、明らかに上巻および中巻よりも頻出する。女絵に描かれた「文書きさして」いる男の姿、および絵に書きつけられた道綱母の和歌は、こうした養女求婚記事群、ひいては下巻の特徴の中に位置付けられるのではないだろうか。

五、おわりに

以上、女絵の記事について検討してきた。まず遠度が女絵を道綱母のもとによこす行為それ自体が道綱母の詠歌を求める行為であった可能性を指摘した。とりわけ（c）の絵の

構図からは、当該記事が前後の記事との連続性を保って置かれている記事であることを明らかにした。また、（c）の構図が求婚記事における手紙を想起させ、そこにつけられた「ささがにの」詠が求婚の終焉部分と対応していることにも言及した。こうした点から、当該記事は養女求婚記事全体を象徴的に表しているものであると思われる。女絵は屏風絵とは異なり、多分に物語的な雰囲気を持つものであったようである。養女求婚記事のいわゆる「物語的」特徴を考えあわせても、やはり女絵の記事が一連の求婚記事の縮図となっていると考えられる。それが求婚記事の中に置かれることで、この部分は一種の入れ子構造になっているともいえるだろう。

さらに、「ささがに」が巣を「掛く」ことに「書く」意を掛ける和歌が道綱母によって絵に書きつけられたことは、当該記事が養女求婚記事のみならず下巻に頻出する「書く」行為、および「書かれたもの」を記していく流れの中に位置付けられることをも示すと思われる。下巻の個々の記事は、それぞれがある程度有機的に連関性を持っているようである。

従来、「記事の拡散」あるいは「主題の分裂」（11）などという否定的な面が論じられてきた下巻は、確かに中巻と比較すると、まとまった内容に仕上がっているとはとても言い難い。しかしこれまでの検討から、個々の記事、あるいは記事群については有機的な連関性をある程度は認められることが明らかになった。下巻では上巻・中巻以上に人間関係が複雑化するため、従来なされてきたような兼家との関係の書かれ方に議論を収斂してゆくような方法のみを採る限り、下巻の評価は低迷し続けるに違いあるまい。兼家の兄弟たち、あるいは道綱・養女らという横と横に広がった関係の中での記事の集成が『蜻蛉日記』下巻なのではないだろうか。そのような記事群の中で、作者の工夫あるいは試みを再検討してゆくべきであろう。養女求婚記事だけではなく、下巻に収められているそれぞれの記事について検討を進めることが、今後の課題である。

《注》

（1）本論文の第Ⅰ部第三章では、道綱母以外の人物も上巻を意識した和歌を詠んでいたとおぼしきことを明らかにした。また、第Ⅰ部第四章では、いわゆる養女求婚記事中で遠度によって破り取られた手紙に注目し、道綱母の詠歌が兼家の兄弟間へ流出していく様子を再構成して記述していることについて論じた。これらも、なるべく「作者の内面」を探るという視点から一歩引いて下巻を読み解こうという試みである。

（2）本論文、第Ⅰ部第三章の注（1）（四四頁）を参照。

（3）池田［一九八四］、池田［一九八五］などがある。

（4）守屋［一九九一］、川名［二〇〇〇］などがある。

（5）「歌絵」については、川村裕子氏より御教示いただいた。なお、『蜻蛉日記』に先行する作品における「歌絵」の用例としては、『後撰集』一三二四番歌詞書に「みちのくにへまかりける人に、あふぎてうじてうたゑにかかせ侍りける」（離別・よみ人しらず）とある。

（6）渡辺［一九八七］、宇留田［一九八七］、守屋［一九九四］、高野［二〇〇〇］などがある。

（7）主なものに、石坂［一九八一］、川村［一九八四］、守屋［一九九一］、大内［一九九三］、金子［一九九三］、川名［二〇〇〇］などがある。

（8）「いまさらに」詠の流出に関わる事態については、第Ⅰ部第四章においてすでに論じた。

（9）川村［一九八四］、川村［一九九六］、川村［二〇〇三a］、川村［二〇〇三b］、川村［二〇一〇］。

（10）当該和歌の「かくて」の掛詞は、注釈書によって以下のように説が分かれている。

「掛く」と「斯く」……新全集

「掛く手」と「書く手」……全注釈

「斯くて」と「書く手」……新大系

「ささがに」および「すぢ」の語との関連から全注釈の解釈が妥当かもしれないという見通しを持っているが、詳細な検討は今後の課題とする。

（11）木村［一九六一］、木村［一九八一］では、下巻で主題が分裂し、それが拡大・拡散しているのだと述べられている。また、守屋［一九七五］、水野［一九九五］でも木村論文を一旦は認めた上で、下巻についての議論が展開されている。

《参考文献・引用文献》

伊井　春樹［一九九二］「歌絵について」橋本不美男編『王朝文学　資料と論考』笠間書院

池田　忍［一九八四］「王朝「物語絵」の成立をめぐって――「女絵」系物語の伝統を考える――」『東京女子大学読史会紀要　史論』37

池田　忍［一九八五］「平安時代物語絵の一考察――「女絵」系物語の成立と展開――」『学習院大学哲学会誌』9

石坂　妙子［一九八一］「「世の中」の変容②――遠度求婚譚」『文芸研究』97　日本文芸研究会

宇留田初実［一九八七］「蜻蛉日記中巻「屏風歌詠作」の記事をめぐって」『中古文学』40　中古文学会

大内　英範［一九九三］「蜻蛉日記下巻の一考察――遠度の養女求婚記事をめぐって――」『日本文学論究』52　国学院大学国文学会

金子富佐子［一九九三］『蜻蛉日記』下巻試論――〝遠度求婚〟の記事の方法――」『日記文学研究　第一集』新典社

川名　淳子［二〇〇〇］「男と女の媒体としての「女絵」――『蜻蛉日記』下巻「女絵」の記事から――」『論集日記文学の地平』新典社（→川名［二〇〇五］）

川名　淳子［二〇〇五］　『物語世界における絵画的領域――平安文学の表現方法――』ブリュッケ
川村　裕子［一九八四］　「蜻蛉日記下巻の一考察――遠度求婚譚をめぐって――」『立教大学日本文学』52
川村　裕子［一九九六］　「蜻蛉日記の文――平安時代の文の交換を中心に――」『立教大学日本文学』77
川村　裕子［二〇〇三a］　「和歌における装飾――『蜻蛉日記』『源氏物語』の「陸奥紙」再見――」兼築信行・田渕句美子編『和歌から歴史を読む』笠間書院
川村　裕子［二〇〇三b］　『蜻蛉日記』下巻「遠度求婚譚」の文を読む」伊藤博・宮崎荘平編『王朝女流文学の新展望』竹林舎
川村　裕子［二〇一〇］　「王朝文化と手紙――『蜻蛉日記』下巻の奇妙な手紙――」秋澤亙・川村裕子編『王朝文化を学ぶ人のために』世界思想社
木村　正中［一九六一］　「蜻蛉日記下巻の構造」日本文学協会『日本文学』10‐4
木村　正中［一九八一］　「蜻蛉日記の主題」『一冊の講座　蜻蛉日記』有精堂
倉田　実［二〇〇六］　『蜻蛉日記の養女迎え』新典社
斎藤菜穂子［二〇〇三］　「蜻蛉日記成立の基底――「書く」という語から――」『国文学研究』141　早稲田大学国文学会（→斎藤［二〇一一］）
斎藤菜穂子［二〇一一］　『蜻蛉日記研究――作品形成と「書く」こと――』武蔵野書院
高野　晴代［二〇〇〇］　「道綱母の歌人意識――女性歌人における屏風歌詠進の視点から――」『国文目白』39　日本女子大学国語国文学会
田島　智子［二〇〇七］　『屏風歌の研究　資料篇』和泉書院
福家　俊幸［二〇一一］　「あとがき」『王朝女流日記を考える――追憶の風景』福家俊幸・久下裕利編　武蔵野書院
水野　隆［一九九五］　「蜻蛉日記下巻の記事構成の方法に関する試論――巻末歌集重複歌「今さらに」を中心にして――」上村悦子先生頌寿記念論集編集委員会編『王朝日記の新研究』笠間書院
守屋　省吾［一九七五］　「道綱母における私家集纂集の他律的要因」『蜻蛉日記形成論』笠間書院
守屋　省吾［一九九一］　「蜻蛉日記下巻考――遠度求婚の経緯をめぐって――」『論集日記文学　日記文学の方法と展開』　笠間書院
守屋　省吾［一九九四］　「屏風歌詠進のこと――『蜻蛉日記』小一条左大臣師尹五十賀に関連して――」『立教大学日本文学』72
渡辺　久寿［一九八七］　「『蜻蛉日記』研究ノート――師尹五十賀屏風歌の記事の意義について――」『山梨英和短期大学紀要』20

第二部

藤原師輔子女周辺の文学活動

――伊尹・兼通・本院侍従を中心に――

第一章

『一条摂政御集』における伊尹と本院侍従

一、はじめに

十世紀後半、藤原忠平一門とその周辺を中心に私家集の編纂が盛んであったことは、山口［一九六七］において確認されている。そこで使われている「摂関家歌壇」という術語が適当であるかどうかは検討の余地が残されているとしても、そこに何らかの文学的営為が見て取れることは否定できない事実であろう。今西［一九八九］では、その範囲を『紫式部日記』や『枕草子』にも広げ、「摂関家歌壇」から「摂関家文壇」あるいは「後宮文壇」に連なる流れを提示している。今西［一九八九］における、「摂関家歌壇」から「摂関家文壇」あるいは「後宮文壇」への転換点、つまり、私家集という韻文作品から散文の作品への転換点に『蜻蛉日記』を据え、特に上巻に「『兼家集』的性格」が見られるという論は示唆に富んでいる。

しかし、両論文に提示された系図を見るに、『蜻蛉日記』ばかりが重要な作品であるとは思われない。それは、『蜻蛉日記』に描かれた時代と同時代を生きた人々に関する作品に、「物語的私家集」と称されるもの、また、『多武峯少将物語』のように写本によって「物語」という名称や「日記」という名称を持つ作品が存在するからである。これらの作品群を取り上げて、韻文か、あるいは散文か、ということを問題とすることに果たして意味があるのか。現在我々が使用する「私家集」「日記文学」などというジャンルは、我々の読み方や捉え方によって規定されているものにすぎない。三角［一九九二］における、「（引用者注：『豊蔭』及び『いほぬし』周辺の作品について）物語か家集か日記か、自作か他作かなどという区分けがほとんど無意味になってしまうような様相をうかがうことができよう」という指摘は大いに首肯できる。それら文学作品の題に付された「日記」や「集」というようなものを無視するわけではない（1）が、現代のジャンル区分にこだわらない考察が必要となろう（2）。

このような視点から、『蜻蛉日記』周辺の作品に注目してゆきたい。本章では特に、伊尹の家集である『一条摂政御集』について検討する。『一条摂政御集』の前半（一から四一番歌）は「とよかげ」と称され、「大蔵史生倉橋豊蔭」という人物を主人公として冒頭で紹介し、主人公と複数の女（3）との贈答を収めるものである。この「大蔵史生倉橋豊蔭」なる人物は伊尹であり、私家集編纂の際にこのような趣向が凝らされたというのが定説である。後世のものであるが、『大鏡』に「いみじき御集つくりて、豊景と名のらせたまへり」とあることからも、そのように考えてよいと思われる。ただし、四二番以降は「とよかげ」の部とは明らかに異なる性質を持っている。「とよかげ」の部で使用された「とよかげ」「翁」などの語は見られず、かわりに「おとど」という呼称が多く用いられている。ここから、四一番と四二番の間に大きな断層があることは確実である。

「とよかげ」は伊尹晩年の作であるとする説が広く支持されている（4）。これは「翁」という呼称を使っていることだけでなく、「倉橋豊蔭」という名前との関連（5）や作品中の「おほやけごと」という語が安和の変を指している（6）という説にもよる。これらの見方が正しいのかどうか、確定的な外部徴証がない以上断言することはしないが、ひとまず従っておくこととする。

「とよかげ」冒頭には、主人公たる人物の紹介が記されている。以下に掲出する。

大蔵史生倉橋豊蔭、くちをしき下衆なれど、若かりけるとき、女のもとにいひやりけることどもをかきあつめたるなり。おほやけごとさわがしうて、をかしと思ひけることどもありけれど、忘れなどしてのちに見れば、ことにもあらずぞありける。

ここに伊尹の「身のやつし」を見、その方法について考察する論は、益田［一九八一］及び下浅［二〇〇二］など諸氏によってなされてきた（7）。

忠平一門周辺の文学においては他にもこのような身分の低い主人公を設定する作品がある。師氏の『海人手古良集』である。師氏は師輔の弟、つまり伊尹の叔父にあたる。伊尹が私家集編纂にあたって、叔父の私家集の趣向をとりいれたことが考えられる。『海人手古良集』では家集の題としてその設定が記されるのみであり、内容は初期の百首歌の一つであると考えられるが、伊尹はそれを参考にし、家集の内容にまで趣向を施したのではないか（8）。もちろん、『一条摂政御集』が忠平一門において生成された家集及びその周辺という狭い世界からのみ影響を受けたとは考えられず、同時代の様々な形式の文学作品の影響も無視することはできないが、他作品と比較して、より近い場で生成された作品からの影響が大きいのだろう。それは、おそらくこのような趣向だけにとどまらないと思われる。たとえば和歌の中で使われる表現やその詠みぶりなどにもこうした文学圏内部での影響関係が指摘できるのではないだろうか。

本章では、まず「とよかげ」一番歌の表現を詳細に検討した上で他作品との影響関係を調査する。一方、四二番以降は伊尹薨去後、すなわち天禄三（九七二）年以降に他人によって纏められたとされ、「他撰部」と呼ばれている。本章ではこの「他撰部」についても検討する。ここには、本院侍従と伊尹との贈答歌群、および本院侍従の独詠歌群が収載されている。本院侍従は兼通との交渉でも知られる人物であり、伊尹・兼通きょうだいに関わる作品を読み解く上で注意すべき人物であろうと考えられる。そこで、兼通との関連も指摘できる本院侍従に関わる歌群を見てゆくことで、『本院侍従集』とのつながりも考察する。特にその成立について私見を述べることとなる。

二、一番歌の発想

先に示したように、「とよかげ」冒頭は主人公の紹介から始まる。体裁としてはそれが一番歌の詞書となっているのだが、直接一番歌に関わる部分は次に掲出した本文中の「いひ

かはしけるほどの人」からであると考えてよいだろう（9）。一・二番歌にはさらに『伊勢物語』初段を意識したと思われる後書が添えられている。

いひかはしけるほどの人は、豊蔭にことならぬ女なりけれど、年月をへて返りごとをせざりければ、負けじと思ひていひける。

あはれともいふべき人はおもほへで身のいたづらになりぬべきかな（一）

女、からうじてこたみぞ

なにごともおもひ知らずはあるべきをまたはあはれと誰かいふべき（二）

はやうの人はかうやうにぞあるべき。今やうの若い人は、さしもあらで上ずめきてやみなんかし。

一番は百人一首に採られていることでよく知られる歌である。しかし、この一首には他の贈答に多用されているような技巧がほとんど見られない。第Ⅱ部第二章で扱う『本院侍従集』には、技巧的ともいうべき歌が並べられているのと対照的である。「とよかげ」内部においても、他の歌には技法が多用されており、一番歌は作品中でもやや特殊なものといってよいだろう。たとえば、「とよかげ」八から一〇番の贈答は次のようなものである。

とよかげ、大炊御門わたりなりける人に通ひける。人おほかりけるなかに、男の、家の前をつねに渡りて、ものもいはざりければ、女

雲ゐには渡るときけど飛ぶ雁の声きゝがたき秋にもあるかな（八）

男、返し

雲ゐにて声きゝがたきものならばたのむの雁も近くなきなむ（九）

またたちかへり、女

言伝てのなからましかばめづらしきたのむの雁も知らでぞあらまし（一〇）

八番の「大炊御門わたりなりける人」の歌は、「雲ゐ」「渡る」「秋」という「雁」の縁語を使用し、掛詞もいくつか用いて、技巧が凝らされたものになっている。対して、「男」の九番歌は『伊勢物語』十段を踏まえて「たのむの雁」という語を用い、その返歌である一〇番歌はさらに『漢書』「蘇武伝」（10）によっている。他にも、次の一九番のやりとり、

翁つねに恨みて、「人にはいはずいはみがた」といへりければ、女

いはみがた何かはつらきつらからばうらみがてらにきてもみよかし（一九）

といへりけれど、男ありければえいかず。

には『拾遺集』恋五のよみ人知らず歌、「つらけれど人にはいはずいはみがた恨みぞふかきこころひとつに（九八〇）」が踏まえられている。これらのように趣向を凝らしたものがほとんどである。これらと比較すると、一・二番の贈答歌はどちらも心情のみを詠み込んで

いる点で注目せざるをえない。その素朴さゆえに参考歌とはっきり呼べるものは数少ないのだが、同じような表現及び発想を持つ歌には特徴が見られる（11）。

まず、「あはれとも」を初句とする歌は「とよかげ」以前にもいくつか見られるのであるが（12）、中でも注目すべきは『清慎公集』四七・五四番

女に

あはれとも思ふや君は年をへて　つらきをしひて頼む我をば（四七）

女に

あはれとも人もみるべく諸共に　有明にのみよをはてし哉（五四）

及び『多武峯少将物語』一番

あはれとも思はぬ山に君し入らばふもとの草の露と消ぬべし

である。『清慎公集』は伊尹たちの伯父にあたり、関白太政大臣・摂政になった実頼の家集であり、『多武峯少将物語』は伊尹の異腹の弟である高光が出家した際の様子を描いている。『多武峯少将物語』については人のことを「あはれ」といっているのではないが、『清慎公集』四七番は自分のことを「あはれ」と「思ふ」だろうかという歌である。五四番も人が「あはれ」と「見る」というもので、どちらも『一条摂政御集』一番歌に近い使い方ではないだろうか。

次に、「あはれ」な「身」が「いたづらに」なってしまうという趣向の歌であるが、これは近いものに『九条右大臣集』三番歌がある。

おなじとの、おほ北のかたとわらはどち、きこえかはしたまひける

行きかへりみはいたづらになりぬとや命にかへよあはれとおもはむ

『九条右大臣集』は伊尹の父師輔の家集である。この歌は解釈が難しいのだが、「み」が「いたづらに」なることが「あはれ」であるという。「あはれとも」という初句及び「あはれ」な「身」が「いたづらに」なってしまうというモチーフは、こうした作品に特徴的な表現であると必ずしも言えるわけではないが、近い場において好んで使用されていたという事実は確認されるのではないだろうか。

また、「とよかげ」の「あはれ」については、宮谷［一九九四］が「冒頭部でも、「をかし」と思っただけのことは「わすれ」たと言っている。「をかし」が客観的な興味に重点を置くという、相反する要素を持った概念であるとするならば、『とよかげ』はやはり、「あはれ」の系列に立つものと見なければならないだろう」という示唆に富む論を展開してい

る。初句が「あはれとも」である一番歌を冒頭に置いたことの意味はここにもあらわれているのかもしれない。

三、本院侍従関連贈答歌群――本院侍従の答歌に注目して――

本節では、本院侍従に関わる部分を取りあげ、主に和歌に注目して検討してゆく。

本院侍従の名は、『一条摂政御集』と『本院侍従集』だけではなく、『朝忠集』及び、『仲文集』に混入する『国用集』にも見える（13）。『朝忠集』には他に「本院のゆげひ」「本院の少将」などの人物が見えるので、これらは同じ本院女御に仕えていたものであろう。『元良親王集』冒頭においても、「夕暮れと朝と、恋の苦しさはどちらがまさっているか」という元良親王の歌に答えた数首の女性詠のうち、詠者名を記していない一首が、『新後拾遺集』『栄花物語』及び『古本説話集』ではそれぞれ「本院侍従」「本院の侍従」「本院の侍従の君」という名を付されている。また家集以外では、「天徳四年内裏歌合」及び「規子内親王前栽合」に出席していることがうかがえる他、『あしたの集』（14）に他文献に見えない歌一首が収められている。これらは本院侍従が当時から名の知れた女性であったばかりか、その歌才を評価されていたということを示していよう。なお、後世では『今昔物語集』及び『宇治拾遺物語』にも「本院侍従」の名が見られる。これらは芥川龍之介の小説『好色』に至るまで本院侍従のイメージを決定付けていると思われるが、平貞文と遣り取りをする女性として年齢を考えると、伊尹及び兼通と遣り取りをした人物とは異なるというのが定説であり、異論はない（15）。また『勅撰作者部類』では在原棟築女とされるが、これは年代に隔たりがあり、誤りであろう。

本院侍従がどのような人物であったかは、従来すでに議論の対象とされてきている。古くは鈴木脩一［一九三四］において本院侍従が仕えていたと思われる本院女御は安子であるという説が提示され、以降、本院侍従が誰に仕えた女房だったのかという議論が進められてきた。出仕順までを含めると現在でも定説を見ていないのだが、本院侍従は安子・徽子・慶子の三人に仕えたのではないかと見、本院女御は慶子であるとするのが大半である（16）。比較的近年の研究では、堤［一九九三］において「本院侍従の出仕先は慶子→安子→徽子の順であったと考えてよいと思うのである」（傍線原文）と述べられている。ここで出仕順は詳しく検討しないが、ひとまず安子・徽子・慶子の三人に仕えたと考えて問題がないものと思われる。安子は伊尹・兼通らの妹であるし、徽子の母は師輔の姉妹なので、徽子は伊尹・兼通らの従姉妹にあたる。慶子も実頼の女であるので、こちらも伊尹・兼通の従姉妹にあたる。つまり、伊尹および兼通との交渉があったとされる時期に、本院侍従が三人のうち誰に出仕していたとしても、その主人は伊尹・兼通にとって遠い人物ではないのである。また『本院侍従集』に

返し、女

夏の夜の露とおもひてあかしてはあやにく我やぬれぎぬをきん（一〇）

とて、女のまかりいでにければ、あしたに、女の里にはあらで本院なりけり

とあり、女が自分の里ではなく主人の実家に下がっていることから、慶子と本院侍従に何か深いつながりがある可能性があることが荻窪［一九七八］他、諸論文に指摘されている。荻窪［一九七八］ではさらに「想像を逞しくすれば本院侍従は実頼が身分の低い女に生ませた子で、その子を実頼が引き取り自分の娘慶子に仕えさせたのではないか」との指摘があるが、根拠がない以上、推測に留まる（17）。但し、その場合には本院侍従は伊尹および兼通の従兄妹であることになる。ここでは取り上げないが、従来、『本院侍従集』冒頭

おほぢは太政大臣にてなんおはしける。いもうとは、きさきばらのみこに奉り給ひて、藤壺にぞさぶらひ給ひける。その御いとこさぶらひ給ひけり。

の解釈が問題となっている。「その御いとこ」が誰なのかという議論において注目すべき指摘であろう。

以上のように、本院侍従は伊尹及び兼通と近しい人物であったことが考えられる。しかも、安子は村上天皇中宮、徽子は斎宮女御であり、後に村上天皇に入内する人物である。彼女らに仕える本院侍従も、師輔子女周辺における文学活動の担い手として位置づけることができるのである。

『一条摂政御集』中で本院侍従関連の歌群と目されるものは次に挙げる部分である（18）。

・三一から四〇
・四二から四四
・九八から一〇〇
・一一五から一一八
・一四六から一五一
・一五二から一六四（本院侍従独詠歌群）

なお、一四六から一五一には後ろに「これまでみな本院の」とあり、一五一番で一旦区切りをつけるような意識が見えること、また、一五二番からは贈答ではなく独詠になることから、ここではひとまず異なる歌群としておく。この独詠歌群は中嶋［一九八一］により復元された「幻の「本院侍従集」」の大部分を占めている（19）が、ここでは詳述しない。

さて、ここからは「とよかげ」部における本院侍従ととよかげとの和歌に絞って、その特徴を考えてゆく。次に掲げるのは、三一から四〇番歌である。

とよかげ、中御門わたりなりける女を、いと忍びてはかなき所に率てまかりて、帰りてあしたに、

かぎりなく結びおきつる草枕このたびならず思ひ忘るな（三一）

返し

草枕むすぶ旅寝を忘れずはうちとけぬべきこゝちこそすれ（三二）
　翁、いかなることをかいひおきけん
さめぬとて人に語るな寝ぬる夜の夢よ〳〵といひし言の葉（三三）
　返し
あはすべき人もなき夜の夢なればさめつるほどに忘られにけり（三四）
　翁、この女のもとにきぬを忘れて、取りにやるとて
鈴鹿山いせをの海人の捨て衣しほたれたりと人や見るらん（三五）
　とて、とく賜へといひて侍りければ、返事に
我ためになるゝを見ればすて衣しほたれたりと見る人もなし（三六）
　この女、いかなることをかいひたりけん、心の鬼にとこの翁のいひたりければ
わがためにうときけしきのつくからにまづは心の鬼も見えけり（三七）
　翁、山とより帰りて、女のもとにやる
暮ればとく行きて語らん逢ふことのとほちの里の住み憂かりしを（三八）
　返し
逢ふことのとほちの里にほどへしは君は吉野と思なりけむ（三九）
　翁のひさしうまからざりければ
逢ふことのほどへにけるもこひしぎの羽の数にぞ思ひ知らるゝ（四〇）

これらの贈答は『本院侍従集』二八から三〇番歌との関連、つまり、兼通のもとから伊尹が本院侍従を奪ったという共通の事柄がおさめられているという点で取り上げられることが多かった（20）。しかし当該箇所について、従来の注釈書や論文における解釈の大半が実は間違っているのではないかと思われる和歌がある。それは、本院侍従による答歌である三二・三六である。

三二番歌について、たとえば注釈では現代語訳を「あの草深い宿で約束いたしました昨夜のことを忘れずにいては、あなたに心を許してしまいそうです。…」とし、新大系では「はかなく契り交わした旅寝の一夜を、お言葉のように、忘れずにいると、心まであなたを許してしまいそうになります」としている。どちらも三一番歌を受けて本院侍従が素直に返歌をしているという解釈である。この解釈の上で論を展開しているものも多く、曽根［一九八八］では先の引用の前半について、「はかなきところ」で一夜を過ごした結果女が「うちとけぬべきこゝちこそすれ」（32番歌）と心を開き始めたことこそが重要なのである」と論じられ、堤［一九八七］においても「女の歌を見ると、32番歌に「うちとけぬべきこゝちこそすれ」という句があり、以降とよかげに一応逆らっているように見せはするものの、彼に愛着を示している歌が多いので、とよかげが女を盗み出した件と女がとよかげに愛着を示しだしたことに何か関連性をもたせようとしているとは予想できる」と指摘されている。これに関連して三六番歌についても、たとえば新大系では三五番の「鈴鹿山の彼方、伊勢の漁夫の脱ぎ捨てた着物は、さぞかし塩染み汚れていると御覧でしょう。早くお返し下さい」という贈歌に対して、三六番歌を「私のために馴染み着萎えたお召物

と見れば、なつかしいと思いこそすれ、汚れていると見る人もございませんわ」と解釈している。

このように、三二・三六番歌の本院侍従からの答歌については、とよかげの贈歌に対して素直に答え、それがとよかげへの愛着を示しているという解釈にもとづいて、そこから伊尹と『本院侍従集』における兼通との関係を論じるものが主流であったように思われる。しかし、平安時代中期の男女の贈答においてはこのように男性の贈歌に対して素直な心情を示すものは少なく、むしろ贈歌を巧みに使って反発する意味の歌を詠むのが普通であった。本院侍従は先にも述べたように、天徳四年内裏歌合などにも参加しているほど和歌の上手な女性であり、容易に男性になびくような歌を詠むとは考えにくい。また、三一・三二番歌の贈答歌に関しては山崎［一九九八］に示唆に富む指摘がある。

この歌（引用者注：三二番歌）のキーポイントは「忘れずは」という言葉にある。これははっきりと仮定法で解釈しないと意味がぼやける。あの旅寝が忘れられなくてあなたに心を許してしまいそうと言っているのではなく、忘れなかったら、心を許してしまいそうと言っているのである。つまりその背後には、だからわたしはあの旅寝を忘れてしまうのよ。忘れないであなたに心を許したら、いつかはとんでもない辛い思いを味わうことになりますからね、というニュアンスが匿されているのである。

この解釈は大いに首肯できる。つまり、三二番はとよかげの歌に対する反発の意となり、やはり当時の贈答の型に則ったものなのである。よって、本院侍従が伊尹に「愛着を示している」とは言い切れないのである。

また、三六番歌については解釈が難しいのだが、先に挙げた新大系のようにとるのではなく、「すて衣」の「すて」に「飽きてしまって捨てた」意を読み取り、「しほたれ」の語に「涙で濡れている」意をとるのがよいのではないかと思われる。つまり、下の句の大まかな意味としては「私に飽きてしまったように、あなたが忘れた着物も飽きて捨てたのです。そのような衣があなたの涙に濡れていると見る人はいません」となるのではないだろうか。そうすると三六番歌はとよかげの三五番に対して冷淡に響き、やはりこれも贈答の常套である。ここからも、本院侍従の素直な心情をとるのは困難であろう。

以上のように、「とよかげ」の部における本院侍従関連贈答歌群から本院侍従が伊尹になびいている様子を読み取るのは難しい。先に引用した山崎［一九九八］では、この場面から「女の優位性」を指摘している。本院侍従と伊尹の実際の関係においての優位性はわからないが、たしかにここには本院侍従にうまく切り返される伊尹の姿が描かれていよう。しかし、それは他の女との贈答についても同様である。第二節でとりあげた一・二番の贈答についてもそうであった。ここには『本院侍従集』における兼通の姿（21）となんら変わりのない伊尹の姿があり、結局両者ともこのように女が言い返す一般的な贈答を踏襲しているのだと考えられるのである。

四、『本院侍従集』との関わり

ここで、本院侍従を媒介として、『一条摂政御集』と『本院侍従集』とのつながりを再確認しておきたい。特に、『一条摂政御集』三一から四〇番歌及び一一七・一一八番歌である。以下に掲出する。

とよかげ、中御門わたりなりける女を、いと忍びてはかなき所に率てまかりて、帰りてあしたに

かぎりなく結びおきつる草枕このたびならず思ひ忘るな（三一）

返し

草枕むすぶ旅寝を忘れずはうちとけぬべきこゝちこそすれ（三二）

翁、いかなることをかいひおきけん

さめぬとて人に語るな寝ぬる夜の夢よ〳〵といひし言の葉（三三）

返し

あはすべき人もなき夜の夢なればさめつるほどに忘られにけり（三四）

翁、この女のもとにきぬを忘れて、取りにやるとて

鈴鹿山いせをの海人の捨て衣しほたれたりと人や見るらん（三五）

とて、とく賜へといひて侍りければ、返事に

我ためになるゝを見ればすて衣しほたれたりと見る人もなし（三六）

この女、いかなることをかいひたりけん、心の鬼にとこの翁のいひたりければ

わがためにうときけしきのつくからにまづは心の鬼も見えけり（三七）

翁、山とより帰りて、女のもとにやる

暮ればとく行きて語らん逢ふことのとほちの里の住み憂かりしを（三八）

返し

逢ふことのとほちの里にほどへしは君は吉野と思なりけむ（三九）

翁のひさしうまからざりければ

逢ふことのほどへにけるもこひしぎの羽の数にぞ思ひ知らるゝ（四〇）

まだ逢ひそめたまはで年へたまたりけるに、せちに待ちて許いたまたりける。に

はかなることとのたまへば、女

いにしへは橋のしたにも契りおきて名を伝へてもながさずやきみ（一一七）

男の御返し

そはされどとらへどころのありければ橋下ならで流れざりきと（一一八）

これらは、とよかげが初めて女と契る場面であると考えられる。つまり、『本院侍従集』における次の二八から三〇番と関係があるものである。

かくてすみわたり給ふほどに、この女をよばふ人盗みもていにければ、をとこ君いみじうなき給ひければ、女きゝてあはれと思ひて、かくなんいひやれりける

よのなかを思ふもくるし思はじと思ふも身にはやまひなりけり（二八）

をとこ、返し

忍ぶれどなほ忘られずおもほゆるやまひぞ君に我はまされる（二九）

又、女

思はずにあるよのなかのくるしきにまさるやまひはあらじとぞ思ふ（三〇）

とよかげを伊尹と見てよいとすれば、両場面は伊尹が兼通から本院侍従を奪ったときのこととといえる。一方の男は女を得、一方の男は女を奪われた。『一条摂政御集』の「せちに待ちて許いたまたりける」という表現には、それまでの懸想がやっと実った切実さが表れている。『本院侍従集』では「盗みもていにければ」と簡素に記されるに留まるが、それとは対照的である。けっして伊尹が簡単に本院侍従を手に入れたわけではないということは、『一条摂政御集』からしか読みとることができない。このように、同じ出来事がそれぞれの男の視点、および作品の性質に合わせて描かれているようである。

さらに、本院侍従は両者の成立と深く関わるのではないかとおもわれる。後の章でも検討するが、『本院侍従集』はおそらく本院侍従の周辺で成立したと考えられる。『本院侍従集』末尾には本院侍従の友達であるという女房との贈答が収載されているため、兼通からの素材提供があった可能性を想定しうる。あるいは本院侍従とその周辺女房らの手元の素材を集めて編纂したのかもしれない。こうした方法で集められた和歌が、恋の始まりから終焉、さらには後日譚という流れに沿って読めるように編纂されたのであろう。『一条摂政御集』についても、伊尹が兼通から本院侍従を奪ったエピソードが収められる他撰部には本院侍従独詠歌群（一五二番から一六四番歌）があるため、少なくともその歌群については本院侍従周辺で成立したことが想定できる。他の本院侍従関連歌群も、本院侍従周辺である程度纏められたものが収載された可能性がある。もちろん伊尹のもとに本院侍従の独詠歌等が残されていた可能性もあるが、それが『一条摂政御集』に収められているということから、いずれにせよ成立において本院侍従周辺との関わりがあった可能性が高いと言えるだろう。外部資料がないため推測を重ねざるを得ないが、可能性の一つとして提示しておく。

なお、『一条摂政御集』九八から一〇〇については、『本院侍従集』と似た場面があることが堤［二〇〇四ｂ］によって指摘されている。『一条摂政御集』の和歌を掲げる。

たれと知らず、人とものたまふに、遣戸をたてて入りたまひぬれば

あぢきなや恋ひてふ山はしげくとも人の入るにやわがまどふべき（九八）

たちたまひにけり。

女、石と瓦とをつゝみて

わが仲はこれとこれとになりにけりたのむと憂きといづれまされり（九九）

返し、本院にこそ
これはこれ石と石とのなかはなかたのむはあはれ憂きはわりなし（一〇〇）

一方、似ていると指摘される『本院侍従集』六番歌は次の通りである。

をとこに、やりどのはざまをいさゝかあけてものいひける人、ことむつましうおぼえければ、「むねいたし。焼き石あてむ」とて入りにければ、をとこわびていにけり。つとめてふみおこせけり
あはでしも帰りしよりもいとゞしく苦しといひしことやわびしき（六）

堤［二〇〇四ｂ］では両場面を同一のものではないかと推察する。確かに「やりど」や「石」を小道具として使用しているという類似点はあるが、『一条摂政御集』の主体は伊尹であり、『本院侍従集』の「をとこ」は兼通である。同じ素材から人物をかえて作ったという可能性も否定はできないが、堤［二〇〇四ｂ］ではこの点に言及しておらず、両場面の類似は認められるとしても、同一であると断言することは難しいだろう（22）。

五、おわりに

本章では、まず『一条摂政御集』一番歌とその影響関係について考察し、藤原師輔および周辺の人物に深く関わりのある家集に同様の特徴が見てとれることを示した。このことから、『一条摂政御集』「とよかげ」部が、忠平一門における文学的営為の流れに位置づけられる作品であることを再確認した。

次に、『本院侍従集』との関連にも注意しながら、伊尹および本院侍従の贈答歌群を検討した。本院侍従という人物についてわからない点は多いが、伊尹・兼通ら兄弟と近しい人物であることは確認した通りである。したがって、成立時期の問題にも関わることだが、恋愛関係でなくなった晩年になってから作品への協力を依頼することも可能だったのではないかと考えられる。

また、権門の子息たちが恋愛関係にあった女に家集の編纂について協力を依頼するという構図に注目したい。これはまさに『蜻蛉日記』における兼家と道綱母を想起させる。『蜻蛉日記』では山口［一九六七］の指摘以来、特に上巻において兼家の積極的な関与が想定されており、たとえば上巻の「『兼家集』的性格」が今西［一九八九］において指摘されている。関与の程度やその方法がどのようなものであれ、作品の成立に彼らに近く、また文才のある女性たちが関わっているということは見逃すことのできない問題であろう。『一条摂政御集』「とよかげ」における本院侍従や小野好古女ら、『本院侍従集』における本院侍従、『蜻蛉日記』における道綱母の関与は、それ以降の作品、たとえば『枕草子』や『紫式部日記』などについても形を変えながら影響を与えていると考えることができるのではないだろうか。これは憶測になるが、恋愛関係にある女からの協力という方法から、女房が記すものへという変化が見て取れるかもしれない。『枕草子』や『紫式部日記』にまで言及

することは控えるが、『一条摂政御集』、『本院侍従集』、『蜻蛉日記』それぞれがかなり類似した成立であることはいえるだろう。女房たち、あるいはそれに準ずるような女性たちがどのように作品成立に関わっていたのか、今後さらに検討を進めていきたい。

《注》

（1）写本に付された題簽や他作品で引用された際の名称などがその作品の享受を考える上で大いに重要なものとなることはいうまでもない。また、たとえば『蜻蛉日記』は作品内に「日記」という語が使用される。このような作品では作者の意図を検討する必要があるだろう。『蜻蛉日記』における「日記」という語の使用については今後の課題としたい。

（2）磯村［一九九五］では、「再定義する必要が生ずるのは、むしろ「私家集」というジャンル概念自体の方であるかもしれない」と指摘する。この作業に意味が見出せるかはわからないが、「ともかく、このテクスト（引用者注：『本院侍従集』）の本来的な性格／構造をとらえるためには、近代的ジャンル意識に基づく予断的規定はいったん白紙に戻し、テクストを一つの作品として作り上げている言葉の力学、語りの方法について考察してみることがまず必要なのである」という指摘は首肯できる。

（3）堤［二〇〇四a］における「新たな女が提示されるまでは同一の女との贈答が並んでいて、それが提示された時点で贈答相手の女が変わっているとみなくてはならない」という説に従うと、女は次の八人である。括弧内は歌番号。

・とよかげにことならぬ女（一・二）
・宮仕えする人（三から七）
・大炊御門わたりなりける人（八から一一）
・忍びて住みわたりける人（一二から二〇）
・内裏わたりなりける人（二一から二三）
・西の京わたりなりける女（二四から三〇）
・中御門わたりなりける女（三一から四〇）
・たえてひさしうなりにける人（四一）

この中で、「中御門わたりなりける女」とは本院侍従であるとされる。なお、「とよかげ」の歌群について瀬尾［二〇〇六］では別の分け方を示している。

（4）他に、守屋［一九七五］の若年時説や、三角［一九九七］の三四歳説などがある。

（5）注釈補注に詳しい。

（6）山口［一九六一］に詳しい。

（7）益田［一九八一］では、「伊尹自撰集『とよかげ』は、大蔵史生倉橋豊蔭の歌物語としての風流のやつしをしているが、内容において自作歌集成をふみはずさず、想像の物語、想像のうたの贈答をまじえない。そのため、歌物語の伝承的要素を再生しえな

いで、私家集にとどまっている。やつしのいとなみを、うたとうたをめぐる物語の創造へはみ出させなかった」と指摘している。

（8）稲賀［一九六五］で、『一条摂政御集』について「『海人手古良集』を一歩進め、題のみならず内容にまで虚構を構える」と指摘されている。

（9）堤［一九八七］では片桐［一九六七ａ］の「（歌物語について）何よりもまず歌をよむ「人物」を提示することが最大の要件であった」という説により、一番歌の詞書部分を男主人公の紹介と一番歌を贈られた女の提示に分けられることを指摘しており、示唆に富む。

（10）「敎使者謂單于，言天子射上林中，得雁，足有係帛書，言武等在某澤中」とある。

（11）以下の参考歌は、堤［二〇〇四ａ］及び堤［二〇〇五］の調査を参考にしつつ、私に調査しなおしたものである。

（12）「とよかげ」以前及び同時代（但し、勅撰集のよみ人知らずを含む）の和歌で、初句「あはれとも」の用例は十四例である。

（13）『仲文集』と『国用集』については、片桐［一九九八］に詳しい。

（14）『あしたの集』については、浅田ほか［二〇〇六］に詳しい。平安中期の後朝の歌を集めた私撰集であり、近年再発見された資料である。あまり知られていない作品なので、ここで本院侍従の歌を引用しておく。浅田ほか［二〇〇六］に付された歌番号は二三。

本院侍従にものいひそめて
よるはとてあくるをなげくひるは又そでをぞなげくいとまなき哉

なお、浅田ほか［二〇〇六］によると『あしたの集』成立の中心に藤原頼忠がいたという（成立は頼忠死後と想定されている）。歌がとられている歌人も頼忠と娘遵子の周辺であることから、興味深い作品である。頼忠は伊尹・兼通・兼家ら兄弟と同時代の人物であり、関係も深い。『あしたの集』については、今後積極的に調査・考察していきたい。

（15）鈴木紀子［二〇〇五］にくわしい。『今昔物語集』巻三〇「平定文仮借本院侍従語第一」について「……用意された女性は、本院侍従の名を借りた幻想の女性で、いわばねつ造された女性像だったのである」という見解を示されており、首肯できる。

（16）主なものに、伊井［一九六六］、片桐［一九六七ｂ］、守屋［一九七二］などがある。なお、出仕順についてはそれぞれが異なる見解を示している。

（17）堤［一九九三］でも同様の可能性を考えているが、本院侍従の出自については慎重である。

（18）堤［一九八七］及び堤［二〇〇四ａ］を参考にした箇所がある。

（19）中嶋［一九八一］では、私家集及び勅撰集などを資料として一〇四首の歌を「幻の「本院侍従集」」として想定する。この試みは、本院侍従関係の和歌をまとめたものとして資料的価値がある。

（20）第Ⅱ部第三章にて扱う。

（21）第Ⅱ部第二章および第四章にて扱う。

（22）目加田・中嶋［一九九一］で、『一条摂政御集』九八から一〇〇について漢籍からの影響が指摘されている。これも堤［二〇〇四ｂ］を否定する根拠となろう。

《参考文献・引用文献》

浅田徹ほか［二〇〇六］　浅田徹・勝亦志織・近藤さやか・重政誠・陶山裕有子・中西智子・中丸貴史・丸山愉佳子・三原まきは「「あしたの集」略注稿――平安中期の後朝歌集――」『學習院大學國語國文學會誌』49

稲賀　敬二［一九六五］　「実頼・師輔・師氏・伊尹・道長等とその家集」『国文学』10・12

伊井　春樹［一九六六］　「本院侍従の宮仕えについて」『平安文学研究』36（→『源氏物語論考』風間書房　一九八一）

磯村　清隆［一九九五］　「本院侍従集における和歌の機能とテクスト言説」『城南国文』15

今西祐一郎［一九八九］　「歌・家集・蜻蛉日記」『土佐日記　蜻蛉日記　紫式部日記　更級日記』岩波書店

荻窪　昭子［一九七八］　「本院侍従集試論」『国文目白』17

片桐　洋一［一九六七ａ］「後撰和歌集の物語性――付歌物語の本質――」『国語と国文学』44-10（→『伊勢物語の研究　研究篇』明治書院　一九六八）

片桐　洋一［一九六七ｂ］「本院侍従」『国文学解釈と教材の研究』12-1

片桐　洋一［一九九八］　『仲文集』の形態と成立」『藤原仲文全釈』「解説」私家集全釈叢書22　風間書房

下浅　千穂［二〇〇二］　「『一条摂政御集』の一考察――『とよかげ』の日記文学的特質」『二松』16

鈴木　脩一［一九三四］　「本院侍従集攷」『国学院雑誌』40-4

鈴木　紀子［二〇〇五］　「王朝文学の〈悪女〉――本院侍従を中心に――」鈴木紀子・林久美子・野村幸一郎編『〈悪女〉の文化誌』京都橘大学女性歴史文化研究所叢書　晃洋書房

瀬尾　博之［二〇〇六］　「『一条摂政御集』の物語性――「色好み」を軸とした『伊勢物語』との比較を中心に――」『文学研究論集』25　明治大学大学院文学研究科

曽根　誠一［一九八八］　「『とよかげ』の方法（続）――Ⅴ段からⅧ段の検討――」『平安文学研究』70・80

堤　和博［一九八七］　「『一条摂政御集』論――「とよかげ」の部の特質――」『詞林』2（→『歌語り・歌物語隆盛の頃――伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学――』和泉書院　二〇〇七）

堤　和博　［一九九三］　「『本院侍従集』考――配列に施された虚構を中心として――」『詞林』14（→堤前掲書）
堤　和博　［二〇〇四ａ］「『一条摂政御集』部分的小考四題」『言語文化研究』11（→堤前掲書）
堤　和博　［二〇〇四ｂ］「本院侍従の歌語り――道綱母を取り巻く文壇――」『日本古典文学史の課題と方法漢詩　和歌　物語から説話　唱導へ』和泉書院（→堤前掲書）
堤　和博　［二〇〇五］　「『一条摂政御集』1番歌について・続考」『言語文化研究』12（→堤前掲書）
中嶋眞理子［一九八一］　「幻の「本院侍従集」――その存在の可能性と復元をめぐって――」『平安文学研究』65（→『本院侍従集全釈』私家集全釈叢書11　風間書房　一九九一）
益田　勝実［一九八一］　「伊尹＊「とよかげ」との間」『国文学』26-5
三角　洋一［一九九二］　「豊蔭並にいほぬし論――その文学史的位置づけをめぐって――」石川徹編　『平安時代の作家と作品』武蔵野書院
三角　洋一［一九九七］　「一条摂政御集」『歌語り・歌物語事典』勉誠社
宮谷　聡美［一九九四］　「『とよかげ』の「あはれ」――『伊勢物語』との距離――」『古代研究』27　早稲田古代研究会
目加田さくを・中嶋真理子［一九九一］　「幻の本院侍従集全釈」『本院侍従集全釈』私家集全釈叢書11　風間書房
守屋　省吾［一九七二］　「『一条摂政御集』考――主として第一部とよかげの成立期について」『日本文学』29　立教大学
守屋　省吾［一九七五］　「『一条摂政御集』「とよかげ」の部の形成要因」『蜻蛉日記形成論』笠間書院
山口　博　［一九六一］　「大蔵史生倉橋豊蔭という事――家集「豊蔭」の一問題――」『平安文学研究』27（→『王朝歌壇の研究　村上冷泉円融朝篇』桜風社　一九六七）
山口　博　［一九六七］　「摂関家歌壇と私家集」『王朝歌壇の研究　村上冷泉円融朝篇』桜風社
山崎久美子［一九九八］　「『一条摂政御集』「とよかげ」試論」『立教大学日本文学』80　立教大学

※本文の引用は、以下のものに拠った。
『漢書』　『漢書　第八冊』中華書局　一九六二
『清慎公集』　『私家集大成　中古Ⅰ』明治書院　一九七三

『あしたの集』

「「あしたの集」略注稿――平安中期の後朝歌集――」『學習院大學國語國文學會誌』49

第二章

『本院侍従集』の贈答歌
――人物造型を中心に――

一、はじめに

『本院侍従集』の現存する伝本には、同一の祖本から書写されたと推定される十三本（1）の他、それらとは明らかに系統が異なる冷泉家時雨亭文庫蔵本および、それを書写した宮内庁書陵部蔵甲本がある（2）。「おぼえおはしける」と書き出される流布本系に対して、後者は「いまはむかし」と書き出されることに代表されるように、時雨亭文庫蔵本系は流布本系に対しての異文が多いことを特徴とする。

これら『本院侍従集』の伝本研究については、高橋［一九六三］をはじめとする一連の調査（3）の他、守屋［一九八五］、中嶋［一九九一］、片桐［二〇〇四］などがある。高橋［一九六五］は、時雨亭文庫蔵本系である宮内庁書陵部蔵甲本の異文について、「書写の不正確によって起きたものはむしろすくなく、質的なものであるので、他の写本群と明らかに別系統を形成するものである」と考察されており、後の論考はすべてこの考え方を踏襲している。守屋［一九八五］では、その二系統を「別本系」および「流布本系」と呼んでいる。その他の見解については高橋論文の基礎的な調査と大きく異なるところはない。中嶋［一九九一］も、高橋［一九六三］の調査にいくつかの本文を付け加えたものである。ただし、中嶋［一九九一］では時雨亭文庫蔵本系である宮内庁書陵部蔵甲本について、「「霊元天皇による改変か」あるいは「本来の姿か」」との可能性が指摘されているが、親本である冷泉家時雨亭文庫蔵本が紹介され、それが室町時代中期の書写とみられることから（片桐［二〇〇四］）、「霊元天皇による改変」ではないことが、現在明らかになっている。

次に、『本院侍従集』を研究する際に使用する底本についての問題を確認しておく。従来の『本院侍従集』研究においては、おおよそ流布本が尊重される傾向があり、歴史的な事柄の辻褄を合せるために、二系統の伝本の都合のよい記述のみを選んで論じてきたという側面があることは否定できない。例えば、和歌の詠歌年代の特定を試みる論文において、「宮内庁書陵部蔵甲本によると」（4）というような文言を付け加えているようなものが少なからず見られるのである。注釈に関しても、従来の底本の選定および校訂作業には問題がなきにしもあらずといわざるをえない。現在確認することのできる『本院侍従集』の注釈書は、伊藤［一九八六］と伊藤［一九八七］、および目加田・中嶋［一九九一］の二種類のみである。伊藤［一九八六］と伊藤［一九八七］では宮内庁書陵部蔵甲本を底本とし、宮内庁書陵部蔵乙本をもって校合しているのだが、これは一四番歌までの注釈にとどまる。三十九首すべての注釈は目加田・中嶋［一九九一］のみであるが、この注釈書は流布本系である松平文庫蔵本を底本とし、その他十三本の異同を載せている。もちろん、松平文庫蔵本ほか流布本系の諸本に拠って解釈していくことにも意義があるということは否定できない。流布本の方が重視されがちであった理由は定かではないが、流布本系と比較して異

文の多い時雨亭文庫蔵本系は、流布本系とは趣の異なる独自の世界を形成している可能性があるため、これを底本とした作品の解釈も積極的に行っていく必要があるだろう。さらに、時雨亭文庫蔵本系の本文を検討することにより、流布本系では見えにくかった、兼通および本院侍従の造型についての、より明確な特徴などが捉えられる可能性があるのではないかと予想する。

そこで、本章では六・七・八番の贈答場面を例に挙げ、時雨亭文庫蔵本系が他の伝本とは異なった世界を持っているということを、「ねぬなは」という語および「やりど」と「焼き石」の機能に注目しながら確認していく。なお、時雨亭文庫蔵本の本文は影印（『平安私家集　十』冷泉家時雨亭叢書第二十三巻　朝日新聞社　二〇〇四）に拠り、流布本系の本文は、原則として穂久邇文庫蔵本の影印（『平安私家集』日本古典文学影印叢刊８　貴重本刊行会　一九七九）に拠る。いずれについても、仮名遣いを改め、濁点を施し、句読点および鉤括弧をつけた。また、※において本文の異同（5）、校訂の内容等を補足説明している。

二、六・七・八番歌の本文異同と解釈 ――「ねぬなは」を中心に――

次に挙げた【本文１】は冷泉家時雨亭文庫蔵本、【本文２】は流布本の、六・七・八番歌本文である。

【本文１】　冷泉家時雨亭文庫蔵本　六・七・八番歌

をとこに、やりどのはさまをいさゝかあけてものいひける、人ごとむつかしうおぼえければ、「むねいたし。やきいしあてむ」とていりにければ、をとこわびていにけり。つとめてふみおこせけり

あはでしも帰りしよりもいとゞしくくるしといひしことやわびしき（六）

返し

ねぬなはのくるしき事はとふことのおこたることぞうれしかりける（七）

又、をとこ

ねぬなはのくるしきことのおこたるは我かくれたるしるし成らん（八）

※１　底本「ものいひける人ことむつましう」。

『私家集大成　第一巻　中古Ⅰ』（底本宮内庁書陵部蔵甲本、高橋正治担当）、および伊藤［一九八六］では「もの言ひける人、ことむつましう」。

※２　底本「やきいしあてむ〇（て）いりに」

【本文２】　流布本　六・七・八番歌

をとこに、やりどをいさゝかあけてものいひけるに、ひとこともつゝましうおぼえて、「むねいたし。やけいしあてむ」とていりにければ、をとこわびていにけり。又の朝に

あはずしてかへりしよりもいとゞしくくるしといひし事ぞわびしき（六）

かへし

ねぬる夜のくるしき事はとふことのおこたるをりぞうれしかりける（七）

男

ねぬ[※3]るよのくるしき事のおこたるはわがかくれたるしるしなるらん（八）

※1　「ひころもつゝましう」（乙）（神）

※2　「やきいし」（桃）（群）（乙）（神）、「やけいと[レイ]」（山）、「やけいし」（京）（都）

※3　（乙）（山）は八番歌なし。（神）は八番歌を欄外にイとして補入。

まず、【本文1】※1から検討したい。この箇所、底本では「ものいひける人ことむつましう」となっている。これに、『私家集大成』（6）では「ものいひける人、ことむつましう」と読点を入れており、伊藤［一九八六］においても「物言ひける人、こと睦まじう」と読点を入れ、漢字をあてている。伊藤［一九八六］ではその解釈として、「こと」は「言」または「事」。ここでは「言」で解しておいたが、「事」だとすると、「遣戸の狭間をいささか開けて物言う」という状態を「睦まじ」と感じたことになる。ここには話の内容が書かれていないので、後者の方がいいかもしれない（後略）」としている。このように解釈することは不可能ではあるまいが、「ことむつまじ」という見慣れない語の解釈には無理があるようにも感じられる。例えば、「ことあたらし」「ことめづらし」などの語の例も確認することができるが、「ことむつまじ」の例は見出しがたい。流布本系の【本文2】では、この箇所は「ものいひけるに、ひとともつゝましうおぼえて」である。これを参考にすると、【本文1】の冷泉家時雨亭文庫蔵本も「ひとごと」あるいは「ひとこと」という語を活かして読点の位置を決定することができそうである。つまり、【本文1】で校訂しているように、「ものいひける」の後ろに読点をつけるという考え方もできないだろうか。その場合、「いひける」という連体止めがやや不自然であり、この箇所は流布本系本文の方がよいのかもしれない。流布本の「ものいひけるに、ひとともつゝましうおぼえて」について、目加田・中嶋［一九九一］では「(a)一言も慎ましう、(b)人言も慎ましう。人の噂、外聞も憚られる、いずれにもとれる」と二通りの解釈を挙げている。「ひとこと」は「一言」あるいは「人言」の二通りが考えられるのである。ここで、【本文1】冷泉家時雨亭文庫蔵本について、誤写の可能性を想定できるとすれば、例えば「人ことむつましう」はもともと「人ことむつかしう」であったとも考えられないだろうか。つまり、「可」を字母とする「か」が、「万」を字母とする「ま」と誤って写されたという可能性である。もしこのような誤写が想定できるとすると、「むつかし」という形容詞には「一言」よりも「人言」のほうがふさわしいように思われる。誤写の想定は推測の域を出ないが、こう考えると、この箇所は「ひとごとむつかしう」と校訂できそうである。そうすると、「男にやりどの隙間を少し開けて話をするということが世間の噂になると都合が悪い」という解釈をすることが可能である。ここに示した校訂案は、単独で見れば勇み足のように思われるかもしれないが、このあとの歌の解釈にも連動してくる。なお、六番の和歌については、初句が「あはでしも」

となっている時雨亭文庫蔵本系本文ではつながりがよくない。明解であるのは「あはずして」の流布本系本文であろうが、時雨亭文庫蔵本系本文でも文脈が大きく変わることはないと思われる。

次に、【本文1】太線部「ねぬなは」の検討に入る。伊藤［一九八六］では、「ねぬなは」の用法を詳しく検討した上で、特に七番歌について、

7番歌は、意味上の脈絡が、少々つかみにくい。それを解析すると次のようになろう。「ねぬなはの繰る」、「苦しきことはあなたの訪ふこと」、「訪ふことの怠る（とぎれる）ことぞうれしかりける」、「苦しきことの怠る（よくなる）ことぞうれしかりける」。「怠る」が掛詞に用いられていることで、入り組んだ文脈を形成しているものである。

乙本、初句「寝ぬる夜の」となっているが、次の歌との対応から考えても、底本の方がいい。

としている。この解釈は大筋では妥当であろうが、「ねぬなは」という語についてさらに詳しく考えていきたい。【本文1】七・八番歌に関する参考歌を以下に挙げる。

① かくれぬのしたよりおふるねぬなはのねぬなはたてじくるないとひそ
（古今・雑体・一〇三六・ただみね、『忠岑集』・六八・「きさいの宮のうたあはせに」、古今六帖・ねぬなは・三八二九、他）

② あだなりとなにはいはれの池なれば人にねぬなはたつにざりける
（古今六帖・第三・いけ・一六七〇）

③ねぬなはのねぬなのおほくたちぬればなほおほさはのいけらじやよに
（後拾遺集・雑二・九一六・「左大臣朝光かよひはべりけるをんなにあだなること人にいはるなりといひはべりければをむなのよめる」・よみ人しらず、『朝光集』・五九）

③ おもひのみますだのいけのねぬなはのくるしやかかるこひのみだれよ
（『能宣集』・二三九・「おなじ人のもとに」）

①は『古今集』の忠岑の歌で、【本文1】七・八番歌はこれを下敷きにして詠まれていると考えられる。この①では、第三句「ねぬなはの」が「寝ぬ名」を導き、第五句の「くる」および「な」に響いている。「ねぬなは」が「寝ぬ名」を導く歌としては、次に挙げた②、③の二首も同様で、「寝ぬ名」が「たつ」、つまり「噂が立つ」という意味になっている。④には「たつ」という語はないが、「寝ぬ名」という言葉が響いているのだと考えられる。

これら①から④までのような「寝ぬ名」の解釈については、現在のところ二つの説がある。①に挙げた『古今集』の歌について、「ねぬなはのねぬなはたてじ」の解釈を主な注釈書からいくつか挙げ、整理すると次のようになる。

▼「共寝をしていないという評判はたてまい」とするもの

A 小沢［一九七一］、B 小島・新井［一九八九］、C 片桐［一九九八］

▼「共寝をしていないのに、共寝をしたという評判はたてまい」とするもの

D 竹岡［一九七六］、E 小沢・松田［一九九四］

B に挙げた新大系には、「若芽や根を食用にする水草の蓴菜の古名「ねぬなは」と、無き名を露わにいう「寝ぬ名は」を掛ける」という脚注がつけられており、「寝ぬ名」は「無き名」と同様の意であるとする。一方、「寝ぬ名」を「共寝をしたという評判」とするものに D および E がある。D では、参考歌①の「寝ぬ名」について、以下のように説明されている。

当時の「寝ぬ名」の用例、

◇　左大将朝光通ひ侍りける女に、あだなること人に言はるなりと言ひ侍りければ、女の詠める　詠み人知らず

ねぬなはの寝ぬ名のいたく立ちぬればなほ大沢の生けらじや世に

◇　家綱の朝臣文通はして侍りけるに、逢はぬ先に絶え絶えになりにければつかはしける　伊賀少将

忘るるも苦しくもあらずねぬなはのねたくと思ふことしなければ

即ち、これらから「寝ぬ名」とは「あだなること」「逢はぬ先」のことで、共寝もまだしていないのに共寝をしたかのようなあだな評判をたてることを言うと解される。一緒に寝ていないという評判ではない〈傍点原文〉

また、E に挙げた新編全集の頭注では、「寝たという評判は立てまい。「寝ぬ」は「寝ない」とも解せるが、「寝ぬる」とあるべきところを「ねぬなは」と同音にするために終止形の「ぬ」を用いたのだろう」という解釈がなされているが、「寝ぬ名」を文字通り素直に解釈すると、やはり「共寝をしていないという評判」と捉えるのがよいように思われるが、状況としては、「共寝をしていない状況のもとでの共寝をしたという評判」という意味である方が、よりぴったりとくるのかもしれない。しかし、いずれにせよ参考歌①あるいは「ねぬなは」という語が詠まれるとき、男女がいまだ共寝をしていないという状況であることに間違いない。この点こそが重要であると思われる。

ここで『本院侍従集』の歌に戻ると、【本文1】七・八番歌の「ねぬなは」に積極的に「寝ぬ名」の意味を読みとる場合、「寝ぬ名」は「共寝をしていない状況のもとでの共寝をしたという評判」と捉える方が解釈しやすいのだろうが、いずれにしてもここで「ねぬなは」

が用いられている以上は、この場面で男女はまだ共寝をしていないと考えるべきである。『本院侍従集』は多くの研究者が指摘するように、恋愛の始まりから終わりまでを、季節を追って配列している歌集となっている（7）。男女の初めての契りと思われる部分が一三番歌詞書（8）にあることからも、この場面での二人はまだ共寝をするまでの関係にはなっていないと解釈できるため、【本文1】の冷泉家時雨亭文庫蔵本の本文ではおよそ齟齬をきたすことなくこの場面を解釈することができる。また、さきに校訂案を示した「ひとごと」という語も、「ねぬなは」の「な」という音と響き合ってくるのである。一方、【本文2】の流布本本文では、七・八番歌の両方が初句「ねぬる夜の」となっている。「ねぬなは」に「共寝をしていない」という意味が響いているのとは逆に、「ねぬる夜の」では明らかに「共寝をした」と解釈せざるをえない。そうすると、流布本本文では文脈がうまくつながらなくなってしまうのである。

以上のように、特に七・八番歌については時雨亭文庫蔵本系の本文が、校訂しだいで流布本系本文よりうまく解釈できそうな本文であることは言えるだろう。時雨亭文庫蔵本系の本文を、次節でもう少し検討していく。

三、兼通と本院侍従 ――「やりど」および「焼き石」に注目して――

『本院侍従集』六・七・八番歌は、「やりど」における男女の贈答場面である。ここで、「やりど」という場所、およびそこで使われている「焼き石」について考えてみたい。㋑から㋩は、先行作品、および同時代に成立したと思われる作品における、「やりど」および「焼き石」の用例である。

㋑　をんなどち人やりどのもとにてもののたまてのち
　みしゆめははかなくなりてやみにけんちがへやりどのもとにねしかば
（『元良親王集』・二九）

㋺　やりどをほそめにあけてものいひ侍りし、きぬのすそにむすびつく
　いにしへもちぎるこころにむすびけむころものつまはとくやとけずや
（『実方集』・二四八）

㋩　たれと知らず、人とものたまふに、遣戸をたてて入りたまひぬれば
　あぢきなや恋ひてふ山はしげくとも人の入るにやわがまどふべき
　たちたまひにけり。
　女、石と瓦とをつゝみて
　わが仲はこれとこれとになりにけりたのむと憂きといづれまされり
　返し、本院にこそ
　これはこれ石と石とのなかはなかたのむはあはれ憂きはわりなし
（『一条摂政御集』・九八、九九、一〇〇）

㈡あこぎ典薬や入りぬらんと、ひきて見るに、遣戸細目にあきたり。胸つぶるゝものから、うれしくて、引きあけて入りたれば、典薬かゞまりをり。……君はいといたう悩み給ふにそへて、泣き給ふこと限りなし。あこぎ、とりわきて、などしもものをかくいみじくおぼして、かゝるはいかゞなるべきにかと思ひて、心細くかなし。「御焼石あてさせ給はんや」と聞ゆれば、「よかなり」との給へば、あこぎ典薬に、「ぬしをこそ今は頼み聞えめ。御焼石もとめて奉り給へ。……」といへば、典薬うち笑ひて、……いかゞはせん、さは、いりたちたるやうなれど、いとやすし、心ざし情けを見えむとて、石求めむとて立ちぬ。

（『落窪物語』巻二）

㋑の『元良親王集』二九番は、詞書を「をんなと、ちがへやりどのもとにて……」と校訂する案もあるようだが、いずれにせよ男女がやりどのもとで語り合っている場面である。㋺に挙げた『実方集』二四八番も同様に、男女が「やりどをほそめにあけて」語り合っている場面である。ここでは「ころものつまはとくやとけずや」と詠んでいるところから、まだ共寝をするまでの仲ではない男女であると言えるだろう。㋩は『一条摂政御集』である。この㋩について、平安文学輪読会［一九六七］では「やりど」が貧相な家だけではなく、後宮にも存在したことを指摘している。『本院侍従集』の当該場面においても、冒頭で、女、つまり本院侍従が、「ふぢつぼ」にいる安子と思われる人物に仕えていると見えるので、宮中の「やりど」であることが考えられる。堤［二〇〇四］では平安朝文学輪読会［一九六七］の見解を踏まえながらも、さらに、『一条摂政御集』九八番歌と『本院侍従集』の当該場面とが同一である可能性を指摘している。先に引用した㋩からもわかるように、両者の共通点は「やりど」という場面および「石」という小道具、あるいは女が本院侍従であることという程度で、特に同一場面であるという根拠は見出せないと思われる。最後に㈡として『落窪物語』を挙げた。引用した部分以降にも「やりど」の場面はあるが、必要だと思われる箇所のみ引用している。ここで典薬助は「やりど」から中に入っているのだが、あこぎが典薬助に「焼き石」を持ってくるように頼み、結果として典薬助を追い払う。

こうして用例を見ると、特に㋑および㋺より、「やりど」がまだ共寝をするというところまで深い仲になっていない男女の語り合う場所となっていたことが想定できる。『本院侍従集』においても同様だとすると、やはりこの場面で男と女はまだ共寝をするほどの深い仲ではない。そうすると、先に確認したように「ねぬなは」の「ねぬな」と「やりど」とがうまく響き合っていると言える。

では、「焼き石」はどのような機能を持っているのであろうか。稲賀［一九七五］ではこの贈答場面について、

「遣戸のはざまをいささかあけて」兼通に逢った時、彼女は中からこれ以上戸が開かぬように仕掛をし、男の心が燃え上がる一歩手前で、「胸痛し、焼石あてむ」と中へ引っこんだのである。《こうしてお逢いしていると胸が苦しいわ、懐炉でも入れましょう》

という彼女のせりふは、恋故の胸の痛みを、焼石で治療しようというのだから、兼通のプライドはいたく傷つけられた。

と考察されている。一方、伊藤［一九八六］には、稲賀［一九七五］の見解を挙げた上で、

女は、遣戸の狭間を少し開けて、男と話をしている。ところが、その状態、もしくはそこでの話の内容が、あまりにいきすぎであると感じられた。たぶん、男のあまりに一途なさまに恐れを抱いてしまったということなのであろう。慌てて、「胸痛し、焼き石あてむ」と言って奥に入ってしまう。

この「胸痛し」という台詞を、「恋故の胸の痛みを焼石で治療しようという」というふうにとると、自分が相手に対して恋情を抱いていることを認めたことばになってしまう。

と論じられる。「胸痛し」に関する稲賀［一九七五］への反論は大いに首肯できる。しかし、伊藤［一九八六］では女が奥に入ってしまった原因についての解釈には、第二節で示した校訂案を採る場合、従うことができない。「ひとごとむつかしう」という本文で解釈すると、女が「胸が痛いから焼き石をあてよう」と言って奥に引っ込んだのは、「男との仲が世間で噂になっては困る」という思いからの仮病であったためと考えるのが妥当であろう。先に挙げた㈡においては、『本院侍従集』当該場面と異なり、必ずしも姫君が仮病を使ったとはいえず、また、姫君自身が「焼き石」をあてるからといって部屋の中に入ってしまったわけではないのだが、「焼き石」という小道具を使用している点、結果として男性を追い払ったという点でいえば、多少は『本院侍従集』との共通点があるのかもしれない。

以上のように捉えると、稲賀［一九七五］および伊藤［一九八六］のように解釈した場合と異なり、女に振り回される男という構図が浮かび上がってくる。これは、本院侍従に振り回される兼通と言い換えても差し支えないだろう。特に、【本文一】冷泉家時雨亭文庫蔵本の方が、その傾向が色濃く出ているように思われる。

これは『一条摂政御集』における伊尹も同様ではないかと思われる。『一条摂政御集』前半の、いわゆる「とよかげ」には、伊尹と数人の女とのやりとりが記されているが、その中には本院侍従との贈答もいくつか見られる。以下は『一条摂政御集』からの引用である。

とよかげ、中御門わたりなりける女を、いと忍びてはかなき所に率てまかりて、帰りてあしたに、

かぎりなく結びおきつる草枕このたびならず思ひ忘るな（三一）

返し

草枕むすぶ旅寝を忘れずはうちとけぬべきこゝちこそすれ（三二）

翁、いかなることをかいひおきけん

さめぬとて人に語るな寝ぬる夜の夢よ〳〵といひし言の葉（三三）

返し

あはすべき人もなき夜の夢なればさめつるほどに忘られにけり（三四）

翁、この女のもとにきぬを忘れて、取りにやるとて

鈴鹿山いせをの海人の捨て衣しほたれたりと人や見るらん（三五）

とて、とく賜へといひて侍りければ、返事に

我ためになるゝを見ればすて衣しほたれたりと見る人もなし（三六）

この女、いかなることをかいひたりけん、心の鬼にとこの翁のいひたりければ

わがためにうときけしきのつくからにまづは心の鬼も見えけり（三七）

「中御門わたりなりける女」とは、本院侍従のことであるとされている。この三一番歌詞書は『本院侍従集』との関わりが指摘されているが、例えばこのような場面からも、『一条摂政御集』における伊尹が本院侍従にうまくあしらわれている様子が見て取れる。推測を交えて見通しを述べると、『本院侍従集』も『一条摂政御集』も、若い男性を相手にする巧みな女性たちとのやりとりが収められているという共通点があるのではないかと考えられ、本院侍従もそのような役割の女性として、両作品に登場するのではないかと思われる。もし「とよかげ」の主人公を、イコール伊尹として考えてよいのであれば、本院侍従の役割とは、貴顕の若い子弟たちに恋愛の巧みなやりとりを教えるようなものであったのかもしれない。このような視点からの二作品の位置付けについても、今後の課題として考察していきたい。

四、おわりに

以上見てきたように、少なくとも六・七・八番歌のうち、特に七・八番歌については、時雨亭文庫蔵本系は流布本系と比較し、整合性がとれている本文であると思われる。六番歌については流布本系の方が勝る面もあるが（特に初句）、しかし、六番歌の詞書は校訂しだいで文脈の整合性がとれるようである。時雨亭文庫蔵本系の本文で解釈する場合、恋愛のやりとりに巧みな本院侍従に振り回される兼通、および、貴顕の子息である兼通をうまくあしらう本院侍従の造型がより明確に浮かび上がってくる。『本院侍従集』における兼通の造型については従来諸氏によって論じられているが（9）、時雨亭文庫蔵本系の本文にも注目し、より多面的に検討するべき問題であろう。

本章でとりあげていない部分にも時雨亭文庫蔵本系には流布本系との異同が多く見られるが、それらの箇所も六・七・八番歌のように校訂し解釈を考え直す余地が大いに残されている。従来の『本院侍従集』研究では、二系統ある本文をきちんと整理せず、都合のよい部分のみを使用してきたという部分が少なからず見られた。伝本の基礎的研究はなされているが、それらをもとにした本文の研究はいまだ不十分であるといわざるをえない。今後は流布本だけでなく、時雨亭文庫蔵本系の本文を、適宜校訂を加えながら読みとっていくことが求められる。

《注》

（1）本章では便宜上「流布本系」と呼ぶ。

（2）以下、「時雨亭文庫蔵本系」と示す。

（3）高橋［一九六三］、高橋［一九六五］、高橋［一九七二］、高橋［一九七三］。

（4）冷泉時雨亭文庫蔵本が紹介されたのは二〇〇四年であり、管見のかぎりではこの伝本を底本とした論文はまだない。それ以前はこの系統の本文を参照するのに宮内庁書陵部蔵甲本を使用していた。

（5）流布本十三本の略号は以下の通り。

（乙）　宮内庁書陵部蔵乙本

（群）　新校群書類従

（神）　神宮文庫所蔵本

（桃）　桃園文庫所蔵本

（静）　静嘉堂松井文庫所蔵本

（京）　京大研所蔵本

（清）　ノートルダム清心女子大所蔵本

（東）　東大研・本居文庫所蔵本

（龍）　龍谷大・写字台文庫所蔵本

（都）　京都大学所蔵本

（穂）　穂久邇文庫所蔵本

（山）　山口県立図書館所蔵本

（松）　松平文庫所蔵本

なお、校異は高橋［一九七二］を参考にした。

（6）『私家集大成　第一巻　中古Ⅰ』明治書院　一九七三。『本院侍従集』は高橋正治担当。底本は宮内庁書陵部蔵甲本。なお、二〇〇八年十二月発売のＣＤ－ＲＯＭ版では冷泉時雨亭文庫蔵本が底本として示されている。

（7）主なものに、稲賀［一九七六］、山崎［一九七六］、鈴木［一九九三］、堤［一九九三］などがある。

（8）冷泉時雨亭文庫蔵本の一三番詞書は次の通り。

さてものきこえんと、せちにのたまひければ、たゞしとみごしにてうけたまはらんとありけるに、この女のつかひける人をかたらひて入りたまひにけり。さらに人もしらぬ事なりけり。又のあしたに、をとこ

なお、流布本は「しとみ」が「ものごし」に、「あしたに」が「つとめて」となっている。

（9）主なものに、後藤［一九六二］、伊井［一九六六］、堤［一九九三］などがある。

《参考文献・引用文献》

伊井　春樹［一九六六］「本院侍従の宮仕えについて」『平安文学研究』36（→『源氏物語論考』風間書房　一九八一）

伊藤　一男［一九八六］『『本院侍従集』注釈(一)』『東京学芸大学紀要（人文科学）』37

伊藤　一男［一九八七］『『本院侍従集』注釈(二)』『東京学芸大学紀要（人文科学）』38

稲賀　敬二［一九七五］「悪女の条件――本院侍従」『国文学』20‐16

稲賀　敬二［一九七六］「本院侍従――その生涯と集――」『広島大学文学部紀要』36

小沢　正夫［一九七一］『古今和歌集』日本古典文学全集7　小学館

小沢正夫・松田成穂［一九九四］『古今和歌集』新編日本古典文学全集11　小学館

片桐　洋一［一九九八］『古今和歌集全評釈（下）』　講談社

片桐　洋一［二〇〇四］『平安私家集　十』解題　冷泉時雨亭叢書第二十三巻　朝日新聞社

小島憲之・新井栄蔵［一九八九］　『古今和歌集』新日本古典文学大系5　岩波書店

後藤　祥子［一九六二］「本院侍従について」『国文目白』1

鈴木あき子［一九九三］「本院侍従集私論――その歌物語的性格と成立事情――」『国文』78　お茶の水女子大学

高橋　正治［一九六三］「本院侍従集覚書」『清泉女子大学紀要』10

高橋　正治［一九六五］「本院侍従集伝本考」『清泉女子大学紀要』12

高橋　正治［一九七二］『本院侍従集　甲本』解題　笠間書院

高橋　正治［一九七三］『私家集大成　第一巻　中古Ⅰ』解題　明治書院

竹岡　正夫［一九七六］『古今和歌集全評釈（下）』　右文書院

堤　和博　［一九九三］「『本院侍従集』考――配列に施された虚構を中心として――」『詞林』14（→堤［二〇〇七］に加筆・訂正して収録）

堤　和博　［二〇〇四］「本院侍従の歌語り――道綱母を取り巻く文壇――」伊井春樹先生御退官記念論集刊行会編『日本古典文学史の課題と方法漢詩　和歌　物語から説話　唱導へ』和泉書院（→堤［二〇〇七］に加筆・訂正して収録）

堤　和博　［二〇〇七］『歌語り・歌物語隆盛の頃――伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学――』和泉書院

中嶋眞理子［一九九一］「現存本「本院侍従集」の諸本について」目加田さくを・中嶋眞理子『本院侍従集全釈』私家集全釈叢書11　風間書房

平安文学輪読会［一九七六］『一条摂政御集注釈』塙書房

目加田さくを・中嶋眞理子［一九九一］『本院侍従集全釈』私家集全釈叢書11　風間書房

守屋　省吾［一九八五］『新編国歌大観　第三巻』解題　角川書店

山崎久美子［一九七六］『『本院侍従集』の構造と成立事情について」『日本文学』37　立教大学日本文学会

※『落窪物語』の引用本文は、『落窪物語　堤中納言物語』日本古典文学大系13（岩波書店　一九五七）に拠る。

第三章

『本院侍従集』における兼通と安子周辺
――十世紀後半の家集・日記文学などとの関わり――

一、はじめに

『本院侍従集』は十世紀後半に成立したと思われる私家集で、本院侍従の名が付されてはいるものの、藤原師輔の二男である兼通を主人公とする物語的性質を含んだ贈答歌集となっている。兼通を中心とした内容であるため、兄伊尹の『一条摂政御集』、および弟兼家の私家集的性格を持つとも論じられる『蜻蛉日記』と並んで、当時権力に近い立場にあった師輔の子供たち周辺における文学活動を考える際には大変重要な作品である。

本章では、全三十九首の中でも特に兼家周辺の人間関係がわかる箇所を取り上げる。具体的には冒頭および二八番歌以降のやりとりを中心に検討する。特に二八番以降は四つの贈答歌群から成るが、そのすべてが女性からの詠みかけである。また、三五番以降の贈答場面に本院侍従は登場せず、男と女房達とのやりとりで作品が閉じられている。二七番以前にある男女の恋のやりとりとは趣が異なるこれらの贈答歌群には、兼通と本院侍従とが実際は真剣な色恋の関係にはなかったのではないかと思わせるような要素がある。まずはこの点から検討してゆく。さらに兼通の造形、および兼通と本院侍従、あるいはその周辺の女房たちとの関係まで考察することで、女性が男性貴公子をふりまわすような内容を、『一条摂政御集』、『蜻蛉日記』中巻など九条流の兄弟関係の作品、さらには『平中物語』などの十世紀後半の文学に共通する特質としてとらえたい。

『本院侍従集』の現存する伝本には、同一の祖本から書写されたと推定される十三本（以下、「流布本系」と呼ぶ）の他、それらとは明らかに系統が異なる冷泉家時雨亭文庫蔵本と、それを書写した宮内庁書陵部蔵甲本がある（以下、「時雨亭文庫蔵本系」と呼ぶ）。「おぼえおはしける」と書き出される流布本系に対して、「いまはむかし」と書き出されていることに代表されるように、時雨亭文庫蔵本系は流布本系に対しての異文が多い。これら各伝本については、高橋による一連の論考の他、諸氏により調査がなされている（1）。

これら二系統について、すでに言及されている（2）通り、おそらく流布本系の方が早く成立したものと考えられる。後に見てゆくが、流布本系本文より時雨亭文庫蔵本系本文のほうが内容が詳しく、また人間関係もわかりやすく書かれている。本章では特に人間関係に注目するため、主に時雨亭文庫蔵本系本文を優先的にみてゆくが、人間関係の示し方に留意するため、流布本系本文との異同にも常に目配りしてゆくこととする。

なお、本章において、時雨亭文庫蔵本系本文は冷泉家時雨亭文庫蔵本の影印（3）に、また流布本系本文はこの系統の最古写本である穂久邇文庫蔵本の影印（4）に拠り、それぞれの本文になるべく手を加えない形で掲出してみることとした。ただし、濁点を施し、句読点をつけた。また、読解する上で必要な箇所のみ本文を改訂した。

二、兼通血縁者の記述

まず、兼通周辺の人物関係のうち特に血縁関係のわかりやすい記述として、冒頭の本文を掲げる。

【本文1】冒頭

〈時雨亭文庫蔵本系〉

いまはむかし、かむだちめの次郎なる人、おぼえいとかしこかりけれど、まだわかうてかうぶりもえぬおはしけり。おほぢは太政大臣にてなんおはしける。いもうとはきさきばらのみこにたてまつり給て、ふぢつぼにぞさぶらひ給ける。その御いとこさぶらひたまひけり。□□このしらきみ、おもひかけたまう□物などいひてかくよみていれたまへり。

〈流布本系〉

おぼえおはしけるかむだちめのじゝうなりけるが、まだとし十八ばかりなりけるが、おぼへいとかしこかりけれど、かうぶりえぬ有けり。大ぢは太政大臣にてなんをはしける。いもうとは后ばらのみこにたてまつりて、ふぢつぼにぞ候給ける。おほんいとこ候給けり。それこのじゝう君思かけ給て、かくよみていれたまひけり。

この箇所における二系統の差異については先に挙げた先行研究でたびたび言及されているので、ここでは両系統から読み取ることのできる人物関係を改めて確認しておく。まず男は「かむだちめの次郎」であり、まだ「かうぶりもえぬ」状態であることが書かれている。また、この男について「おほぢは太政大臣」であるとも記されている。「おほぢ」、すなわち祖父が忠平で、その子息の一人師輔の二男兼通であることがわかる。続いて、「いもうと」安子の情報と、彼女に仕えている「いとこ」の存在に言及する。この「いとこ」が、書名に見える「本院侍従」なる人物である。第Ⅱ部第一章でも触れたが、本院侍従がどのような人物であったかは、従来議論の対象とされてきた。古くは鈴木脩一［一九三四］において本院侍従が仕えていたと思われる本院女御は安子であるという説が提示され、以降、本院侍従が誰に仕えた女房だったのかという議論が進められた。出仕順までを含めると現在でも定説を見ていないが、本院侍従は安子・徽子・慶子の三人に仕えたのではないかと見、本院女御は慶子であるとするものが大半である（5）。実際はどうであれ、当時は安子付き女房であったと作品冒頭で紹介されていることは重要であろう。このことは、『本院侍従集』が安子および安子付き女房周辺と関わりを持っていることを示すのではないか。

また、ほかに血縁関係に関する記述がある箇所としては、三三・三四番の贈答が挙げられる。

【本文2】三三・三四番

〈時雨亭文庫蔵本系〉

かくてこのきみ、女おやの御ぶくになりたまひぬと聞てとぶらひ
たてまつり給たりけるかへりごとに、「いつもしぐれは」と
のたまへりけるに、女
われさへぞ袖は露けき藤衣君おりたちてぬると聞しに（三三）
返し
をとにのみ聞わたりつる藤衣ふかくわびしと今ぞしりぬる（三四）

〈流布本系〉
かくてこの女、ぶくになり給ぬときゝて、とぶらひきこえたる返事に、
「いつも時雨は」との給ければ
我さへぞ袖はつゆけきふぢごろも君をりたちてきるときくには（三三）
かへし
おとにのみきゝわたりつるふぢごろもふかく恋しと今ぞしりぬる（三四）

これらは親の服喪にかかわるやりとりである。時雨亭文庫蔵本系では明確に「女おや」の服喪であることが記されている。この箇所は『本院侍従集』成立年次の特定を試みる諸研究で触れられてきた。ここに記される服喪は、稲賀［一九七六］をはじめ山崎［一九七六］などでも指摘されるように、伊尹・兼通・兼家らの母盛子の死去によるものと見て差し支えないだろう。安子も兼通らと同腹であるので、もし安子周辺が作品に関わっているとすれば、その場においては関心のある出来事であったと思われる。

なお、この三三番詞書からは、時雨亭文庫蔵本系の本文のほうが人物関係をわかりやすく補っていることが推察される。流布本系本文では、敬語から状況をある程度解釈できるが、誰の服喪であるのかが明確でないのである。

さらに、兼通の血縁者が見える箇所として二八から三〇番の贈答がある。女が「人」に盗まれることをめぐるやりとりである。

【本文3】二八～三〇番
〈時雨亭文庫蔵本系〉
かくてすみわたり給ふ程に、この女をよばふ人、ぬすみもていにければ、
おとこ君いみじふなきたまひければ、女きゝて、あはれと思て、かくなん
いひやれりける
世中を思ふもくるし思はじと思ふも身にはやまひ也けり（二八）
おとこ、返し
忍ぶれど猶わすられずおもほゆるやまひぞ君にわれはまされる（二九）
又、女
おもはずにある世中のくるしきにまさるやまひはあらじとぞ思ふ（三〇）

〈流布本系〉

かくてすみたまふほどに、この女また人にぬすみていにければ、おとこいみじうなげきたまひて、女あはれと思てなむ、かくいひやりける

よの中を思もくるしをもはじとをもふも身にはやまぬなりけり（二八）

男、かへし

しのぶれどなをわすられずをもほゆるやまひは君にわれぞまされる（二九）

女

をもはずにあるよのなかのくるしきにまさるやまひはあらじとぞ思ふ（三〇）

※女（穂久邇文庫蔵本）　―　おとこ（流布本系諸本）

ここで女を盗んだ「人」は伊尹であったという把握が、すでに定説となっている（6）。冒頭の記述および服喪の贈答と同じく、兼通の血縁者への言及が認められるだろう。また、この場面でも時雨亭文庫蔵本系のほうが、「この女をよばふ人」と人物を詳しく書いていることがわかる。

さらにこの場面については、女性のほうが男性より一枚上手とでも言えるやりとりがなされていると思われる。この点について、次節で具体的に考察したい。

三、兼通と本院侍従の贈答

前節に掲げた【本文3】の表現について、男女の恋の気分の中で詠まれた「やまひ」という語の先行する用例は、例えば「葦引きの山ひはすともふみかよふあとをも見ぬはくるしきものを」（後撰集・恋二・六三二・大江朝綱）、「あひもみずことをばいはん方もなしたがつけそめしやまひなるらん」（信明集・八七）などがあるが、このように繰り返し「やまひ」という語が使われる例は見られない。当該の三首は「やまひ」という語を軸にして、技巧的な歌の詠み合いをしているようである。また、二八番歌詞書にこそ「あはれと思て」と記されているが、歌の内容から切実な雰囲気は感じられない。むしろ、女が男に対して同情して歌を贈ってやっている様子が読みとれるだろう。これらの贈答が女からの詠みかけであるという点も重要である。贈答歌において女の方から積極的に詠みかけるということは、当時異常なこととまではいえないだろうが、その割合は少ない。とにかく、女側の積極的な姿勢をくみとることはできるだろう。【本文3】に続く三一・三二番の贈答も女から詠みかけたものである。

【本文4】三一・三二番

〈時雨亭文庫蔵本系〉

この女、内にまいりにければ、いといみじと思てぞなき給ける。ひさしくありて、

女のいひけるにや

わが身ゆへうきとは思をきながらつらきは人の心なりけり（三一）

かへし
身のうさを思こりぬる物ならばつらき心は何かうらみん（三二）

〈流布本系〉
この女、うちにまかりにければ、いといみじうとをくて、なげきたまひける。
久しう有て、女いひたりける
わが身ゆへうしとはをもひおきながらつらきは人の心なりけり（三一）
かへし
身のうきとおもひしりぬるものならばつらきこゝろをなにかうらみむ（三二）

この贈答場面でも、【本文3】と同様に女に会えず嘆く男に対して、女のほうから歌を贈っている。贈歌の「わが身ゆへうき」、つまり「私のせいで（あなたが）つらい」という表現から、女の男に対する自信のようなものが伺える。また、「つらきは人の心なりけり」という表現から、男の冷淡さを非難していることがわかる。対する男の返歌は女の心情に疑問を呈するものであるが、贈歌の表現をほぼそのまま利用して詠まれている。こうしたやりとりのありようから、兼通と本院侍従との関係性が垣間見えるのではないだろうか。すなわち、家集冒頭（【本文1】）に示されたような若い権門の男をリードしながら、色恋または色恋に関わる作法を手ほどきするような役割を本院侍従らが担っていたと推測できないだろうか。

四、安子付き女房たちと兼通

三五番からこの家集の末尾にあたる三九番は男と女房たちとのやりとりである。兼通と本院侍従との恋の後日譚とみなされてきた一連の贈答に、本院侍従は登場しない。以下、本文を掲げる。

【本文5】三五～三九番
〈時雨亭文庫蔵本系〉
この女のともだちのもとより「じらうぎみのもとの女のことざまになりたること、いかにおぼすらん」とて
ほかざまになびくを見つゝ塩竈の煙はいとゞもえまさるらん（三五）
返し、おとこ
塩竈のもゆる煙もある物をからきなげきをたくがわびしさ（三六）
とあれば、「なをおぼすらんとこそおぼゆれ」とて、女の御かたのごたちのいひやる
初秋の花の心をほどもなくうつろふ色をいかにみるらん（三七）
返し
時わかず垣ほに生ふるなでしこはうつろふほどの秋もしらぬを（三八）

又、返し

色かはる萩のした葉も在物をいかでか秋をしらずといふらん（三九）

その比、おとこ君、兵衛のすけになりたまへり。いまはほりかはの中納言とかや

〈流布本系〉

女ともだちのもとより、じらう君のもとに、「この女のほかざまになりにたる、いかにおぼすらむ」とて

ほかざまになびくをみればしほがまのけぶりやいとゞもへまさるらん（三五）

かへし

しほがまのもゆるけぶりもなきものをからきなき名もたつがわびしさ（三六）

とあれば、「まづおぼすらん事こそおぼゆれ」とて、御方のごたちのいひやる

はつ秋のはなのこゝろをほどもなくうつろふ色をいかにみるらん（三七）

男、かへし

ときわかずかきほにをふるなでしこもうつろふ秋のほどもしらぬを（三八）

また、かへし

色かはるはぎの下葉もあるものをいかでか秋をしらずてふらん（三九）

そのころ、兵衛佐になりたまひにけり。堀河大納言とかや

※1　まさる（穂）　―わたる（流布本系諸本）

※2　からき（穂）　―そらに（流布本系諸本）

前節までに見てきた本文と同様に、この箇所でも時雨亭文庫蔵本系のほうがより人物関係をわかりやすくしている傾向が認められる。例えば時雨亭文庫蔵本系では「この女のともだち」と、女側の「ともだち」であることが明記されている。一方、流布本系には「女ともだち」とあるのみで、一見した限りでは誰の「ともだち」なのか判断しにくい。三五番歌を収載する『続古今集』には、作者を本院侍従とした上で「女ともだちにもの申しける人の、ことざまになりぬとききて、とぶらひつかはすとて」と詞書に書かれている。『続古今集』の撰集資料は定かではなく、ここでも詳述しえないが、後藤［一九五六］では「「女のともだち」を本院侍従としたのは、確たる根據の上に立つたものとは思はれないのであつて、やはり「本院侍従」であるから、本院侍従の歌が少しは存在する筈だといつた気持ちからでたものではないかと思はれる」と論じられる。流布本系本文では人物の関係が捉えにくかったのだろう。

「御かたのごたち」についても、時雨亭文庫蔵本系では「女の」と明確にされている。目加田・中嶋［一九九一］では「御かたのごたち」について、「侍従君付の古参の女房。古御達などという」と解釈している。一方、時雨亭文庫蔵本系本文を使う片桐・三木・藤川他［二〇一〇］は「本院侍従に仕えていた女房」とする（藤川担当箇所）。時雨亭文庫蔵本系では明らかに本院侍従の仕えていた安子付き女房と特定されよう。磯村［一九九五］の

述べるように、「おそらく本院侍従の同僚の女房か」と解釈できるだろう。磯村［一九九五］では先に示した「ともだち」と合わせて、「本院侍従に対する兼通の懸想について、並々ならぬ関心を抱きつつ傍観していた人々にほかならない」と位置付けている。

第二節でも言及したように、本院侍従について、【本文1】に「いもうとはきささきばらのみこにたてまつり給て、ふぢつぼにぞさぶらひ給ける。その御いとこさぶらひたまひけり」と記されている。事実関係はわからないが、当時本院侍従が安子に仕えていたと書かれているのである。このことから、「女ともだち」「女の御かたのごたち」も安子付き女房であったと読むべきであろう。

あわせて、これら作品末尾に置かれた一連の贈答も、二八番以降と同様に女性から歌を詠みかけていることに注意したい。ひとまずは歌のやりとりにおいて男よりも先んじているわけだが、以下に検討するように内容面においても女房たちのほうが優位にあったような様子がここからは見てとれるのである。

ここから、二系統の和歌の本文異同を確認しつつ、【本文5】の歌群を検討していきたい。三五番歌の大きな異同は時雨亭文庫蔵本系「もえまさる」と、多くの流布本系「もえわたる」である。先行する用例に「もえまさる」および「もえわたる」いずれの用例も確認でき、また『九条右大臣集』三二番歌でも同様の本文異同が見られる（7）ことから、おそらくどこかの時点で本文転訛が起こったものと考えられる。文脈に大きな違いはなさそうなので、特に校訂をせず時雨亭文庫蔵本系で大意をとってみると、「（本院侍従が）他の男性になびくのを見ながら、あなたの未練で塩釜の煙はますます燃えているのでしょう」となろう。それに対する返歌である三六番歌については、二系統の本文で歌意に大きな違いが見られる。時雨亭文庫蔵本系では「塩竈のもゆる煙もある物を」、つまり「まだ本院侍従に対する未練があるのに」と解釈できる。一方、流布本系本文は「しほがまのもゆるけぶりもなきものを」となっているので、「もう本院侍従に対する未練などないのに」という意となろう。下の句に対してのつながりという点では、時雨亭文庫蔵本系のほうがぎこちないように見えるが、それぞれ齟齬をきたすことのない解釈ができそうである。三六番歌については、流布本系本文を底本とする目加田・中嶋［一九九一］において「今ではもう兼通は、本院侍従との恋愛事件にふれられたくない。世間の噂にされたくない。迷惑の心境」と解き、鈴木［一九九三］（8）では、「この兼通の返歌の、手の平を返したようなとぼけ方は、「もうその事に触れられるのは迷惑だ」と言わんばかりである」と説明している。確かに流布本系本文ではこのような解釈が妥当であり、このように女房からの歌を否定するような詠みぶりが答歌としては適当であろう。しかし、時雨亭文庫蔵本系のように、女房のからかいのような歌に対して自分の未練をあまりに素直に肯定するような答歌からは、色恋に対して慣れていない兼通の姿がより強く表れているようである。

三七番は「御かたのごたち」が女の心変わりをどう思っているのかを男に聞いている歌で問題ないだろう。それに対する三八番の男からの返歌については、「あな恋し今も見てしか山がつのかきほにさけるやまとなでしこ」（古今集・恋四・六九五・よみ人しらず）あるいは「しるらめやかきほにおふるなでしこを君によそへぬ時のまはなし」（村上天皇御集・

九〇）のように女をなでしこによそえている。目加田・中嶋［一九九一］でも「秋咲くものと時も決めず、夏頃から垣根に伸びて美しい撫子の花は、まだ衰えぬ色、人に飽きて色変わりする秋の間もまだ知らないんだよ。何を言うんだい。まだあの人と交際しそめて、どれほどにもなってないんだよ。」と解釈されるように、女に対する未練を読むことができるだろう。こうした一連の贈答から、安子周辺の女房たちが兼通より一枚上手で、まるで兼通をからかっているかのような様子が見えてくるのである。

兼通の造型についての先行研究はいくつか見られる。例えば堤［一九九三］では以下のように考察されている。

『本院侍従集』に関しては（中略）政治的意図が働いたとすれば、むしろ兼通を貶める意図が働いたと思うのである。（中略）『本院侍従集』では兼通は冴えない人物に描かれており、『蜻蛉日記』下巻でも、道綱母に自ら歌を詠みかけておきながら、道綱母からの返歌に答え倦ねている兼通の様子が描かれている。

特に時雨亭文庫蔵本系から読みとれる兼通像は確かに、女と別れ、その後女のともだちからまるでからかうような歌をよこされる惨めな男のように見える。同時代の文学作品に描かれた兼通については、『蜻蛉日記』下巻天延二年十月の記事および『多武峯少将物語』に見られるが、そのどちらもどこか滑稽な人物として造型されている。例えば『蜻蛉日記』では、

……宵のほど、火ともし、台などものしたるほどに、せうととおぼしき人、近うはひ寄りて、懐より、陸奥紙にてひきむすびたる文の、枯れたる薄にさしたるを、取り出でたり。…（中略）…開けて、火影に見れば、心つきなき人の手の筋にいとよう似たり。書いたることは、「かの『いかなる駒か』とありけむはいかが、

霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつけてしがな

あな心苦し」とぞある。わが人に言ひやりて、くやしと思ひしことの七文字なれば、いとあやし。「こはなぞ」と「堀川殿の御ことにや」と問へば、「太政大臣の文なり。御随身にあるそれがしなむ、殿にもて来たりけるを、『おはせず』と言ひけれど、『なほたしかに』とてなむ置きてける」と言ふ。…（中略）…かくおろかには思はざりけめど、いとなほざりなりや、

ささわけばあれこそまさめ草枯れの駒なつくべき森のしたかは

とぞ聞こえける。ある人の言ふやう、「これが返し、いまひとたびせむとて、なからまではあそばしたなるを、『末なむまだしき』とのたまふなる」と聞きて、久しうなりぬるなむ、をかしかりける。（下巻・天延二年十一月・三五四～三五五頁）

と、道綱母の詠歌に対して返歌できない様子が描かれる。また、『多武峯少将物語』においても、

宮のこのかみの、殿にて人たまへるついでに、ようさりつかた、月のほのかなるに、立寄り給へり。

「昔きくやどのありしへに、いかにぞや。山人はしのびてをり給ふや。あいなく、

あしひきのやまよりいでむやまびこはそまやま水におとせざらなむ」

と聞え給へれば、「いとうれしく立ち寄りて問はせ給へるを、はじめはうれしかりつれども、のちの御ことばにさしあやまちて、いとどしく、さまも見えて」とて、歌の返しは聞え給はず。さかしらのやうにも人もこそ聞け。をとこのきむたちは、しばしこそあはれがり給ひしか。愛宮ぞおぼしやむことなかりける。

とある。「宮のこのかみ」が兼通のことであると思われる。高光の突然の出家に高光妻や妹愛宮が悲しみに暮れている中、師氏邸を訪れた兼通が高光妻に懸想をし、失敗したことが記されている。こうした点を踏まえてみると、『本院侍従集』における兼通もこれら二作品と同様に造型されているように見えるかもしれない。しかし、【本文3】および【本文4】で確認した二八番から三二番の巧みな言葉遊びのようなやりとりは、女を奪われた後の真剣なやりとりであるとは思われず、兼通の惨めな姿というものを真面目に受け取る必要はないだろう。伊井［一九六六］では家集編纂者が兼通を平中的人物に仕立てようと意図したことが指摘されており、首肯できる。『平中物語』においても女のほうが一枚上手ともいうべき色好みが描かれている（9）。

実は、こうした特徴は『一条摂政御集』「とよかげ」の部についても見られる。たとえば一八番から二〇番は次のような失敗譚となっている。

この翁、かくいひつつ、心やすくもえものいはぬことを思ひ嘆くに、またあらはれたる人もあれば、それにもつつむなるべし、つねにもえ逢はで、からうじてつらかりし君にまさりて憂きものはおのが命のながきなりけり（一八）

つつむ人ある折にて、返事もなかりけり。

翁つねに恨みて、人にはいはずいはみがたといへりければ、女

いはみがた何かはつらきつらからばうらにがてらにきても見よかし（一九）

といへりけれど、男ありければえいかず。

この女、とよかげにかく忍びつつあるも、びなき人にやありけん、聞く人のいみじういひければ、このことやみなむなど契りて、あしたにはなほかなしかりければ、男にやりける

わすれなん今はと思ふをりにこそありしにまさるもの思ひはすれ（二〇）

これをとよかげひき開けてみるに、さらにいふべき心地もせず、あはれにいみじと思ひて、一日二日さしこもりて泣きけり。

こうした描き方は、十世紀半ばの定型だったとみることが可能ではないか。『蜻蛉日記』中巻の鳴滝籠りの記事なども、道綱母が兼家を困らせて振り回す展開が見られ、この定型に類するものと考えられる。

さらに、兼通は安子周辺にいた複数の女性たちとやりとりをしているのだが、先に見たように相手の女性たちの方が色恋に関しては経験がより豊富であるような様子が読みとれるだろう。つまり兼通の姉である安子付きの女房たちは、権門の若君である兼通の初期における恋の相手であったことが予想されるのである。こう考えると二八番から三二番までのようなやりとりも納得され、さらに三五番歌以降の女房たちとのやりとりの中で、兼通が本院侍従に対する未練を吐露してからかわれている様子も説明がつくのである。

また、師輔の子息周辺の人間関係について具体的に記す時雨亭文庫蔵本系では特に、この作品が権門周辺の場において生成されたということがやや強く示されていると思われる。特に三五番以降に関して言えば、兼通と安子周辺とのつながりがより読者にわかりやすい本文になっているのではないだろうか。もちろん、この作品が作品成立当時の兼通における政治的立場と直接に関わっていたわけではあるまいし、時雨亭文庫蔵本系自体がどれほど原態に近いかということは明言できないが、本文から読みとれる事象としてひとまずここで指摘しておく。

五、おわりに

以上見てきたように、『本院侍従集』には兼通周辺の人間関係、とりわけ安子付き女房の存在が認められる。時雨亭文庫蔵本系では詞書に示された人物に対する説明がより具体的であり、流布本系と比較して、より人間関係のわかりやすい本文になっているようである。また、そのことにより、本院侍従およびその周辺の女房たち、つまり安子付きの女房たちが、師輔の息子である兼通をからかっているかのような様相がよりわかりやすくなっているのである。推測を交えて見通しを述べると、本院侍従はじめ安子周辺の女房たちは、兼通に対して和歌を中心とした恋のやりとりの手ほどきをするような役割を担っていたのではないかと考えている。なお詳細な検討を要するが、『一条摂政御集』「とよかげ」にも伊尹と本院侍従との類似するようなやりとりが散見できることとも関連が見いだせるのではないだろうか。

あわせて、本章ではこれまで家集・歌物語・日記文学などと呼ばれてきたもののジャンルを超えて、年上と思しき女性が高貴な男性をふりまわすという展開が共通していることを指摘した。権門の男性たちだからこそ、こうした不格好な姿が描かれても問題がなかったのであろう。おそらく十世紀後半における権門周辺で生成された作品の重要なパターンの一種だったものと考えられる。

これらの視点から『本院侍従集』という、当時権門周辺の場で編まれた家集の位置づけを考えていくことにも取り組んでいくことが今後の課題である。

《注》

（1）高橋［一九六三］、高橋［一九六五］、高橋［一九七二］、高橋［一九七三］、守屋［一九八五］、中嶋［一九九一］、片桐［二〇〇四］などがある。

（2）高橋［一九七二］では次のように述べられている。

（稿者注：二系統の）依拠関係を本文の上からみることは詞書がすくないので困難であるが、最初の本文に注目したい。甲本の系統は「いまはむかし」、乙本の系統は「おぼえおはしましける」である。この二つの本文の前後関係を考えると、物語化することに興味をもっていた時代としては、「おぼえおはしましける」を「いまはむかし」と改変することは考えられるが、その逆は到底考えられない。乙本の系統が古く、「おぼえおはしける上達部の次郎なりける人」と、中心人物の紹介からはじまっているのである。それを後に昔物語にならって「いまはむかし」と改変したのであろう。

（3）『平安私家集　十』（冷泉家時雨亭叢書第二十三巻　朝日新聞社　二〇〇四）

（4）『平安私家集』（日本古典文学影印叢刊８　貴重本刊行会　一九七九）

（5）主なものに、伊井［一九六六］、片桐［一九六七］、守屋［一九七二］、堤［一九九三］などがある。なお、出仕順についてはそれぞれが異なる見解を示している。

（6）第Ⅱ部第一章にてすでに論じている。

（7）片桐［二〇〇二］では、『九条右大臣集』三二番歌「山たかみおもひかくればはるがすみはれぬなげきももえまさるかな」について、「はれぬ思ひ」の「思ひ」を、島原松平文庫本・三手文庫本のように「なげき」とすると、…（中略）…「嘆き」は「投げ木」であって、本来は火を燃やすために使うのであり、その「木」が「もえ」ていると解するほかない。底本にある「おもひ」の語が二重に使われていることから「なげき」と改めたものか」と説明されている。

（8）鈴木［一九九三］に使用した本文の底本は明記されないが、引用されている本文から流布本系本文であることがわかる。

（9）例えば『平中物語』には第一七段（「また、この男、をかしきやうにて得たる女ありけり……」）に見られるように、女に浮気をされてしまう話も収載されている。他にも、第二段（「また、この男の、懲りずまに……」）では「懲りずまに、いひみいはずみある人」との贈答が記されている。また、第三〇段（「また、この男、仏に花奉らむとて……」）では「をかしきたはぶれごといいかはす人」と紅葉のやりとりをして言い負かされる話もある。

《参考文献・引用文献》

伊井　春樹［一九六六］　「本院侍従の宮仕えについて」『平安文学研究』36　平安文学研究会（→『源氏物語論考』風間書房　一九八一）

磯村　清隆［一九九五］「本院侍従集における和歌の機能とテクスト言説」『城南国文』15　大阪城南女子短期大学国語国文学研究室
稲賀　敬二［一九七六］「本院侍従――その生涯と集――」『広島大学文学部紀要』36　広島大学文学部
片桐　洋一［一九六七］「本院侍従」『国文学　解釈と教材の研究』12-1　学燈社
片桐　洋一［二〇〇二］『小野宮殿実頼集　九条殿師輔集全釈』私家集全釈叢書31　風間書房
片桐　洋一［二〇〇四］『平安私家集　十』「解題」　冷泉時雨亭叢書第二十三巻　朝日新聞社
片桐洋一・三木麻子・藤川晶子・岸本理恵［二〇一〇］『海人手子良集　本院侍従集　義孝集　新注』新注和歌文学叢書4　青簡舎
後藤　利雄［一九五六］「本院侍従集に就いて――女は斎宮女御か――」『国語と国文学』33-3　東京大学国語国文学会
鈴木あき子［一九九三］「本院侍従集私論――その歌物語的性格と成立事情――」『国文』78　お茶の水女子大学国語国文学会
鈴木　脩一［一九三四］「本院侍従集攷」『國學院雑誌』40-4　國學院大學
高橋　正治［一九六三］「本院侍従集覚書」『清泉女子大学紀要』10　清泉女子大学
高橋　正治［一九六五］「本院侍従集伝本考」『清泉女子大学紀要』12　清泉女子大学
高橋　正治［一九七二］『本院侍従集　甲本』「解題」　笠間書院
高橋　正治［一九七三］『私家集大成　第一巻　中古Ⅰ』「解題」　明治書院
堤　和博　［一九九三］「『本院侍従集』考――配列に施された虚構を中心として――」『詞林』14　大阪大学古代中世文学研究会（→堤［二〇〇七］に加筆・訂正して収録）
堤　和博　［二〇〇七］『歌語り・歌物語隆盛の頃――伊尹・本院侍従・道綱母達の人生と文学――』和泉書院
中嶋眞理子［一九九一］「現存本「本院侍従集」の諸本について」目加田さくを・中嶋眞理子『本院侍従集全釈』私家集全釈叢書11　風間書房
目加田さくを・中嶋眞理子［一九九一］『本院侍従集全釈』私家集全釈叢書11　風間書房
守屋　省吾［一九七二］『一条摂政御集』考――主として第一部とよかげの成立期について」『日本文学』29　立教大学
守屋　省吾［一九八五］『新編国歌大観　第三巻』「解題」　角川書店
山崎久美子［一九七六］『本院侍従集』の構造と成立事情について」『日本文学』37　立教大学日本文学会

第四章

師輔子女周辺の文学作品における兼通の造型
――『蜻蛉日記』『本院侍従集』『多武峯少将物語』の比較から――

一、はじめに

藤原兼通は師輔二男である。伊尹・兼家・安子らと同腹で、天禄三年の一条摂政伊尹没後に権中納言となり、同年十一月には関白となる。後世の歴史物語や説話における評価がけっして高いとは言えない人物であることは周知の通りであるが、兼通は十世紀後半頃に成立したと思われる諸作品においても、立派な姿が描かれているとは言い難い。兼通がこうした造型をされた一因として、後に弟兼家の系統が権力をもってゆくことになったことが挙げられるだろう。しかし、兼通がまだ生きていた、あるいは没後間もなくといった時期に成立したとおぼしき作品においても、ほかの兄弟たちとは違った、どこか滑稽とも言うべき描かれ方をしている。

この問題については新田［一九八七］にて言及されているが、『蜻蛉日記』と『多武峯少将物語』との類似を指摘し、それらを「同一の生活基盤から生じたもの」と論じるのみである。各注釈書や各作品個別の研究によって言及されることはあるものの、同時代における兼通の造型を横断的に、詳細に検討したものはほとんど見られない。師輔子女周辺で生成し、享受された作品において、登場人物たちがどのように描かれているかを調査することは、作品の成立事情および享受の様相を知る手掛かりとなるだろう。

そこで本章では、師輔子女周辺での生成・享受が想定される『蜻蛉日記』『本院侍従集』『多武峯少将物語』に描かれた兼通の姿を検討してゆく。『蜻蛉日記』と『多武峯少将物語』は兼通に近接する場で生成したのではなく、周囲から見た兼通像が捉えられることが予想される。一方、『本院侍従集』は兼通と密接に関わって成立したと思われるため、『蜻蛉日記』『多武峯少将物語』とはその造型に違いがあるだろう。作品間の類似だけではなく、相違点にも留意しながら考察を進めてゆく。また、各作品の成立背景および成立事情と関連づけて、兼通の造型について試論を述べてゆくこととなる。

二、『蜻蛉日記』下巻の兼通

『蜻蛉日記』において兼通が登場する記事は、遠度による養女求婚記事の後日譚という形で収載されている。養女求婚の終わりは天延二年七月であるが、兼通の記事は同年十月の出来事として記されている。以下に本文を掲出する。

【本文1】

宵のほど、火ともし、台などものしたるほどに、せうととおぼしき人、近うはひ寄りて、懐より、陸奥紙にてひきむすびたる文の、枯れたる薄にさしたるを、取り出でたり。「あやし、誰がぞ」と言へば、「なほ御覧ぜよ」と言ふ。開けて、火影に見れば、

心づきなき人の手の筋にいとよう似たり。書いたることは、「かの『いかなるこまか』とありけむはいかが、

霜枯れの草のゆかりぞあはれなるこまがへりてもなつけてしがな

あな心苦し」とぞある。わが人に言ひやりて、くやしと思ひしことの七文字なれば、いとあやし。「こはなぞ」と「堀川殿の御ことにや」と問へば、「太政大臣の文なり。御随身にあるそれがしなむ、殿にもて来たりけるを、『おはせず』と言ひけれど、『なほたしかに』とてなむ置きてける」と言ふ。いかにして聞きたまひけることにかあらむと、思へども思へどもいとあやし。また人ごとに言ひあはせなどすれば、古めかしき人聞きつけて、「いとかたじけなし。はや御返りして、かのもて来たりけむ御随身にとらすべきものなり」とかしこまる。されば、かくおろかには思はざりけめど、いとなほざりなりや、

ささわけばあれこそまさめ草枯れのこまなつくべき森のしたかは

とぞ聞こえける。ある人の言ふやう、「これが返し、いまひとたびせむとて、なからまではあそばしたなるを、『末なむまだしき』とのたまふなる」と聞きて、久しうなりぬるなむ、をかしかりける。

（天延二年十月、三五四～三五五頁）

兼通からの贈歌は、「かの『いかなるこまか』とありけむはいかが」とあるように、養女求婚記事中で道綱母が兼家に贈った「いまさらにいかなるこまかなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を」詠を踏まえたものである。この和歌は遠度が手紙の一部を破ることで外に持ち出され、兼通にまで伝わったものと考えられる（1）。

突然届けられた太政大臣からの手紙の内容に驚いたことだけでなく、「かしこまる」父倫寧（「古めかしき人」）の姿まで描写され、道綱母側の慌てる様子を読みとることができよう。しかし、兼通は道綱母からの返歌に対する歌を途中までしか作ることができず、記事末尾では「をかしかりける」と評されている。兼通が返歌を完成させることができず悩んでいる様子は、「『末なむまだしき』とのたまふなる」と伝聞の助動詞が使われていることから、「ある人」が他の人物から聞いた情報であろうことがわかる。道綱母周辺の人々に、こうした兼通の様子は知られていたと読めるのである。ほかの人がそれをどのように考えていたかはわからないが、少なくとも作者は「をかしかりける」という評価を残した。

『蜻蛉日記』中に兼通が登場するのはこの箇所だけである。兼家の兄弟ではほかに伊尹・遠度・遠基の名が同じく下巻に記されている（2）。遠度については養女求婚に関わる記事で目立って登場する。遠基はその死去により遠度が喪に服したことが記されるのみである。特に同腹の伊尹および兼通についてその描かれ方を比較すると、兼通の滑稽な様子がよりわかりやすいだろう。兼家・兼通と同腹の伊尹は、天禄三年四月にその立派な姿が描写され、同年十月に薨去したことが記されている。また天延二年九月の疱瘡流行に関わる記事で、伊尹の子挙賢・義孝について言及する際にも名が記される。天禄三年の記事について、以下に本文を掲出する。

【本文２】

ここにも、物忌しげくて、四月は十余日になりにたれば、世には祭とてののしるなり。人、「忍びて」とさそへば、禊よりはじめて見る。わたくしの御幣奉らむとて詣でたれば、一条の太政大臣詣であひたまへり。いといかめしうののしるなどいへばさらなり。さし歩みなどしたまへるさま、いたう似たまへるかなと思ふに、大方の儀式も、これに劣ることあらじかし。これを、「あなめでた、いかなる人」など、思ふ人も聞く人も言ふを聞くぞ、いとどものはおぼえけむかし。（天禄三年四月、二九七～二九八頁）

【本文３】

ついたちの日、「一条の太政大臣、失せたまひぬ」とののしる。例の、「あないみじ」など言ひて聞きあへる夜、初雪七八寸のほどたまれり。あはれ、いかできんだち歩みたまふらむなど、わがすることもなきままに、思ひをれば、例の世の中いよいよさかえののしる。（天禄三年十月、三〇八頁）

これらの記事について、詳細は第Ⅰ部第二章にて言及しているため割愛するが、【本文１】で描写された兼通のような滑稽さは見られない。もちろん伊尹についてほかに書くべきエピソードがなかったという可能性もある。また、兼家の姿を描くことに主眼があったという見方もありえる（３）。しかし、これら【本文２】【本文３】に見られるような伊尹の描かれ方と【本文１】の兼通の描かれ方とは大きく異なっている。兼通の少し間の抜けた姿が際立っていると言えるだろう。

なお、天禄三年当時の伊尹は本文にもある通り太政大臣である。一方、兼通は伊尹の死後内大臣となり、すぐに関白の地位を得る。『蜻蛉日記』のエピソードの時点では太政大臣である。下巻の成立時期については第Ⅰ部第二章でも触れたように、論者は天元元（九七八）年以降と考えるのが妥当であろうと考えている。兼通は前年に亡くなっている。兼家側にいる作者が「をかしけりける」という評価をできたことについては、こうした事情もあるのではないだろうか。加えて、兼通の滑稽な様子が周囲の人にまで知られていたと読むことができる【本文１】は、道綱母周辺における兼通の評価を表しているようである。『蜻蛉日記』という作品が道綱母周辺、すなわち、おそらくは兼家周辺において成立した作品であることが、兼通のこうした描写に結びついたのだと考えられる。

三、『多武峯少将物語』の兼通ときょうだいたちの描写

次に、『多武峯少将物語』に描かれた兼通について検討してゆく。『多武峯少将物語』は兼通の弟高光の出家をめぐる物語であり、高光妻、妹愛宮をはじめ、高光に近しい関係の人物が登場する。師輔子女も多く登場するため、同時代の彼ら周辺を見てゆく上で大変重要な作品である。兼通は二回登場する。以下に、登場順に本文を挙げる。

【本文４】

宮のこのかみの、殿にて人たまへるついでに、ようさりつかた、月のほのかなるに、立寄り給へり。

「昔きくやどのありしへに、いかにぞや。山人はしのびてをり給ふや。あいなく、

あしひきのやまよりいでむやまびこはそまやま水におとせざらなむ」

と聞え給へれば、「いとうれしく立ち寄りて問はせ給へるを、はじめはうれしかりつれども、のちの御ことばにさしあやまちて、いとどしく、さまも見えて」とて、歌の返しは聞え給はず。さかしらのやうにも人もこそ聞け。をとこのきむたちは、しばしこそあはれがり給ひしか。愛宮ぞおぼしやむことなかりける。

【本文5】

五月ついたちに、御はらからの君たち、わりご具しておはしたりけるに、雨の降りたりければ、いしをぎみ、

かかりてふよかはともへどさみだれていとど涙に水まさりぬる

少納言

君がすむよかはの水やまさるらむ涙の雨のやむよなければ

右衛門佐

草ふかき山路をわけてとふ人をあはれと思へどあとふりにけり

宮権亮

いづくへもあめのうちよりはなれなばよかはに住めば袖ぞぬれます

となむ。

【本文5】「宮権亮」はおそらく「宮権大夫」の誤りで、兼通であろうというのが定説となっている。ここは高光のもとへ向かった際の、伊尹・兼家・忠君との唱和である。続けて「冨小路の君たち」、すなわち遠量・遠度・遠基らと高光との唱和が書かれているので、同時期のことであったかもしれない。この場面においては、兼通の和歌について「……なば……ば」という表現がやや不自然に思われる程度である。

しかし、【本文4】には注目すべきである。ここにも『蜻蛉日記』と同様に、兼通の滑稽とも言うべき姿が描かれているからである。【本文4】は、高光の突然の出家に高光妻らが悲しむ中、師氏邸を訪れた兼通が高光妻に懸想をして失敗するという場面である。「をとこのきむたちは、しばしこそあはれがり給ひしか。愛宮ぞおぼしやむことなかりける」とあるので、男兄弟たちが次第に高光の出家に無関心になる様を、兼通を例として描写しているのだろう。それにしても、直前には忠君が師氏邸を訪問し好意的に受け取られている様子が描かれているので、それと比較すると兼通の滑稽さが強調されているようにも見える。なお、忠君の師氏邸訪問場面は次のように描かれている。

【本文6】

また右衛門佐、中納言殿につたへ給へりけり。ついに大姫君の御方につたへ給へりけり。

わすれてもうれしかりける君かとてたそがれどきはまどはれぞする

ひるねして起き給へりけるほどなりけり。右衛門佐「立ちながら聞こえ侍る。あやしけれども、いそぎて内へ参り侍ればなむ。いかにとて、えしばしばも聞こえ侍らず」とて、「いかに世の中を、太刀はきたるさまをも見給ふとてなむ」と聞こえ給へる御返り、「いとうれしう立ちより給へるを、いそぎ給へばなむ。すがたはたそがれどきにおぼつかなくてなむ。ここには、それにもあはれになむ。つれづれのながめに、すまひさへかはりたれば、あの人の影も見えねば、心細きを、問はせ給へるなむ」と聞こえ給へば、「さらば静かに参らむ。太刀はきたるすがたも見給はむとあらば、ゑりくぐつにてもさぶらはむ」とて出で給ひぬ。

右衛門佐が忠君である。忠君のこうした行動が描かれた直後に兼通の場面が描かれている。『蜻蛉日記』下巻でも見られる兼通のこうした滑稽な描かれ方について、新田［一九八七］は以下のように言及している。

『蜻蛉日記』の素材となった道綱母の現実生活と、『多武峰少将物語』の作中人物のそれとがまさに同一の時点にあって、その上同じ交際圏に属していたのであってみれば、日常生活における出来事や、贈答歌の技法において、二つの作品の間に共通するところ甚だ多かったとしても何ら不思議ではない。この二つの作品は、まさに同一期の同一の生活基盤から生じたものに他ならず、しかもそれぞれが、ありのままに写し取るという方法を原則として採用している以上、写し取られた現実生活が、甚だしく類似し、共通する趣を持つに到るのは至極当然でなければならない。

新田［一九七八］における「ありのままに写し取る」という作品の執筆方法の想定については首肯しかねる。「日記文学」「物語」というジャンル分けが意味を持たないことは『多武峯少将物語』が『高光日記』などと呼ばれてきたことからも明らかであろうが、たとえ「日記文学」であったとしても出来事をすべて記録することは不可能である。「書く／書かない」の取捨選択からすでに虚構となってしまうのである。第Ⅰ部で考察したように『蜻蛉日記』下巻には作者の記事構成の工夫が見られるため、少なくとも『蜻蛉日記』については、必ずしも兼通の実際の姿を描写したと断言することはできないのである。とはいえ、『多武峯少将物語』における兼通の描写が、実際の兼通の様子と大きく乖離していると考えることもできないだろう。虚構が含まれているとしても、兄弟間における兼通のイメージを反映した造型であると捉えるのが妥当であろう。

ここで、作品の享受圏にも目を向けておく必要があろう。『多武峯少将物語』の成立および読者については門澤［二〇〇六］に詳しく、安子を中心とした享受が想定されている。『蜻蛉日記』については、第Ⅰ部でも考察した通り、兼家および道綱母周辺を第一次的な

享受圏とみて差し支えないだろう。おそらく『多武峯少将物語』および『蜻蛉日記』の享受圏は、師輔子女周辺の大部分において重なっていたものと考えられる。『蜻蛉日記』下巻成立のほうが『多武峯少将物語』成立より遅かったと仮定すると、『蜻蛉日記』下巻における兼通の記事は、『多武峯少将物語』において高光妻に懸想する兼通の姿を、読者に想起させるものであった可能性もある。

四、『本院侍従集』の兼通

ここまで『蜻蛉日記』下巻および『多武峯少将物語』に描かれた兼通の姿を検討してきた。これら二作品では兼通の滑稽な姿が強調されているかのように描写されており、いずれもそれぞれの作品享受圏において、兼通がどのように見られていたのか、その立場を反映している可能性を考察した。では、兼通と深く関わる場において作られた作品において、兼通はどのように描写されているのであろうか。最後に、兼通を男主人公とする物語的私家集とも言われる『本院侍従集』について触れておく。

『本院侍従集』は、本院侍従の名が付されてはいるものの、兼通を中心とした作品であることは間違いないだろう。冒頭から兼通の紹介をし、兼通の和歌を中心とした贈答歌が収載されていることから、兼通周辺で生成されたものであると推察される。この家集は第Ⅱ部第二章および第三章にて詳述した通り、権門の貴公子である兼通の若き日の恋愛失敗譚とも言うべき物語的な構成を持つ。成立時期については諸説あるが、『為信集』（4）に「本院侍従がしふ」という文言が見えるため、どんなに遅くとも一一世紀初頭までには成立し、それまでに少なくとも為信周辺に流布していたものと考えられる。

『本院侍従集』が先に検討した二作品と異なるのは、先述した通り、これが兼通本人の周辺で生成された可能性が高いという点である。そのため、兼通を貶めたり、他の兄弟たちと比較して劣っているかのように造型したりする必要はなかったはずである。それでは、なぜ『本院侍従集』では兼通の失敗や、伊尹に本院侍従を奪われるような惨めな姿が描かれているのだろうか。それは、同時代までの他作品において主人公格の男性の失敗譚が描かれていることと関連していると考えられる。遡ると『伊勢物語』が特に有名であるが、同時代においても『一条摂政御集』「とよかげ」部や『平中物語』など、高貴な権門の貴公子にかかわる失敗の記述を含む作品が見られる。『蜻蛉日記』における兼家も、立派な姿だけが描かれるわけではない。中巻に収められる鳴滝籠りの記事では、道綱母に振り回される兼家の姿が描写されていると見ることができよう。『本院侍従集』もこうした作品群の中に位置づけられる可能性がある。そのように考えると、『本院侍従集』の兼通はけっして消極的な意図をもって造型されたのではないと言えるだろう。若い権門の貴公子が女性とやりとりをし、時には失敗してしまうという展開のパターンが同時代に存在したと想定すると、『本院侍従集』はそのパターンから大きく外れているとは言い難い。むしろ、「とよかげ」と近い造型であると言えるのではないだろうか。

『蜻蛉日記』下巻、『多武峯少将物語』および『本院侍従集』に描かれた兼通の姿は、確かに、関白や太政大臣、氏長者となるにふさわしいような立派な様子とは思われない。し

かし成立基盤および享受圏が近いとはいえ、それぞれの立場あるいは目的により書かれたものである。そのことが必ずしも実際の兼通が立派ではなかったことを示すとは言えないのである。特に本節にて扱った『本院侍従集』については、若い時期の兼通が描かれている点、および周辺作品との比較から、兼通の実際の人物像をそこに投影することは難しいと思われる。

五、おわりに

以上、十世紀後半頃に成立したと思しき三作品について、藤原兼通がどのように描かれているのか考察してきた。『多武峯少将物語』には師輔子女に関わる描写が多く見られるが、とりわけ兼通の描かれ方だけが滑稽であるように見える。それは、為光の描かれ方と大きく異なっている。『多武峯少将物語』の成立事情については定説を見ないが、安子を中心とした享受が想定できるとすれば、師輔子女の間ではこのように描写しても問題がない人物として兼通は捉えられていたと考えられる。『多武峯少将物語』についてはさらに詳細な検討を要するが、ここでは兼通の描写が特徴的であるという表現上の現象を確認した。

『蜻蛉日記』下巻の兼通については、『多武峯少将物語』を参考にした、あるいはパロディのように利用した可能性があるのではないか。下巻に師輔子息たちに関わる記事があることから、彼らおよびその周辺を読者の一部として想定していた可能性が考えられる。おそらく、『蜻蛉日記』の読者は『多武峯少将物語』の読者と大部分が重なっていただろう。『蜻蛉日記』作者のこうした仕掛けに気づく者は多かったのではないだろうか。このように考えると、いずれの作品も師輔子女周辺の文学圏を強く意識したものであったと言えるかもしれない。

一方、『本院侍従集』における兼通の造型は、成立の場や家集の性格から考えて、『多武峯少将物語』『蜻蛉日記』とは異なるものである。『本院侍従集』に見える兼通は色恋に慣れない権門の若君であり、非常識とも言える行動をとる人物ではない。そこに、ほかの兄弟たちと比較して劣っている兼通の姿をみとめることはできないだろう。こうした兼通の描写方法の相違点に、各作品の作者あるいは編者の立場と作品成立の目的が強く表れていると考えられる。

兼通は本章で扱った作品群において、特にその描写が際立っている人物である。それゆえ造型の特徴を捉えやすい。しかし十世紀後半の作品群の様相を明らかにするためには、兼通以外の人物造型も調査し、さまざまな角度から考察を加える必要があろう。今後もこうした作品群の享受者であり登場人物でもある師輔子女の造型をより深く検討し、彼ら周辺の文学活動を解明してゆきたい。

《注》

（1）第Ⅰ部第四章にて詳しく論じている。

（2）下巻に登場する兼家の兄弟たち、とくに伊尹・兼通・兼家らの記事については、第Ⅰ部第二章で詳しく論じている。

（3）たとえば白井［一九九六］は、「伊尹に兼家を重ね合わせて見たという記事は、単に偶発的な体験を記しただけという底のものではないはずである」と指摘している。

（4）『為信集』の成立についても諸説あるため、成立時期を確定しがたい。藤川［二〇一〇］では、「本院侍従がしふ」を持っていたことを傍証として、為信は中納言藤原文範男である可能性が高いと論じている。

なお、以下に『為信集』の当該本文を掲出しておく。

ふみなどやりし人、あまになりて、本院侍従がしふやあるといふ返事に

世中をきみがそむきしその日よりわが人しれぬしふもたえにき

返し

人ごとにきみがとどむるしふなればおぼろけにてはたえじとぞおもふ

《参考文献・引用文献》

白井たつ子［一九九六］「兼家に関する記事の維持」『蜻蛉日記の風姿』「第二章　『蜻蛉日記』の構成」風間書房

新田　孝子［一九八七］『多武峰少将物語』と『蜻蛉日記』との関係」『多武峰少将物語の様式』風間書房

藤川　晶子［二〇一〇］「解説」片桐洋一・三木麻子・藤川晶子・岸本理恵『海人手子良集　本院侍従集　義孝集　新注』新注和歌文学叢書4

門澤　功成［二〇〇六］『多武峯少将物語』の成立基盤と読者――あい宮の担う師輔没後の閉塞感を基点として」『中古文学』78　中古文学会

終章

以上、十世紀後半における仮名文学の諸相、とりわけ藤原師輔子女周辺における文学的営為を解明してゆくため、第Ⅰ部では『蜻蛉日記』の記事における師輔子女周辺の人物に関わる記事とその享受を、また第Ⅱ部では主に『一条摂政御集』および『本院侍従集』にみとめられる人物造型と人間関係を中心に、師輔子女周辺の文学活動を考察した。

第Ⅰ部第一章では、『蜻蛉日記』上巻・中巻の記事を扱った。上巻については師輔女である登子および怠子の記事群を取りあげ、そこに村上天皇崩御記事があること、および守平親王（後の円融天皇）に関わる記述があることに注目し、後に円融天皇の御世が訪れることを踏まえつつ当該記事が書かれたことを考察した。『蜻蛉日記』に記された天暦八年から天延二年の間は村上・冷泉・円融三代の治世であるが、天皇および東宮について語られることは少ない。怠子関連記事については、道綱母から怠子への贈り物が「五の宮（守平親王）」に渡ったことが記される。そして直後には、後に守平親王の親代わりとなった登子が宮中より下がってきた記事が置かれている。こうした一連の記事群が、円融天皇と自分たちとが繋がっていたことをほのめかすような効果を持っていたことを論じた。また、登子関連記事群について、いわゆる「家の女性」にとどまらない道綱母の在り方を示している可能性についても言及した。道綱母の転居が登子の退出に合わせたものであったと思しき点、および道綱母が和歌のやりとりを通じて登子と盛んに交流している点から、道綱母が偶然そのような機会を得たと考えるよりも、彼女の文才を活かす場が与えられていたと想定するほうが妥当であると結論づけた。あわせて、師輔の兄弟たちの名が記される中巻の記事について検討した。中巻には安和二年の政変に関わる記事があるが、この政変により兼家を取り巻く情勢に変化が起こったであろうことが推測できる。中巻のみに記された実頼・師氏・師尹の名は、安和二年の政変および彼らの死去による世代交代を読者に想起させるものであった可能性を指摘した。

続く第二章から第五章では、下巻における伊尹・兼通・遠度の記事を検討した。従来、その記事の多様性を問題とされてきた下巻においては消極的な評価が少なくなかった。しかし、道綱および養女に関わる記事からも読み取れるように、記事の多様性ゆえ登場人物も増えてゆく。そのため、上巻冒頭に示されたようないわゆる「蜻蛉的主題」を前提とした読み方では捉え難い側面が下巻にはあると思われる。よって、道綱母と兼家との夫婦関係について記されているはずの書物であるというような先入観を排し、師輔子女周辺で生成された『蜻蛉日記』下巻を捉えるという視座から考察を進めた。

第二章では、師輔の息子たちの記事について考察を加えた。兼家の兄弟たちは作品中で下巻にしか登場しない。本章で特に注目したのは、伊尹についての記事が天禄三年に見られること、また兼通に関する記事と伊尹の子息の記事、さらには遠度による養女求婚記事

がいずれも天延二年に記されていることである。なぜなら、この天禄三年および天延二年という年は、兼家をとりまく状況に変化の訪れる年だからである。天禄三年に摂政であった伊尹が世を去ると、それまで兼家より下の官職であった兼通が関白となる。また、兼通は天延二年に太政大臣となる。こうした年に彼らの記事をここに収めている意味について、記事の叙述と彼らの動向とをあわせて検討した。養女求婚記事については、兼家と兼通とを位置づけるキーパーソンが遠度であったと見て、天延二年当時の兼家周辺における政治の状況を暗に示している可能性があることを指摘した。また、養女求婚記事の後日譚として置かれる兼通の滑稽な姿も、兼家との比較からなされた造型であることを述べた。以上のことから、『蜻蛉日記』下巻は、文学に託しつつ、後の兼家の優位な立場がほのめかされているものである可能性を論じた。これは『蜻蛉日記』下巻の成立時期にも関わることである。なお、下巻の成立については定説を見ないが、本章ではひとまず天元元（九七八）年以降の成立と見て考察をおこなった。

第三章では、兼家の異母弟である遠度の和歌を検討した。遠度は下巻でもっとも「物語的」あるいは「説話的」であると評されてきた養女求婚記事において、求婚者として重要な人物である。この記事については従来、道綱母と兼家との関係性から、『蜻蛉日記』の主に上巻および中巻に焦点をあてた際に捉えうる主題との整合性を考えようとするものが大半であった。しかし先述したように、下巻の記事あるいは記事群を検討してゆくにあたって、上巻冒頭の自己規定を前提としない読解も必要であろう。下巻に収められた個々の記事ごとに、個別的に検討してゆく試みが求められる。本章でもこのような視点から、養女求婚記事の考察を進めた。先行研究においても幾例かの指摘はなされているが、日記中に全五首が収められる遠度の和歌の中でも、道綱母とのやりとりについては、上巻の早い時期に収められている和歌との表現上の類似が見られる。本章ではそれらに加え、さらに数例の類似表現を指摘した。あわせて、構成面においても上巻との類似が見られることを論じた。上巻および下巻ともに「ほととぎす」を用いた贈答を経て求婚がなされ、「なげきつつ」という初句を持つ歌で男女関係に危機が訪れるという展開に注目した。こうして検討してゆくと、養女求婚記事は従来論じられてきた以上に上巻の世界を強く踏まえたものであり、遠度の和歌はその部分的再現を図っているとさえ言えそうである。遠度が上巻の読者であり、下巻の登場人物ともなり得たことが無関係ではないだろう。こうした類似に、作品の成立および享受の状況が反映されている可能性がある。とはいえ、下巻の場合は、求婚をめぐる滑稽とも言うべき騒動の中で、遠度の和歌が上巻の世界をなぞりつつも、それをいわば諧謔的なものに変換してゆくような形で日記中に配置されていることを考察した。

第四章では、養女求婚記事における手紙を取りあげた。『蜻蛉日記』には当該記事以外にも多くの手紙が描写されている。その中でも特に、道綱母による「いまさらにいかなる駒かなつくべきすさめぬ草とのがれにし身を」という詠が破り取られる手紙に注目し、その和歌の流出および伝播の様子を考察した。「いまさらに」詠は道綱母によって兼家からの手紙の返事として書きつけられたあと、その手紙を見た遠度によって破り取られ、最後には

兼通にまで伝わっていたことが明らかになる。こうした状況について、まず、歌の流出が手紙を「破る」という行為から始まる点について検討した。手紙は養女求婚記事において、兼家の言葉を伝えるものとしてたびたび用いられる。遠度が「いまさらに」詠の部分を破ることになったのも、遠度が兼家からの言葉を求め、手紙を見せるよう要求したことに端を発する。遠度は兼家の手跡を判別でき、さらにそれが証拠能力を持つと認めていたと思われる。こうした状態のなか、道綱母の筆跡で書かれた「いまさらに」詠の部分を破って持ち出したこと、およびそれが兼通にまで伝わっていったことを、下巻における再構成の特徴の一つとして位置づけた。すなわち、この手紙に関わる一連の騒動について、自作が他者の手に渡ってゆく様子を記したものであると考察したのである。書かれたものが外に流出してゆく様子は、ある種『蜻蛉日記』の「自己言及」的叙述であるとも言えるのではないか。また、この歌を養女求婚記事中の主だった人物たちが皆目にしている点にも注目した。「いまさらに」詠の伝達・伝播のありようを考えることで、養女求婚記事に見える複雑な人間関係、および登場人物と作品享受圏とを改めて捉えなおした。第三章でも触れたように、『蜻蛉日記』の読者は登場人物となり得る。同時に、登場人物が読者にもなり得る。兼家および道綱母周辺の関係者たちは『蜻蛉日記』に書かれることを意識していた可能性があり、こうした状況を踏まえて養女求婚記事の手紙に関わる記述の再構成が行われたと考えられることを指摘した。

第五章では、養女求婚記事中に見える「女絵」の構図と、そこに添えられた道綱母詠の表現を再検討することで、当該記事が養女求婚記事、ひいては『蜻蛉日記』下巻においてどのように位置付けられるのかを考察した。まず、女絵が和歌を書きつけられたのち遠度邸に戻されたことから、遠度が道綱母の和歌を求めて女絵を贈った可能性があることを確認した。その上で、道綱母が書きつけた和歌は遠度からのメッセージへの返歌であったことを述べた。次に「やもめ住みしたる男」の絵の構図と、そこにつけられた道綱母の和歌を検討した。遠度は絵に自分が物思いしている姿を重ねていたのかもしれないが、道綱母は複数の女性に手紙を書いている浮気な男の様子を捉え、詠んでいる。このような男の姿は、養女求婚記事の終末、すなわち遠度が「人の妻」を盗み破談になるという部分と対応している。このことから、女絵の記事は養女求婚記事全体を象徴的に表し、求婚記事の縮図ともいうべきものであることを指摘した。また、絵に書きつけられた「ささがにのいづこともなく吹く風はかくてあまたになりぞすらしも」の詠についても考察を加えた。この和歌は「ささがに」が巣を「掛く」ことに「書く」意を掛けるものである。それが道綱母の手によって絵に書きつけられたことから、当該記事は下巻に頻出する「書く」行為、および「書かれたもの」を記していく流れの中に位置付けられると考えられる。こうした点からも、記事の多様化により「蜻蛉的主題」と呼ばれるものからの乖離が指摘されてきた下巻の記事および記事群が、実はある程度有機的な連関性を持っていることを指摘した。

第Ⅰ部は以上五章にわたって、『蜻蛉日記』における師輔および師輔子女の記事について検討した。繰り返しになるが、作者周辺の出来事を記すという「日記」の性質上、登場する人物は必然的に作者周辺の人物となる。同時に、そうした人々は作品の第一次的な享受

者となるだろう。『蜻蛉日記』におけるこうした側面について、師輔子女および兄弟たちを対象とし、考察したのが第Ⅰ部である。彼らは『蜻蛉日記』上巻を読んだ上で、そのことを作者にアピールするかのようなふるまいをした可能性がある。作者もそれを知った上で、下巻を記したのであろう。このように、作者と読者（＝登場人物）双方向の関係性を、『蜻蛉日記』下巻から読みとることができるのである。

第Ⅱ部では、『蜻蛉日記』と非常に近い場で生成したと考えられる『一条摂政御集』および『本院侍従集』を主として取りあげた。特に、いずれの家集にも深く関係していると思われる本院侍従の役割を見てゆくことで、同時代の師輔子女周辺における文学の特徴を横断的に検討した。

第一章では、『一条摂政御集』の検討をおこなった。はじめに「大蔵史生倉橋豊蔭」なる人物に仮託している点、一番歌「あはれともいふべき人はおもほへで身のいたづらになりぬべきかな」の発想が『清慎公集』および『九条右大臣集』に収められている和歌と類似している点から、この家集が忠平一門に関わる家集の流れを汲むものであることを再確認した。続けて、本院侍従がどのような人物であったのか、先行研究を踏まえながら確認し、『本院侍従集』との関係にも注意して『一条摂政御集』の本院侍従関連歌群を検討した。特に家集の成立について、『一条摂政御集』の他撰部に本院侍従独詠歌群が収められていることから、少なくとも『一条摂政御集』他撰部については本院侍従周辺で纏められた可能性が高いことを指摘した。成立時期にも関わる問題であるが、本院侍従は伊尹および兼通と近しい関係にあったため、晩年になってからの家集編纂依頼も可能であっただろう。『本院侍従集』についても同様であると考えられる。このように権門の子息たちが恋愛関係にあった女に家集の編纂について協力を依頼するという構図に注目すると、『蜻蛉日記』における兼家と道綱母の関係が想起される。『大鏡』に「かげろふの日記と名づけて、世に広め給へり」という文言もあり、また、先行研究で盛んに論じられてきたように、『蜻蛉日記』成立には兼家が関わっていた可能性が高い。関与の程度や方法がどうであれ、師輔の子息たちに深く関連する作品の生成に、彼らの近くにいる文才ある女性が関わっていたことは明らかである。本章ではこうした作品成立に関わる問題についても、師輔子女周辺における文学作品の特徴として指摘した。

第二章では、『本院侍従集』六・七・八番歌を詳細に見てゆくことで、兼通および本院侍従の人物造型を考察した。『本院侍従集』には二系統の伝本があるが、より人物関係が詳しく記されている時雨亭文庫蔵本系の本文を主に利用し、人物の描かれ方を確認した。まず、時雨亭文庫蔵本系で解釈してゆくことの必要性を検証した。一例として、流布本系本文「ねぬる夜」に対して、「ねぬなは」となっている七・八番歌の初句を取りあげた。家集の配列から読みとることのできる男女の関係性や先行する用例などから、当該の贈答については、時雨亭文庫蔵本系本文のほうが流布本系本文よりも整合性がとれている本文であることがわかった。もちろん、整合性がとれているからといって善い本文であるというわけではない。しかし、従来ほとんどの研究が流布本系本文のみによってなされてきた状況には問題

があり、今後は時雨亭文庫蔵本系本文にも目を向けなければならないことを指摘した。その上で、時雨亭文庫蔵本系本文を用いて六番歌詞書の場面を検討した。特に「やりど」という場所、およびそこで使われている「焼き石」に注目すると、「やりど」はまだ共寝をする関係になっていない男女が語らう場所であり、「焼き石」は女が男を追い払うために使われることがあったことが明らかになった。こうした点から、当該歌群には女に振り回される男の姿がみとめられることを指摘した。実際の兼通と本院侍従がどのような関係であったのかは定かではないが、少なくとも当該歌群においては本院侍従が余裕をもって兼通の相手をしている様子が見える。これは、第Ⅱ部第一章で検討した伊尹と本院侍従との関係と類似している。さらに、伊尹については本院侍従だけでなく、他の女性との関係においても女性の優位な様子が見られた。こうした面を同時代作品の特徴として捉え、さらに考察を加えたのが、続く第三章である。

第三章では、冒頭の記述より本院侍従が師輔女である安子に仕えていたと考えられることから、安子周辺にまで範囲を広げ、『本院侍従集』の贈答歌を検討した。まず三一・三二番の贈答から、本院侍従が兼通よりも一枚上手な様子でやりとりをしていることを確認した。さらに、三五番歌から作品末尾の三九番歌における兼通と「女のともだち」「女の御かたのごたち」とのやりとりを検討した。本院侍従が安子に仕えていたとすると、「女のともだち」および「女の御かたのごたち」とは本院侍従の同僚女房、つまり安子付き女房であったことが想定できる。彼女らも師輔子女周辺の人物であったと言えよう。三五番から三九番の贈答歌群を詳細に検討したところ、先に検討した伊尹と本院侍従、あるいは兼通と本院侍従の贈答のように、女性のほうが若い男性をからかっているかのような様子がみとめられた。こうした傾向は『本院侍従集』および『一条摂政御集』だけでなく、『平中物語』にも見られる。若い男性ではないが、高貴な男性という点では『蜻蛉日記』中巻における鳴滝籠りの記事にも、兼家が道綱母に振り回されている様子が描かれている。このことから、手慣れた女性が男性を振り回すような定型が十世紀後半にあった可能性を考察した。また、十世紀後半においては、本院侍従のような女性たちが権門の若君にとって初期の相手であった可能性があることを指摘した。加えて、推測の域を出ない問題ではあるが、本院侍従をはじめとする女房たちが、権門の若君たちに和歌贈答を含む恋のやりとりを手ほどきしていた可能性にも言及した。

第四章では、ここまでの検討を踏まえ、藤原兼通が同時代作品でどのように描かれているのかを確認し、従来の研究の問題点とともに指摘した。第Ⅰ部第二章において考察した『蜻蛉日記』下巻に描かれた兼通の造型、および第Ⅱ部第二章・第三章において論じた『本院侍従集』における兼通像を再確認し、さらに『多武峯少将物語』における兼通の造型にも検討を加えた。『多武峯少将物語』には師輔子女が多数登場する。高光および愛宮周辺について詳細に描かれているのは当然のことながら、他の兄弟たちに関わるエピソードもたびたび挿入されている。そのような作品の中で、特に兼通は高光妻に懸想をするという、どこか非常識な人物として登場する。男兄弟たちが高光出家の悲しみからすぐに抜け出してしまった例として挙げられているエピソードであるが、同時代の兄弟間における兼通の

認識が垣間見える。この造型には『蜻蛉日記』下巻における兼通の姿との類似がみとめられ、享受圏が重複する点とあわせて、『蜻蛉日記』下巻の描写が『多武峯少将物語』の場面を想起させるものであった可能性について言及した。また、『本院侍従集』については兼通が若い頃を描いた作品であること、同時代に同様の型であると思われる作品が近い場において存在することから、恋の失敗を描いているとはいえ、ほかの兄弟たちと比較して兼通が滑稽な人物であると描写する意図はなかったであろうことを考察した。以上三作品における兼通像の検討より、兼通の造型は概ね似通ってはいるが、それが兼通の実際の姿であったとは必ずしも言えないことを確認し、各作品の成立背景により異なる兼通の姿を捉え得ることを指摘した。

第Ⅱ部では以上の四章より、十世紀後半における師輔子女周辺の文学作品生成にかかわる事情を確認した。特に家集の編纂については、本院侍従のような年上とおぼしき女房たちが権門の若い貴公子と和歌の贈答をする役割を担っていて、その折の詠歌を家集に纏めるという流れが想定できる。関わりのある女房たちに家集の編纂ないしは協力を依頼するということが当時おこなわれていて、伊尹・兼通についてはそれが安子周辺の女房たちであったのではないかと考えられる。こうした作品生成の土壌が、十世紀後半の師輔子女周辺に存在したのであろう。

本論文では、十世紀後半の師輔子女周辺において、文学作品がどのように生成されていたのかを、『蜻蛉日記』『一条摂政御集』『本院侍従集』の三作品から探った。これらの作品に目立って登場する人物については扱うことができたが、まだ彼らの文学活動の一端を明らかにしたにすぎない。今後は師輔子女に関わる記述をさらに調査し、全体的に論じる必要がある。また、師輔子女が多く登場する『多武峯少将物語』も調査対象にし、彼らの描写を検討しなければならない。さらに、次世代ではあるが、成立時期を同じくする作品として『義孝集』がある。伊尹の子義孝は天延二年に病没しているため、収載される和歌の詠作時期はまさに『蜻蛉日記』と重なっている。『蜻蛉日記』下巻における道綱関連記事ともあわせて検討すべき作品である。今後も十世紀後半における兼家周辺の文学活動を従来と異なる視点からみてゆくことで、『蜻蛉日記』成立の背景を解明してゆきたいと考えている。

初出一覧

※すべての章において、旧稿に加筆修正を施した。ただし、いずれも大幅な論旨の変更はしていない。

序章　書き下ろし

第Ⅰ部　『蜻蛉日記』の表現と同時代の享受 ――下巻を中心に――

第一章　原題「『蜻蛉日記』上巻における登子・怠子関連記事と道綱母 ――「五の宮」への言及をめぐって――」『日記文学研究誌』一七（二〇一五・六）

第二章　原題「『蜻蛉日記』下巻の政治的性格 ――伊尹・兼通・遠度の記事を中心に――」『平安朝文学研究』復刊一六（二〇〇八・三）

第三章　原題「『蜻蛉日記』下巻「養女求婚記事」の「ほととぎす」 ――上巻との照応――」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』五六‐三（二〇一一・二）

第四章　原題「『蜻蛉日記』下巻「養女求婚記事」における手紙 ――破り取られた「いまさらに」詠を中心に――」古代中世文学論考刊行会編『古代中世文学論考　第二九集』（二〇一四・三）

第五章　原題「『蜻蛉日記』下巻「養女求婚記事」における「女絵」」『WASEDA RILAS JOURNAL No.4』（二〇一六・一〇）

第Ⅱ部　藤原師輔子女周辺の文学活動 ――伊尹・兼通・本院侍従を中心に――

第一章　書き下ろし

第二章　原題「『本院侍従集』の贈答歌 ――六・七・八番歌の解釈を中心に――」『平安朝文学研究』復刊一七（二〇〇九・三）

第三章　書き下ろし（二〇〇八年度和歌文学会一月例会（二〇〇九年一月、於青山学院大学）にて、『本院侍従集』における兼通とその周辺」と題した口頭発表した内容をもとにしている。）

第四章　書き下ろし

終章　書き下ろし